

写真1 ポーランド国旗（国内向け）  
[2013年撮影：根本]



写真2 クラクフ・ゲットー跡の英雄広場にあるイスのインストール  
[2013年撮影：根本]



写真3 シンドラーの琺瑯工場（右）とクラクフ近代美術館（左） [2013年撮影：根本]



写真4 カジミェシュ地区のユダヤ・レストラン『ノアの方舟』（ユダヤ教とキリスト教は聖典の旧約聖書を共有している）  
[2013年撮影：根本]



写真5 カジミェシュ地区のシナゴグ前の広場に面するユダヤ・レストラン『アリエル』  
[2013年撮影：根本]



写真6 同じく『アリエル』の夜景（コンサートの告知がある）  
[2013年撮影：根本]



写真7 「スターリンからの贈り物」文化科学宮殿  
[2013年撮影：根本]



写真8 「モスクワ・スタイル」のアパート  
[2013年撮影：根本]





写真9 現代風の高層建築群  
[2013年撮影：根本]



写真10 ワルシャワ中央駅の地上部分  
[2013年撮影：根本]



写真11 文化科学宮殿のワルシャワ観光案内所  
[2013年撮影：根本]



写真12 周りを現代建築に囲繞される文化科学宮殿の図  
[2013年撮影：根本]



写真13 労働者の像(手に持った本にはマルクス、エンゲルス、レーニンとある)  
[2013年撮影：根本]



写真14 これも労働者の像  
[2013年撮影：根本]



写真15 科学技術博物館の内部：コンピューターの展示  
[2013年撮影：根本]

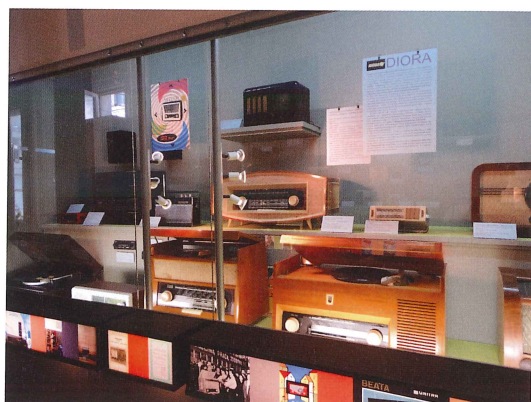


写真16 同じくラジオの展示  
[2013年撮影：根本]



写真17 国の重要な産業としての「炭坑」の展示室  
[2013年撮影：根本]





写真18 復元保存されているワルシャワ・ゲッソーの出入り口 [2013年撮影：根本]



写真19 壁に嵌め込まれたゲッソーのあった場所の地図と解説 [2013年撮影：根本]



写真20 工場敷地のメイン・エントランス（門は復元したレプリカ） [2013年撮影：根本]



写真21 同夜景  
[マヌファクトゥーラのウェブ・サイト より]



写真22 同中庭 [2013年撮影：根本]



写真23 同中庭 [2013年撮影：根本]



写真24 中庭のパノラマ（左端はレストラン棟、左奥がモール、遊具を挟んで右は旧発電所） [2013年撮影：根本]



写真25 中庭のパノラマ（中央は消防署、その右は旧綿布仕上げ棟、右端はビールの飲めるイベント・トラム）  
[2013年撮影：根本]



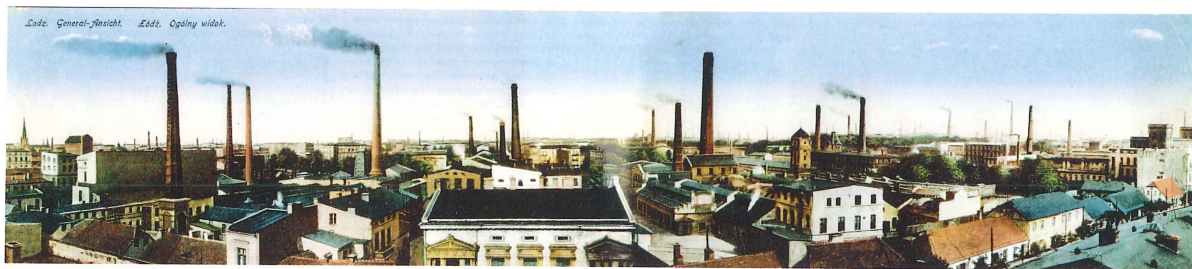


写真26 19世紀末のウッチのパノラマ [参考資料(1)より]



写真27 イズラエリ・ポズナンスキの肖像  
[参考資料(1)より]



写真28 1873年の商標(ロシア語表記で鳥瞰図が印刷されている)  
[参考資料(1)より]



写真31 1896年の商標(ロシア語表記で鳥瞰図が印刷されている)  
[参考資料(1)より]



写真29 工場労働者のための集合住宅(まだ再整備されていない)  
[2013年撮影: 根本]



写真30 工場労働者のための集合住宅(まだ再整備されていない)  
[2013年撮影: 根本]



写真32 奥にシネマ・コンプレックス(旧プリント工場)  
[2013年撮影: 根本]



写真33 中庭には子供たちに人気のSLが置かれている  
[2013年撮影: 根本]



写真34 和食レストラン『花寿司』(ポーランドには驚くほど多くの寿司店がある)  
[2013年撮影: 根本]



写真35 『花寿司』のランチ(巻物いろいろ)  
[2013年撮影: 根本]





写真36 旧消防署棟の前でジャズのライブ  
[2013年撮影：根本]



写真37 中には夏季限定で砂を敷き詰めた『人工ビーチ』が作られる  
[2013年撮影：根本]



写真38 併設された『ビーチ・バー』  
[2013年撮影：根本]

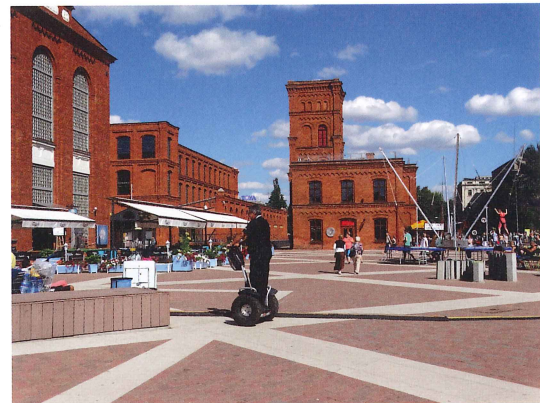


写真39 広い敷地内、警備員は『セグウェイ』で巡回  
[2013年撮影：根本]



写真40 レストラン棟の夜景  
[2013年撮影：根本]



写真41 中庭夜景  
[2013年撮影：根本]



写真42 旧発電棟の夜景  
[2013年撮影：根本]



写真43 ショッピング・モール棟（新しく作られた）  
[2013年撮影：根本]

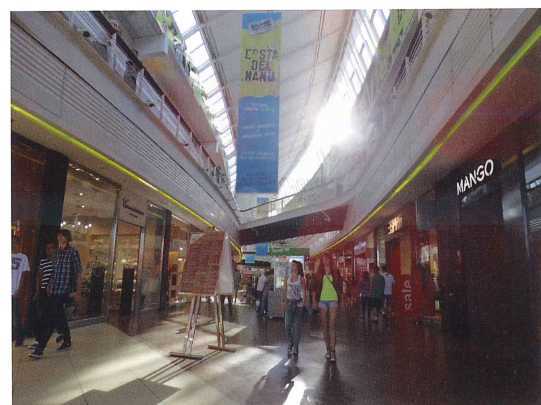


写真44 ショッピング・モールの中  
[2013年撮影：根本]





写真45 スポーツ・クラブ  
[2013年撮影：根本]



写真46 ポズナンスキ邸（ウッチ市博物館）  
[2013年撮影：根本]



写真47 ポズナンスキ邸の豪華なエントランス・ホール  
[2013年撮影：根本]

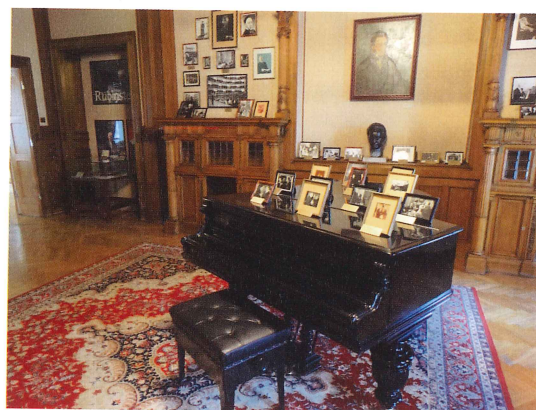


写真48 アルトゥール・ルービンシュタインの遺品コレクション  
[2013年撮影：根本]



写真49 ルービンシュタインの『手型』  
[2013年撮影：根本]



写真50 イズラエリ・ポズナンスキの書斎  
[2013年撮影：根本]



写真51 大食堂 [2013年撮影：根本]

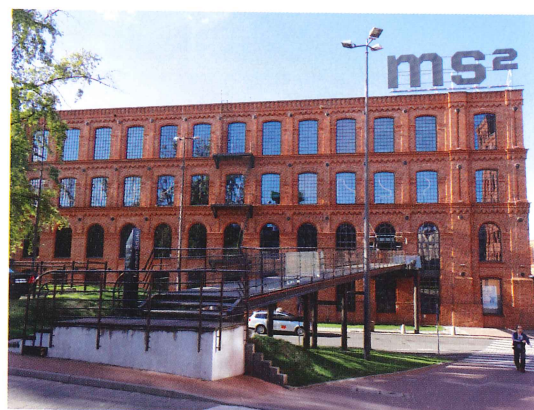


写真52 「ms<sup>2</sup>」美術館 [2013年撮影：根本]



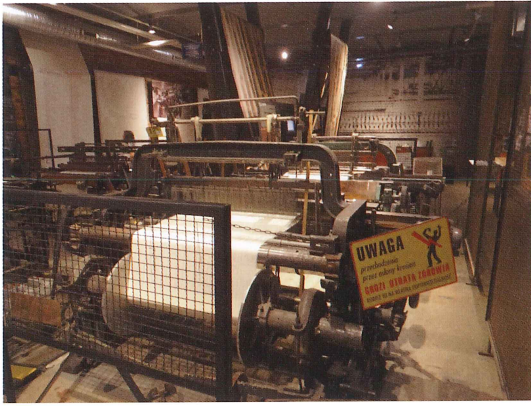


写真53 工場博物館で動態保存されている自動織機  
[2013年撮影：根本]



写真54 オグロドーヴァ通りから見たホテル・アンデルス・ウッチ  
[2013年撮影：根本]

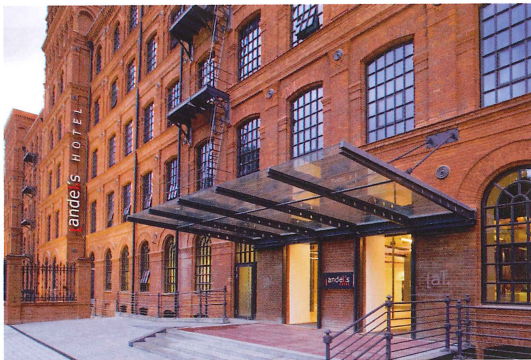


写真55 ホテル・エントランス  
[ホテル・アンデルス・ウッチのウェブ・サイトより]



写真56 客室フロア（中央は吹き抜け）  
[2013年撮影：根本]

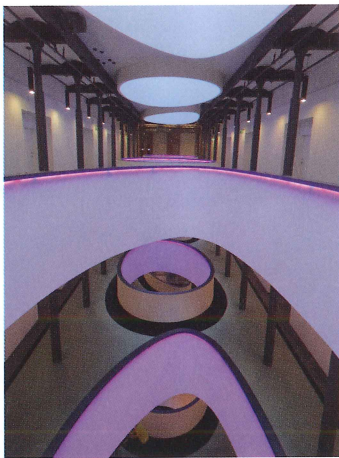


写真57 吹き抜け  
[2013年撮影：根本]

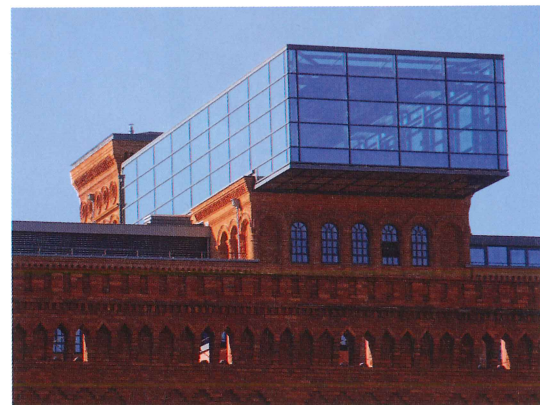


写真58 屋上に増設されたプール（ガラス張り）  
[2013年撮影：根本]



写真59 白亜の工場 [2013年撮影：根本]



写真60 口の字型の建物本体と中庭の蒸気機関棟  
[2013年撮影：根本]



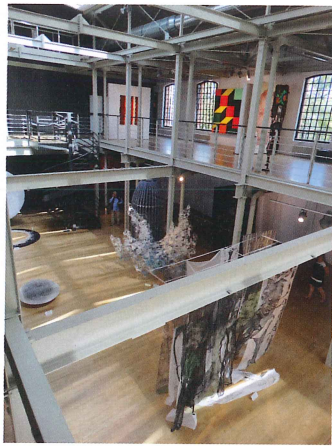


写真61 トリエンナーレの特別展  
[2013年撮影：根本]

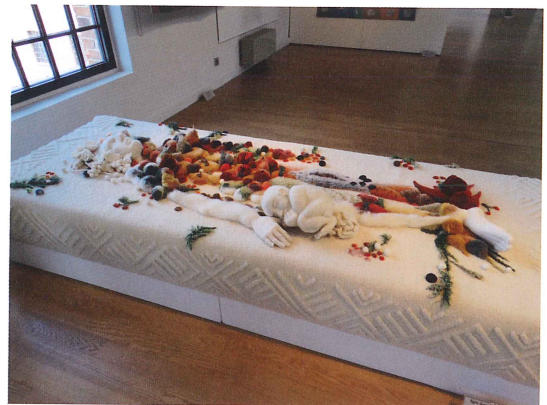


写真62 トリエンナーレの特別展  
[2013年撮影：根本]

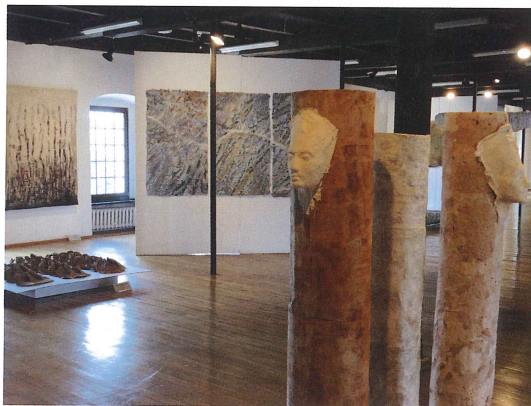


写真63 トリエンナーレの特別展 [2013年撮影：根本]

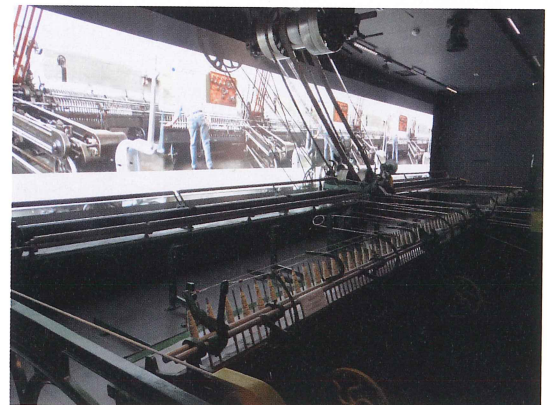


写真64 ジェニー紡績機 [2013年撮影：根本]



写真65 赤々と照らし出された蒸気機関の運転シミュレーション  
[2013年撮影：根本]

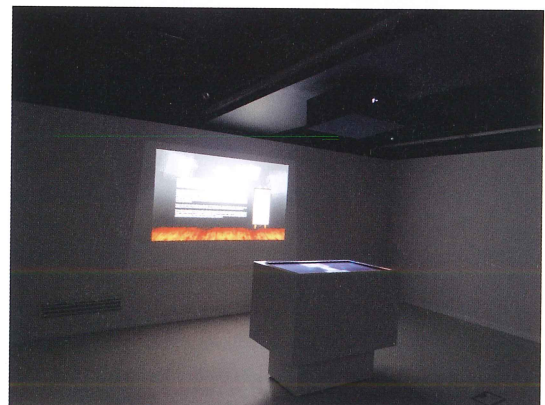


写真66 プロジェクターで画像を映す方式の展示  
[2013年撮影：根本]



写真67 木造建築の野外展示 [2013年撮影：根本]



写真68 手工芸の工房が入る [2013年撮影：根本]





写真1 ヴィエリチカ岩塩鉱山の入口の建物 シャフトが見える



写真2 シャフトの入口 ここからどんどん降りる



写真3 人力の綱巻機

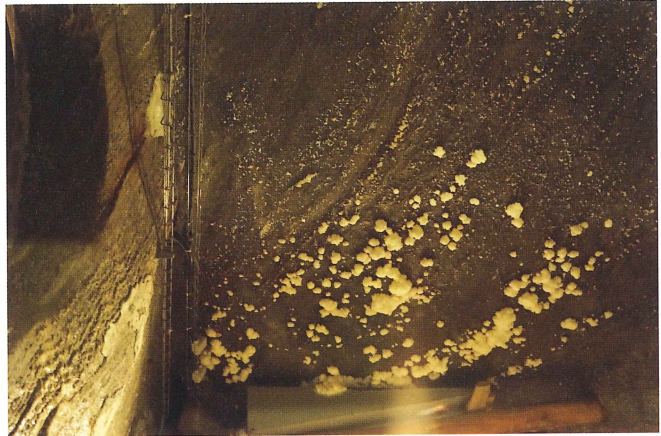


写真4 翹のように吹き出した塩



写真5 Janowice Chamberの「偉大な伝説The Great Legend」



写真6 表面に浮かんだ塩の結晶



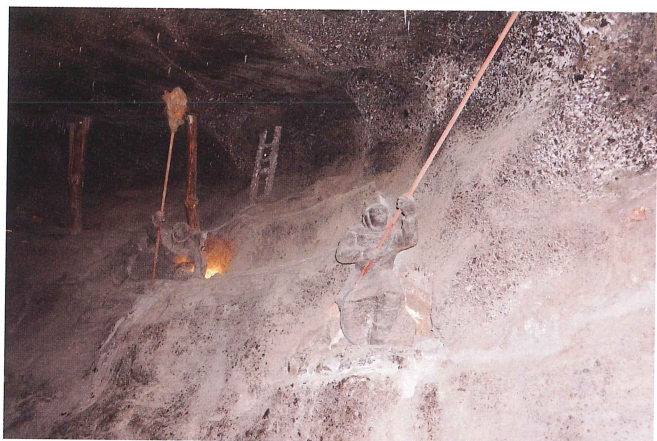


写真7 penitentの像 メタンを燃やして爆発を防ぐ



写真8 坑道内の運搬車

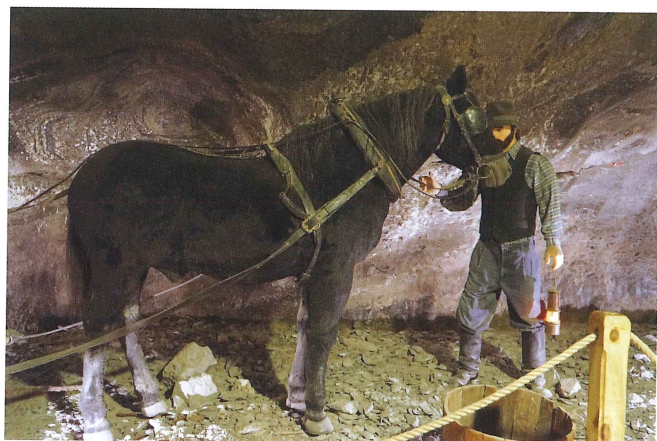


写真9 坑道内の馬



写真10 The Casimir the Great Chamber にある王の胸像

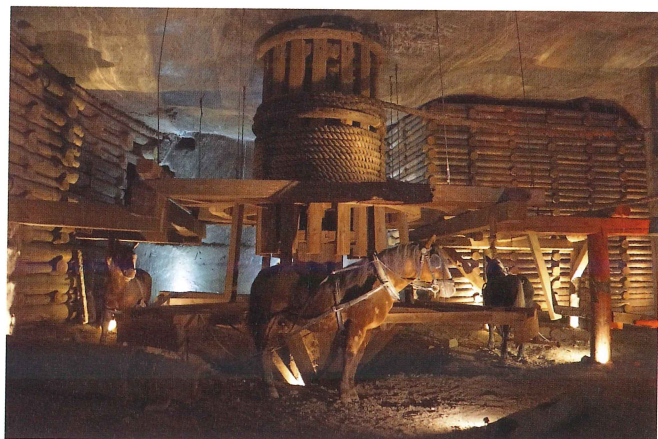


写真11 馬による綱巻機



写真12 坑内ツアーの様子



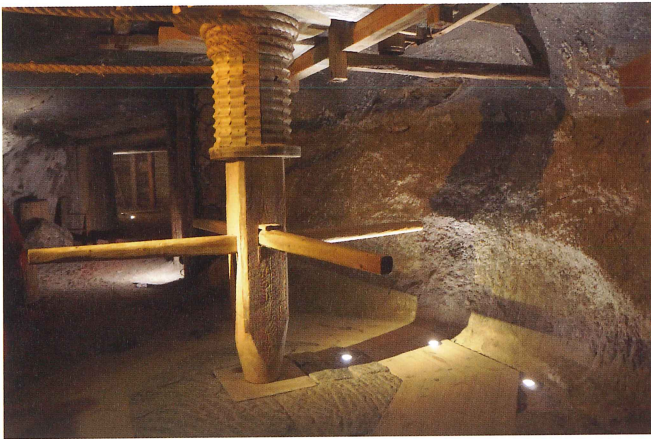


写真13 人力による綱巻機

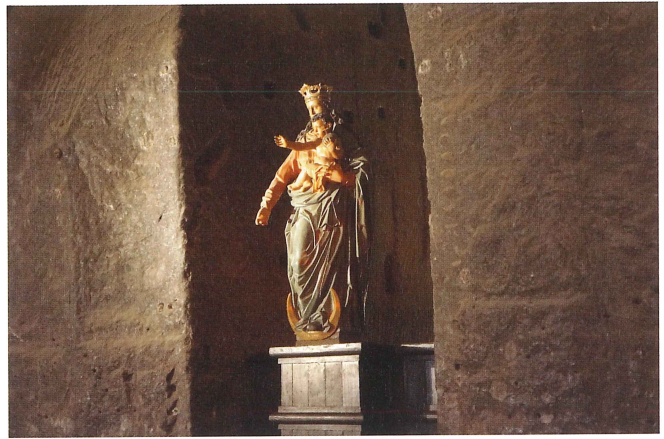


写真14 勝利の聖母像

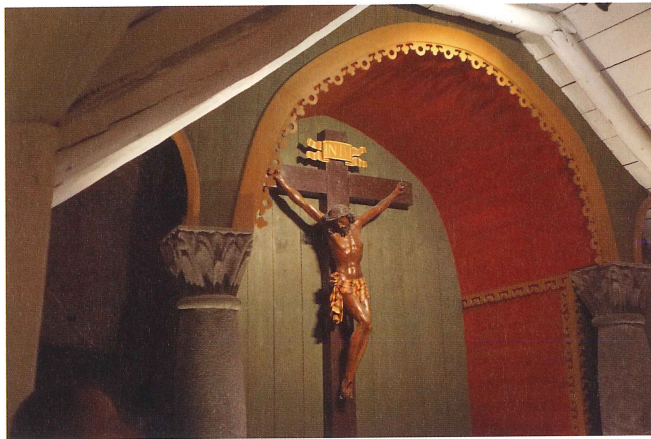


写真15 十字架にかかったキリスト像



写真16 キングのチャペル 地下101m.  
1896年から彫られている。

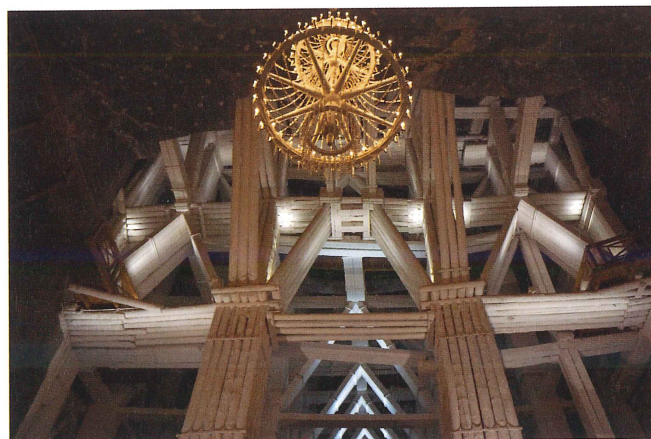


写真17 巨大な丸太の構造物とシャンデリア

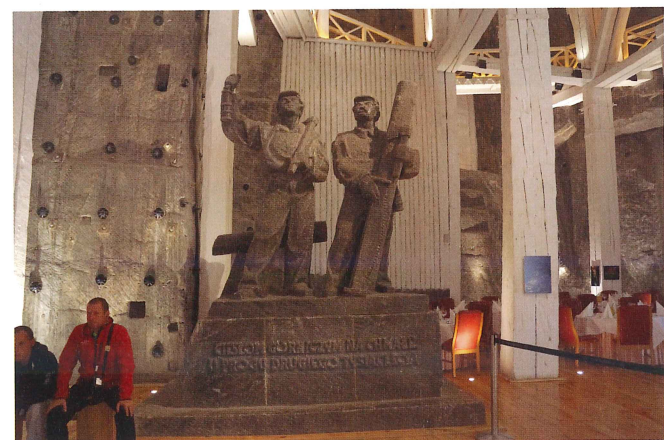


写真18 坑内の労働者像





写真19 休憩所 軽い食事ができる。



写真20 ヴィエリチカのブランドのビール

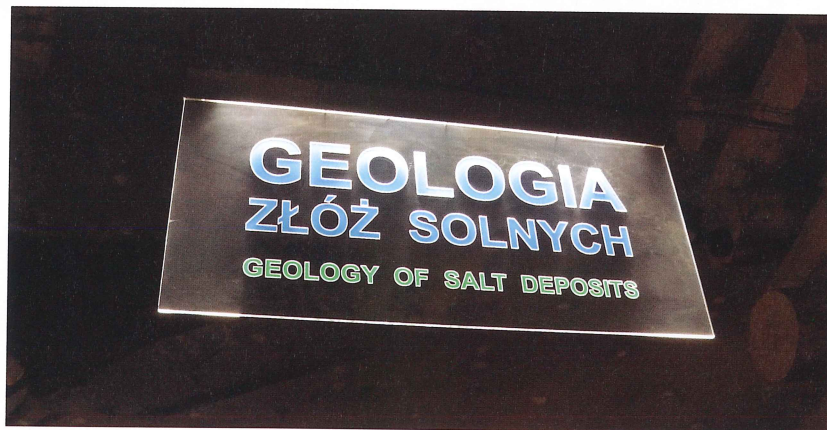


写真22 地質学geologyのコーナー看板



写真21 坑内馬の写真パネル

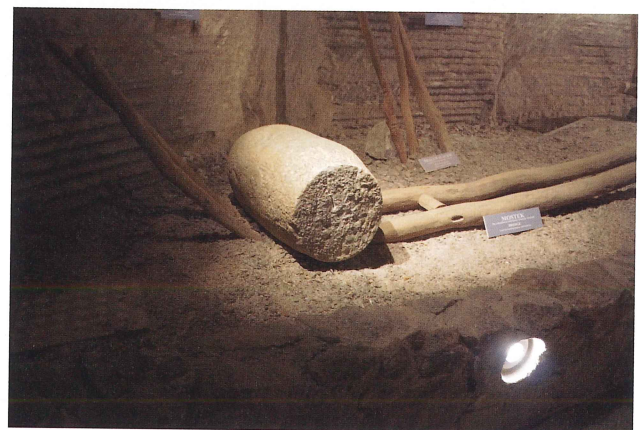


写真23 樽型に切り出した岩塩

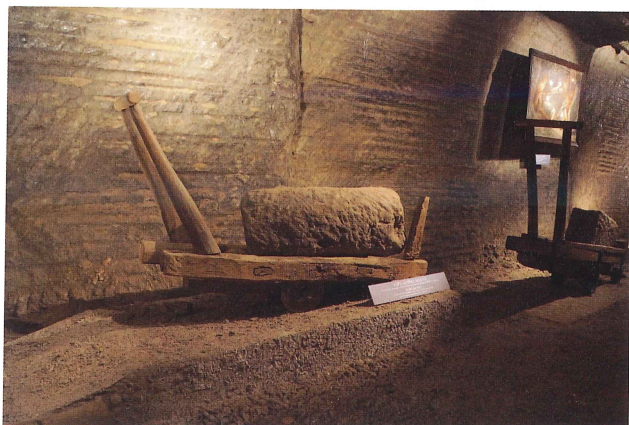


写真24 岩塩とそり

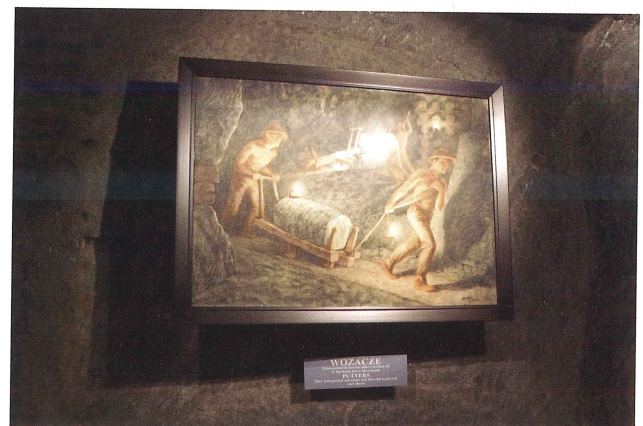


写真25 岩塩を運ぶ様子の絵



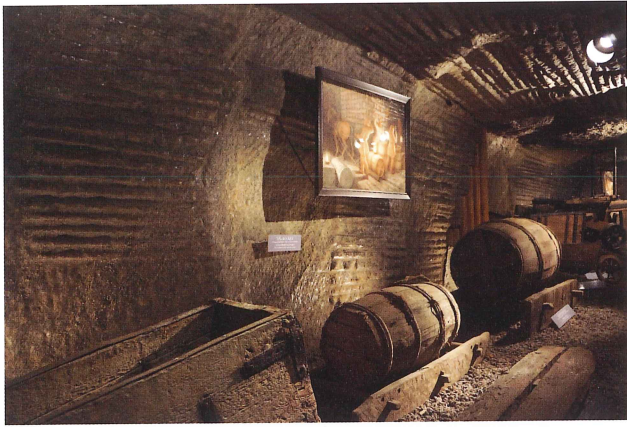


写真26 馬が樽をレールで運ぶ様の絵とレール



写真27 掘削の先端（切羽）

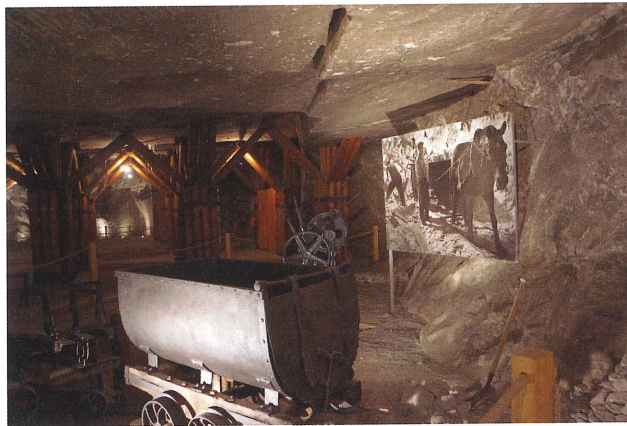


写真28 鉱山馬のパネル

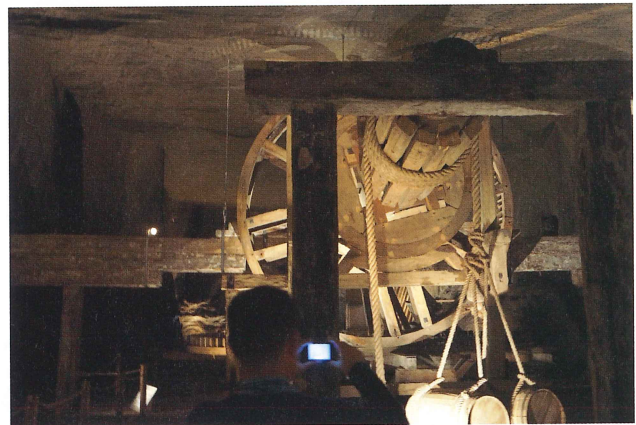


写真29 樽の巻き上げ機

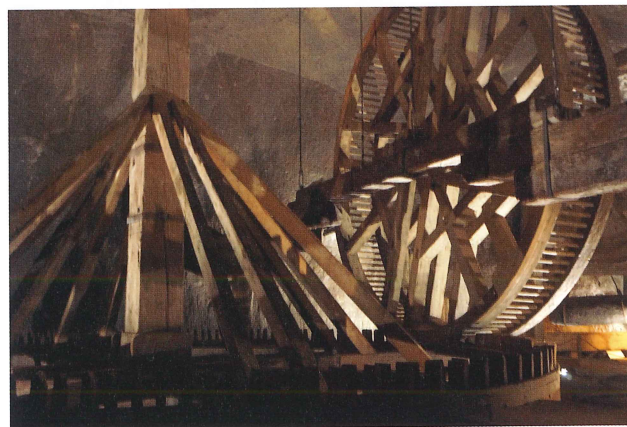


写真30 歯車を使って回転方向を変える装置



写真31 網を使って入坑する様の模型



写真32 ツアーを終えると、このシャフトの出口に至る。





写真1 オストラヴァ・ミハウ炭鉱の遺構  
[筆者撮影]



写真2 オストラヴァ・ミハウ炭鉱の遺構  
[筆者撮影]

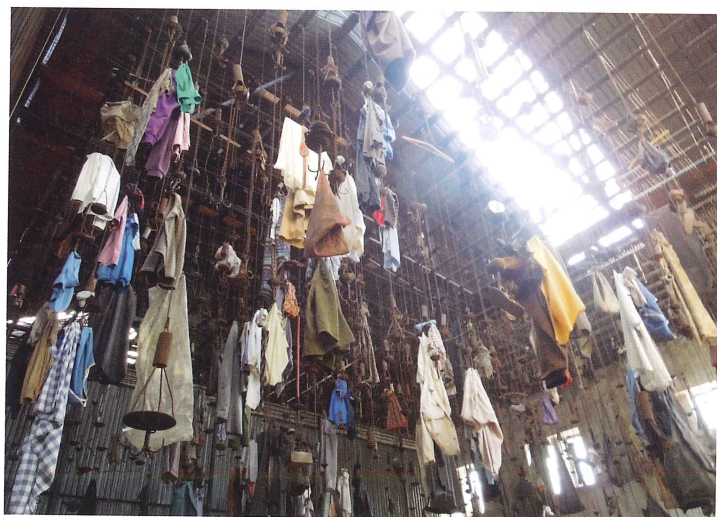


写真3 オストラヴァ・ミハウ炭鉱の遺構  
[筆者撮影]



写真4 オストラヴァ・ミハウ炭鉱のエレベーター  
[筆者撮影]

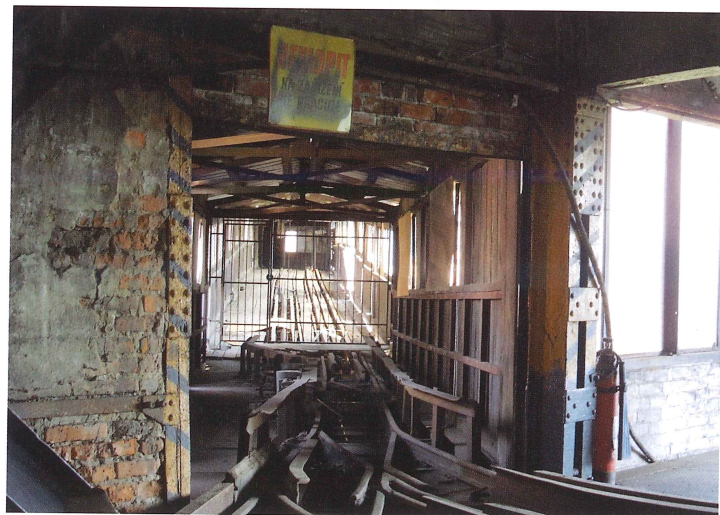


写真5 オストラヴァ・ミハウ炭鉱の遺構  
[筆者撮影]





写真6 オストラヴァ・ミハウ炭鉱に残る機械群  
[筆者撮影]



写真7 オストラヴァ・ヴィトコヴィツェ製鉄所に隣接した炭鉱遺構  
[筆者撮影]



写真8 オストラヴァ・ヴィトコヴィツェ製鉄所の高炉・  
熱風炉  
[筆者撮影]



写真9 オストラヴァ・ヴィトコヴィツェ製鉄所ツアー  
[筆者撮影]



写真10 オストラヴァ・ヴィトコヴィツェ製鉄所ツアー  
[筆者撮影]





写真11 オストラヴァ・ヴィトコヴィツェ製鉄所全景  
[筆者撮影]



写真12 オストラヴァ・ヴィトコヴィツェ製鉄所上からみた熱風炉  
[筆者撮影]



写真13 オストラヴァ・ヴィトコヴィツェ製鉄所における  
鉄に覆われた柱 [筆者撮影]

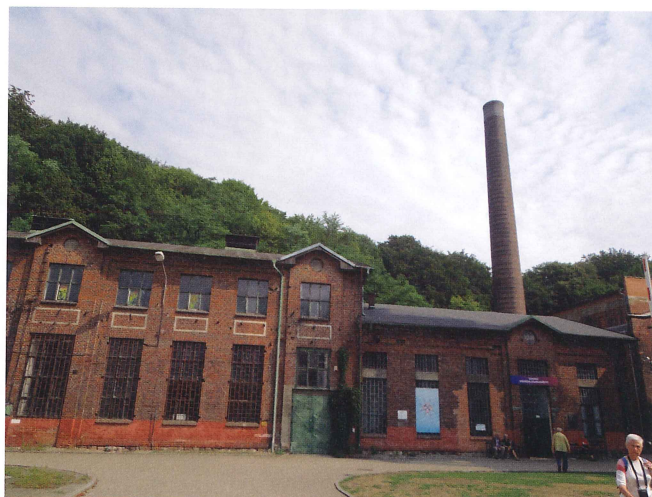


写真14 オストラヴァ・ランデクパークの炭鉱遺構  
[筆者撮影]



写真15 オストラヴァ・ランデクパークの炭鉱遺構  
[筆者撮影]





写真16 オストラヴァ・ランデクパークツアー  
[筆者撮影]



写真17 オストラヴァ・ランデクパークにおける炭鉱事故  
に関する展示  
[筆者撮影]



写真18 オストラヴァ・ランデクパークに展示されている機械群  
[筆者撮影]



写真20 オストラヴァ市内を走るトロリーバス  
[筆者撮影]



写真19 オストラヴァ・ランデクパークに展示されている車両  
[筆者撮影]





写真1 クラクフ本駅前  
[筆者撮影]



写真2 クラクフ市街地を走るトラム  
[筆者撮影]



写真3 andel's Hotel  
[筆者撮影]



写真4 中央広場と広告  
[筆者撮影]



写真5 地下博物館の天井部分にある噴水  
[筆者撮影]



写真6 シンドラーの工場（クラクフ歴史博物館）  
[筆者撮影]





写真7 シンドラーの工場正面入口  
[筆者撮影]



写真8 シンドラーの工場1階 ミュージアムショップ  
[筆者撮影]



写真9 At the photographer's  
[筆者撮影]



写真10 Stereoscope  
[筆者撮影]



写真11 Railway Station waiting room  
[筆者撮影]

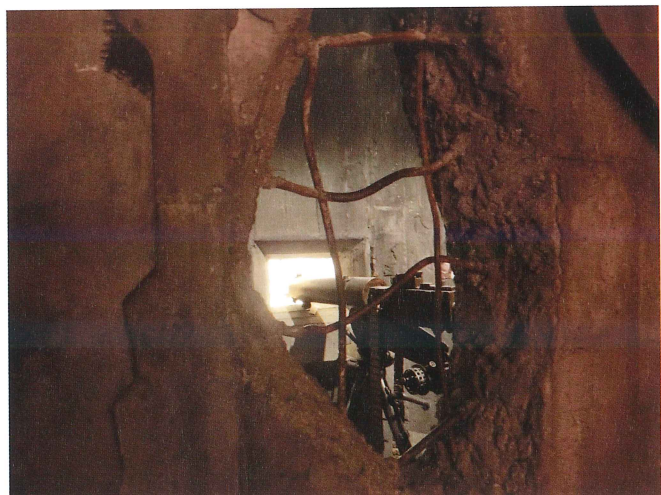


写真12 Outbreak of war  
[筆者撮影]





写真13 TKS tankette  
[筆者撮影]



写真14 City square I  
[筆者撮影]



写真15 Outbreak of war  
[筆者撮影]



写真16 General Government  
[筆者撮影]



写真17 General Government の床  
[筆者撮影]



写真18 Railway Station  
[筆者撮影]





写真19 Railway Station から続くマルチメディア展示  
[筆者撮影]



写真20 the staircase  
[筆者撮影]



写真21 The Ghetto ①  
[筆者撮影]



写真22 The Ghetto ②  
[筆者撮影]



写真23 Schindler's office  
[筆者撮影]



写真24 シンドラーの机の上の展示  
[筆者撮影]





写真25 シンドラーのオフィスにあるインスタレーション①  
[筆者撮影]



写真26 シンドラーのオフィスにあるインスタレーション②  
[筆者撮影]



写真27 Everyday life, 1943  
[筆者撮影]



写真28 City square II  
[筆者撮影]



写真29 Płaszów Camp  
[筆者撮影]



写真30 German propaganda  
[筆者撮影]





写真31 Enter the Red Army  
[筆者撮影]

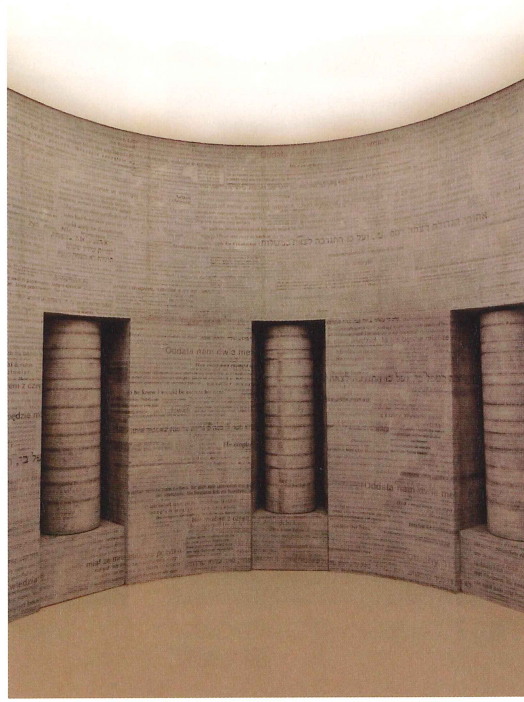


写真32 Room of Choices  
[筆者撮影]

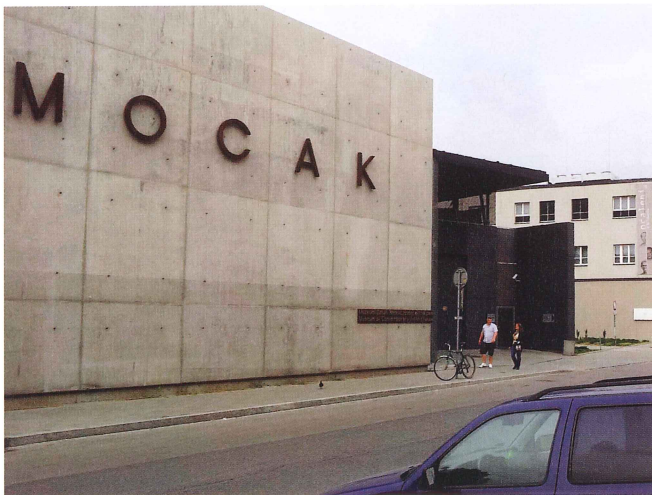


写真33 クラクフ現代美術館①  
[筆者撮影]



写真34 クラクフ現代美術館②  
[筆者撮影]



写真35 クラクフ現代美術館 読書ルーム  
[筆者撮影]



写真36 クラクフ現代美術館 カフェ  
[筆者撮影]



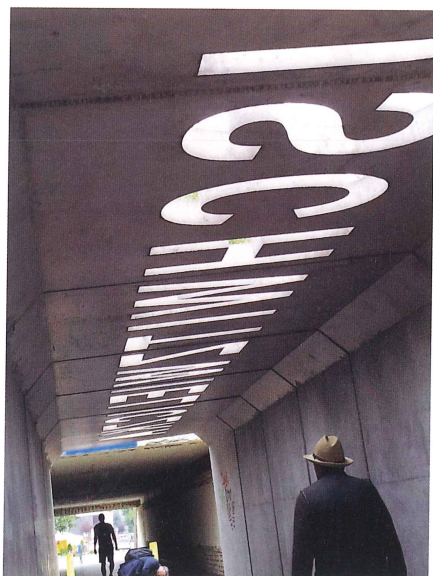


写真37 AUSCHWITZWIELICZKA  
[筆者撮影]

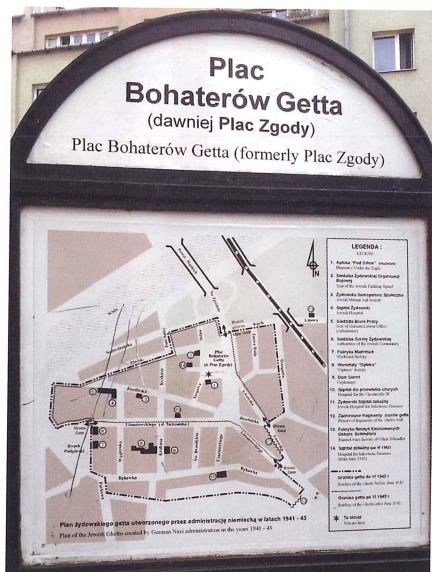


写真39 ゲットーの英雄広場の表示板  
[筆者撮影]



写真43 イーグル薬局②  
[筆者撮影]



写真38 ゲットーの英雄広場  
[筆者撮影]



写真40 ゲットーの英雄広場のオブジェ  
[筆者撮影]



写真41 ゲットーの英雄広場のオブジェとパネル写真  
[筆者撮影]



写真42 イーグル薬局①  
[筆者撮影]



2013 年度 静岡文化芸術大学文化政策研究科長特別研究費  
「旧東欧地域における産業遺産の保全と利活用に関する研究」報告書

## 目 次

巻頭カラー

はじめに

四方田雅史

1. ポーランドの産業遺産と文化

根本 敏行 4

2. ヴィエリチカ岩塩坑の視察記録

藤田 憲一 36

3. ポーランド・チェコの技術遺産・産業遺産からみた自国史像

四方田雅史 42

4. クラクフの「負の遺産」を巡って  
—クラクフ歴史博物館（シンドラーの工場）を中心に—

加藤 裕治 56







## は じ め に

本報告書は、静岡文化芸術大学文化政策研究科長特別研究費「旧東欧地域における産業遺産の保全と利活用に関する研究」の成果の一部である。旧東欧地域のすべての国を取り上げることはできないため、今回はポーランドとチェコを取り上げることにした。共同研究を行った4名は2013年8月23日から9月3日まで現地に赴き、その産業遺産や「負の遺産」を調査した成果がここに収められている。

さて、冒頭でまず、なぜ旧東欧地域、とりわけポーランドとチェコを取り上げるに至ったのか、説明して、この報告書が生まれた背景について明らかにしておきたい。

まず、旧東欧地域の産業遺産をはじめとする遺産・文化財の保全、およびその利活用に関する研究が日本ではまだ少ないことである。そのため、その実態を調査し日本に紹介するだけでも学問的意義が高いと考えられる。その背景には、産業遺産はもともとイギリスなどの西欧で評価されたことから分かるように、これまでも西欧を中心に研究されてきたことが挙げられる。周知の通り、西欧は産業革命・近代化発祥の地であり、そこに住む国民にとって産業遺産は誇りであったことから当然であったとも言える。しかし、ポーランドやチェコなどの旧東欧（中欧）地域は西欧ほど一筋縄ではいかない。たとえば、第一次世界大戦まで独立国ではなく、産業化や近代化も外からもたらされざるを得なかった面がある。また、ナチス支配や社会主義時代といった負の歴史とでも呼べる時代を経験するなど、西欧で産業遺産が積極的に評価されたのとは異なる面があることは強調されよう。言い換えれば、通常大国から見てきた世界史を小国から捉えなおしてみるという意義もあり、ほかの小国や発展途上国における産業遺産や近代化遺産を考える上でも重要な示唆が得られるように思われる。

次に、その点とも密接に関連するが、そもそも文化財全体にまで議論を拡張すると、文化財は一般にその国の輝かしい歴史を体現している一方で、負の歴史を含むこともあるという事実である。いわば「負の遺産」の問題である。たとえばポーランドやチェコのユダヤ人に関連した遺産、とりわけアウシュビッツ・ビルケナウなどがその代表例である。このような「負の遺産」という新しい文化財に着目することによって、輝かしい国家の歴史を体現するものとしての文化財という見方を相対化し、文化財に対する新たな観点を提供することになるだろう。

このような問題意識からこの共同研究は生まれている。この後、各論文で、ポーランド・チェコの産業遺産や「負の遺産」の保全、および利活用の実態を、フィールドワークに基づいて、紹介していくことにしよう。

共同研究者を代表して

四方田雅史



# ポーランドの産業遺産と文化

静岡文化芸術大学 文化政策学部  
文化政策学科 教授 根本敏行

## はじめに

本研究は、東欧の産業遺産を活用した地域開発、地域活性化の取り組みを対象とする一連の取り組みの一部である。手始めに、かつて近代産業化がかなりの程度進んでいたポーランドとチェコから取り上げたが、研究を始めると否応なしにその地理的歴史的な背景との関係性が浮かび上がり、両国の地理や歴史、文化などに深入りせざるを得なくなってしまった。

本稿は、これら一連の研究の中において、ポーランドに関するいくつかの調査・研究の断片を寄せ集めたものとなっており、2013年度静岡文化芸術大学紀要Vol.14への投稿「チェコ・ポーランドの産業遺産・ミュージアムとツーリズム」などの論考と補い合うような関係になっている。

本稿では、基本的に近代の産業遺産関連のテーマを主題とするが、筆者自身の理解を深めるためもあり、かなり簡略化した形ではあるが両国の地理や歴史についても適宜記述することとした。

## 1. ポーランド

### (1) 地理的歴史的特性

この原稿を書いている2013年3月2日現在、ウクライナの親欧米暫定政権（ヤツェニューク首相）成立後、ウクライナのクリミア半島のロシア軍の映像がテレビ報道されている。ワルシャワへのソ連軍進駐やプラハの春後のチェコ事件の様子が重なって見える。

もとロシア領のクリミア半島にはロシア人が多数居住しており、セバストポリにはロシア海軍黒海艦隊の基地もある。ロシア議会上院はプーチン大統領による「ロシア系住民の安全と権利を守るため」の軍隊の投入を全会一致で可決した。

ポーランドは、間にウクライナ、ベラルーシ、リトアニアを挟んでロシアと対峙する。

リトアニアとの間にはロシアの飛び地のカーリーニングラードもある。

3度にわたる国土分割など、常に隣国からの侵略や干渉に晒される過酷な歴史を生き抜いてきたポーランドであるが、その背景には地理的・歴史的な環境がある。

ポーランドは、地理的、歴史的、文化的、そして地政学的にも「欧州の中心」あるいは「欧州の十字路」としての位置付けがなされてきた。

地理的には、欧州の最西端であるポルトガルのロカ岬と最東端のロシア、ウラル山脈を結ぶ東西の線と、最北端であるノルウェーのノールカップ岬から最南端のギリシアのテナロン岬を結ぶ南北の線が交わる場所が首都ワルシャワの近くであり、文字通り欧州の十字路であ



る。

歴史・文化の面では、東方のアジアと広義の欧州がぶつかり、交流した場所であり、欧州内部ではギリシアあるいはロシア正教会とローマ・カトリックがせめぎ合う地で、ローマ・カトリックの影響圏の最東端でもある。民族的・言語的にはスラヴ系であるが、建国にあたって宗教はカトリックを採用し、現在も続く西欧への親近感の大きな背景となる。言語はスラヴ系でも文字はキリル文字ではなくローマ字を使う。

およそ1000年という、欧州では決して長くはないポーランドの歴史は、度重なる隣国からの侵略に晒され、まさに激動の歴史と言ってよい。状況によって国境は常に変化するが、2014年現在7か国と国境を接している。第2次世界大戦後に確定した現国境は、奇しくも1000年以上前に最初に統治された王国の範囲に極めて近い。

国土面積は32.3万km<sup>2</sup>、日本のおよそ5分の4で欧州で6番目に広い。2014年現在の人口はおよそ3,800万人で欧州8番目の規模である。

気候区分はバルト海に面する西側半分が西岸海洋性気候、東側半分が大陸性気候となる。

約92%が海拔300m未満の平坦な国土は、隣国と区切る山脈や大河もなく、中央低地には多くの人口を養う広大な農地があり、南部には豊富な鉱物資源がある。東西両側からは、この豊かな資源を求めていとも簡単に戦車部隊が侵入してきた。

## （2）産業遺産との関連

本稿のテーマである近代の産業遺産については、ポーランドでは世界遺産であるアウシュヴィッツ・ビルケナウの絶滅収容所<sup>(1)</sup>、クラクフのシンドラーの工場<sup>(2)</sup>の博物館、ウッチの繊維産業の遺産、関連してワルシャワ市内とクラクフ市内の歴史遺産、そして近代ではないが重要な産業遺産で世界遺産のヴィエリチカ岩塩鉱を訪問・調査した。

これらは静岡文化芸術大学文化政策学部の「産業遺産研究会」で継続して実施している研究の一環で、今回筆者の分担は其中でウッチの繊維産業が主であるが、併せてポーランド全体と、都市ワルシャワ、クラクフの歴史と産業遺産との関連性についても言及した。

前述のように平坦なポーランドは、その国土の多く（中央低地）で農業を主産業としている。鉱工業については、中央低地の南部の比較的標高の高い高地に分布している。これは造山運動による地盤の隆起によって地下の石炭や鉄鉱石、岩塩といった鉱物資源が比較的浅い場所で入手可能な状況にあったことによる。西部のチェコのシレジア地方と接する上シロンスク地方から、ウクライナ国境のルブリン地方にかけての地域には、石炭（生産量はロシアに次ぐ）をはじめ鉄鉱石や多種多様な非鉄金属の鉱物資源があり、近代工業化が大いに進展した。特にカトヴィツェでは現在でも製鉄業が発展しているが、やはり今回の調査対象で、隣接するチェコのオストラヴァなどと共通する産業構造となっている。

そしてこの地域では、アウシュヴィッツ・ビルケナウ絶滅収容所、クラクフのシンドラーの工場などに象徴されるように、近代・現代ポーランドにおけるユダヤ人の迫害と虐殺という負の側面が大きな存在感を持つ。しかし、東欧におけるユダヤ人問題は近現代史に限った



ことではない。ユダヤ人は1000年以上前から欧州の地に定住しており、本稿で取り上げるウッチの事例では産業資本家という顔も持つ。こうした長い歴史の経緯とともに、近現代史の重要な出来事である大規模なユダヤ人迫害・虐殺は、戦争や産業振興の文脈を通じて同時代の近代工業化の進展とも密接に関連し合っており、特に近現代の工業化を主体とする産業遺産とは不可分の関係にある。従って、工場や鉱山といった狭義の産業遺産だけではなく、それらに労働、資本、人種隔離政策などによって関連づけられる様々な施設（ゲッターや収容所など）も広義の産業遺産といってもあながち的外れとは言えないであろう。

#### 【コラム：ブウェンドフスカの砂漠地帯】

製鉄業の拠点であるカトヴィツェの近く、ブウェンドフスカは、約32km<sup>2</sup>に及ぶ不毛の砂漠地帯となっている。中世まで豊かな森林が広がっていたが、地域の産業活動の影響によって過剰な伐採が進み砂漠化したものである。鉄鉱石を産するこの地では古くから製鉄業がおこり、当初は鉄の精錬は木炭に頼っていた。これに加え、一般的な燃料、鉱山の支柱などの需要で森林は切りつくされた。

第2次世界大戦中、ポーランドを占領したナチス・ドイツは、アフリカのサハラ砂漠に侵攻するにあたってこのブウェンドフスカの砂丘で訓練したという。

### （3）ポーランド史概略

この節では、関連する世界史的事項と対比させながらポーランドの歴史の概略を年表形式でまとめてみる。一般的な事項に加え、特に研究対象のウッチや欧州在住ユダヤ人関連の情報も入れた。

以下、●がポーランドの歴史的事項、○が世界史的な関連事項、□が欧州に定住するユダヤ人に関する事項、▲がウッチ関連となる。

#### 【コラム：ポーランドの始まりの伝説】

昔々、レフ（またはレヒ）、チェフ、ルス の3兄弟があった。3兄弟は住む場所を探しに出た。チェフは西に向かって最初のチェコ人（チェフはチェコ語ではチェク）となり、ルスは東に向かって最初のロシア人となった。レフは北に向かって巨大なオーク（バルテク）の木にある巣に白鷺が止まるのを見てそこに住むことにした。レフは最初のポーランド人となり、その地を「巣」を意味するグニェズノと名付け、最初の首都とした。白鷺は現在でもポーランドの象徴となっている。<sup>(3)</sup> (写真1)

#### 【ポーランド王国成立以前】

- 紀元前4000年頃から 人類が定住。
- 紀元前1400年頃 バルト海沿岸でとれる琥珀が古代エジプトと取引され、商人たちが行きかう交易の地として栄えた。ローマ帝国の版図には組み込まれなかった。



- 66年 ユダヤ戦争：パレスチナのユダヤ人はローマ帝国に対し反乱を起こすが鎮圧されてユダヤ人による自治は完全に廃止、厳しい民族的弾圧を受けた。
- 132年 バル・コクバの乱：これも鎮圧され、ユダヤ人の自称である「イスラエル」や「ユダヤ属州」という地名も廃止、古代イスラエル人の敵であったペリシテ人に由来する「パレスチナ」という地名が復活。これ以降、ユダヤ人は1948年のイスラエル建国まで2000年近く世界各地に離散し（ディアスポラ）、後に多くのユダヤ人が東欧地域、とりわけポーランドに移住した。
- 6世紀頃 東欧地域一帯にスラヴ人が流入、環濠集落を作って定住した。
- 8世紀まで 現在のポーランド人の基となる北西スラヴ系諸部族が異教（非キリスト教）の諸国家を築いていた。
- 7世紀～10世紀 カスピ海北部にユダヤ教を国教とするハザール王国が興るが、その後相次ぐ周辺との戦争で滅ぶ。この間、殆どのユダヤ人は地中海沿岸に住む。

### 【王国の黎明期】

- 8世紀頃 「ポピェリド朝」から「ピヤスト朝」へ：ポラニェ族とゴプラン族を治めた族長家の最後の当主ポピェリド（Popielid）が没し、「車大工のピヤスト（Piaśt Kołodziej）」（荷車や馬車などを製造する原初的手工業経営者と推測）が族長に選出され「ピヤスト朝」（Piastowie）を創始。
- 800年 カール大帝の皇帝戴冠、神聖ローマ帝国成る。
- 966年 ポーランド公国<sup>(4)</sup>：ピヤスト朝の5代目族長ミェシュコは、オーデル川以東のスラヴ系民族（ヴィスワ諸部族、ボモージェ諸部族、マゾフシ諸部族など）をポラニェ族に統合、自らキリスト教に改宗してミェシュコ1世公となり、ポーランド公国として西欧キリスト教世界に認知された。ともに神聖ローマ帝国の迫害を受けていたボヘミア（チェコ）王の娘と結婚し、正教会に対抗して住民のカトリックへの改宗を進める。
- 992年 ミェシュコ1世の息子ボレスワフ1世が後を継ぎ、ポーランド公国の領土を画定、中央政府の権力を強め、武力によって国家を統合。なお、確定したポーランド公国領は現在のポーランド領とはほぼ一致。
- 1000年 神聖ローマ帝国のオットー3世はボレスワフ1世と会談、グニェズノに大司教座を置く。
- 1004年 ボレスワフ1世は神聖ローマ帝国領であった南のボヘミアへ軍を進めて自らボヘミア公となる。
- 1018年 ボレスワフ1世は東のキエフ・ルーシを攻略。同年、西の神聖ローマ帝国領内に侵攻しマイセン（ポーランド語でミシニャ）とラウジッツ（ポーランド語でウジツェ）を獲得、その結果中欧に広大な新領土を確保。
- 1025年、ボレスワフ1世の死の直前、ローマ教皇ヨハネス19世によってポーランド公国は王国として認知されてポーランド王国となり広大な王国の国境を確定。現在のチェコとスロヴァキアのほぼ全域、オーストリア、ハンガリー、ウクライナ、ベラルーシの一部、ドイツのラウジッツ地方とマイセン地方を含む。首都はボズナニ。王として最初の戴冠式を受けたのは息子のミェシュコ2世。
- 1034年 ミェシュコ2世は謎の死を遂げる。王国内の諸侯は王権のこれ以上の拡大に危惧を抱いたためとされる。
- 1038年 正式な戴冠はしていないが事実上の君主となったポーランド公カジミェシュ1世は、政治が滞っていた首都ボズナニを離れ、クラクフへと移動、事実上の遷都。
- 1058年 ボレスワフ2世、カジミェシュ1世の公位を継ぐ。
- 1076年 ボレスワフ2世、ポーランド王位に就く。
- 1079年 大公位についたヴワディスワフ2世は国家の統一を画策、大公の権力強化に反対するグニェズノの大司教スタニスワフと対立して暗殺を命じ、大公支持派と大司教支持派の間で内戦となった。戦争は長引き、王国はどんどん小さな領邦に分裂。のちにスタニスワフは聖人とされ、不当な統治に対する正当な反抗のシンボルとなる。
- 11～13世紀 十字軍の遠征
- この頃、欧州キリスト教社会ではユダヤ人は「キリスト殺し」説話や「高利貸し」として迫害されていた。<sup>(5)</sup>
- 1150年頃 フランクフルト（ドイツ）にユダヤ人が居住した記録が残る。

### 【長い分裂時代】

- 1138年 ボレスワフ3世は王国領土を7つに分割、長男ヴワディスワフ2世にはこれにクラクフ大公



領を加えてクラクフ大公とし、以後はクラクフ大公がポーランドの王権を継ぐこととした。残りはポーランド王国の直轄領。

- 1146年 シロンスク・ピャスト朝：クラクフ大公ヴワディスワフ3世はフリードリヒ・バルバロッサ（のちの神聖ローマ皇帝フリードリヒ1世）からの援助の見返りに、当時の神聖ローマ皇帝ロタール3世に臣従、これによってシロンスク公領の支配権を得た。
- 以後もクラクフ大公の位は継続したがその権威は衰退、ポーランド王国は王位を継ぐものがないまま、各地の領邦にどんどん分裂していった。
- 1226年 北方のバルト海沿岸のプルシ（プルーセン：プロイセン）人の来襲に悩まされたマゾフシェ公コンラートは、ドイツ騎士団<sup>(6)</sup>にプルシへの十字軍遠征を許可（要請）。ドイツ騎士団は神聖ローマ皇帝の勅書を得て北方に向かい、以後50年の間バルト海沿岸地方で活動。ドイツ騎士団はローマ教皇からの勅許を得たと主張してこの地に定住。さらにドイツから入植者を呼び寄せてこの地を開拓させ、結局ポーランドの領土を奪う。今日のポーランドの世界遺産にはドイツ騎士団に関連するものが多い。
- 1241年 タタールの軛：モンゴルのバトゥ軍がポーランド南部のクラクフなどを侵略、大部分を破壊。
- 隣のウクライナ（キエフ大公国）はモンゴルに敗れて国家消滅。
- 1268年 元から日本に送られた国書の中で日本に初めてポーランドの名が伝わる。
- 1274年、1281年 元寇
- モンゴル皇帝オゴデイ・ハーンの急死によりモンゴル軍撤退。復興過程でドイツや西欧から開拓民を呼び寄せ「東方植民」が始まる。特にシロンスクとその周辺に定住し、領主は都市開発のインセンティブとしてポーランド法ではなくドイツのマクデブルク法という都市法を適用、ドイツ系住民の混住が進む。
- ポーランド北部におけるドイツ騎士団、南部におけるモンゴル襲来後のドイツ入植者の受け入れは地域の経済や文化の発展をもたらした反面、19～20世紀のポーランド人とドイツ人との間の激しい民族紛争の遠因ともなった。
- 東方植民時代（12世紀-14世紀）にはモンゴルのポーランド侵攻で人口が減少したポーランド王国へユダヤ系ドイツ人などが進出し、イディッシュ語を話すユダヤ人（アシュケナジム）が定住を始めた。
- 1264年 「カリシュの法令」によって、ユダヤ人の権利と安全がポーランド王およびシュラフタ（ポーランド貴族）の庇護のもとに保障され、1795年にポーランド王国が滅亡するまで保護された。しかしその背景について、当時のポーランドの支配者がユダヤ人とその財産をうまい具合に利用することが第一の動機だったという解釈もある。
- 1290年 エドワード1世による追放布告でイングランドを追放されたユダヤ人は、ポーランドに集まり生活し、ユダヤ人社会「シュテットル」を形成した。
- 1290年 首都をクラクフに置く。
- 1295年 プシェミスウ2世が全ポーランドの君主としてポーランド国王に即位、ポーランド王国はほぼ2世紀ぶりに名目的統一を果たすが、国王は翌年何者かに暗殺される。
- 農民、騎士、聖職者から支持されたピャスト家のヴワディスワフと競い、クラクフの貴族たちに支持されたプシェミスル朝のボヘミア王ヴァーツラフ2世がポーランド王に推挙、ローマ教皇ボニファティウス8世の勅許が降りてヴァーツラフ（ファーツラフのポーランド語）2世として即位。
- ヴワディスワフはその間農民や騎士を率いて自らの軍を作り、ポーランドのほかの地域を武力で支配下に置く。
- 1305年 ヴァーツラフ2世の息子ヴァーツラフ3世（ボヘミア王ヴァーツラフ3世）が王位を継ぐも翌1306年に何者かによって暗殺され、ヴワディスワフがクラクフ大公に即位し、ヴワディスワフ1世（短身王）として武力によるポーランド統一を進め、1318年までにポーランド全土を支配下に収めた。ローマ教皇ヨハネス22世は強力なポーランド君主を脅威と感じ、ヴワディスワフ1世への戴冠を一時渋ったが結局認めた。
- 1320年 ヴワディスワフ1世がポーランド王位に即位。ポーランドの再統一に向けて各地のピャスト家や諸外国に対しかつてのポーランド王国の領土を主張。

#### 【黄金時代】

- 14世紀ペスト大流行で、ユダヤ人はペストを流行させた犯人だというデマで特にドイツで迫害され、



隔離政策が取られることが一般化。その結果多くのユダヤ人が宗教的・民族的寛容さを求めてポーランドに移住。以後、ポーランドは世界で最もユダヤ系住民の多い国となった。<sup>(7)(8)</sup>

- ▲ 1332年 ウッチが初めて歴史上の正式な記録に登場。
- 1333年 ヴワディスワフ 1 世の死後 3 男がカジミェシュ 3 世 (1310～1370年) として即位。軍事、外交、内政に巧みな手腕を発揮し「大王 (Wielki)」と呼ばれる。
- カジミェシュ地区<sup>(9)</sup>：カジミェシュ大王はポーランド史上最も積極的にユダヤ人を受け入れ、首都クラクフではヴィスワ川の中洲だった水運に適した広い土地を、ユダヤ人の自治都市として提供した。
- 1364年 クラクフ大学 (ヤギェウォ大学) 創立。クラクフはヨーロッパの重要な文化的中心となる。
- 1370年 カジミェシュ 3 世没。ピャスト朝終わる。直系男子がなくハンガリーのラヨシュ (ルードヴィク) 1 世が即位。
- 1382年 ラヨシュ 1 世没。ハンガリー王女ヤドヴィガが 9 歳でハンガリーの統治者に。
- 1385年、ポーランド女王となったヤドヴィガとリトアニア大公ブワディスワフ・ヤギェウォ (リトアニア語ではヨガイラ) 2 世 (1386～1434) が結婚。ポーランド王国とリトアニア大公国は人的同君連合と呼ばれる緩やかな国家連合であるポーランド＝リトアニア連合王国を形成した (クレヴォの合同)。
- 1399年 ヤドヴィガ女王没。ヤギェウォ 2 世がポーランド王に即位、以後ヤギェウォ朝がポーランドを統治、ヤギェウォ朝時代は黄金時代とも呼ばれる。
- 1410年 ポーランド＝リトアニア連合は「グルンヴァルトの戦い」でドイツ騎士団を破る。バルト海の権益をめぐる紛争が決着し、ポーランドは北の海への出口を確保。
- 1414年 コンスタンツ公会議<sup>(10)</sup> でグルンヴァルトの戦いの戦後処理でドイツ騎士団と論争になるが、ポーランド全権でクラクフ大学校長のパヴェウ・ヴウォトコヴィツ (パウルス・ウラディミリ) の画期的な主張<sup>(11)</sup> で決着。
- 1430年 リトアニア大公のヴィータウタス (ポーランド語名ヴィトルト) 没。ポーランド＝リトアニア連合王国内のポーランド化が進む。
- 1440年 ドイツ騎士団領内の諸都市は、ポーランド王の庇護を求めてプロイセン連合を結成、ポーランド王国とプロイセン連合はドイツ騎士団と戦う。
- 1466年 ポーランド側の勝利で、第二次トルン和約によりドイツ騎士団領をポーランド王の完全な支配下に置く。
- 1467年 ポーランド王国とドイツ騎士団の「司祭戦争」<sup>(12)</sup> 勃発、1479年にピョートルクフ (Piotrków) の講和後、カジミェシュ 4 世の治めるピョートルクフに神聖ローマ帝国を追放されたドイツ人とユダヤ人が移住した。
- 1493年 ヤン 1 世オルブラフト、地方議会選出の代議員による代議院 (下院) を作り、既存の王国評議会である元老院 (上院) と 2 院制議會を構成。
- 1505年 ノヒル・ノヴィ法：国王は上下両院の合意なしに新たな法制定できない。議会中心となる。この時期、国王選挙の制度は既にあったが、後の時代と異なり全シュラフタによる直接選挙ではなく間接選挙であった。
- 1526年 侵入したオスマン・トルコ軍に敗れ、ボヘミアとハンガリーの支配権を失う。
- 1543年 コペルニクは著書『天球の回転について』を出版。<sup>(13)</sup>
- 1569年 国王ジグムント 2 世アウグストにより、ポーランドはリトアニアを併合して (ルブリン合同) ポーランド王を統一君主とする同君連合となり、制限つきながらも議会制民主主義を採る「ポーランド＝リトアニア連合王国」(「ポーランド＝リトアニア共和国」とも「ジェチポスポリタ」とも呼ばれる) (第 1 共和国) となる。欧州最強最大の国家として君臨、以後単に「ポーランド」とだけ呼ばれることも多くなった。
- 1572年 ヤギェウォ朝の唯一の男子であったジグムント 2 世アウグストが男子を残さずに没し、ヤギェウォ家の男系血筋は断絶。ポーランド貴族らによって運営される身分制議會 (セイム) の勢力が強まり王権は弱体化。
- 1573年 ワルシャワ連盟協約：全シュラフタがワルシャワに集まり、直接選挙による国王自由選挙 (選挙王政)<sup>(14)</sup> や宗教的寛容を決める。「シュラフタ民主制」とも呼ぶ。<sup>(15)</sup>
- 1573年 国王自由選挙で選ばれた最初のポーランド国王はフランス王アンリ 2 世とイタリア人の王妃カトリーヌ・ド・メディシスの息子であるフランス人ヘンリク・ヴァレジ (アンリ・ド・ヴァロワ) であつ



たが、種々の事情<sup>(16)</sup>によりフランスに帰国してフランス国王アンリ3世となる。

- 1575年 ヘンリクを強制的に廃位。ヤギェウォ家の遠縁に当たるトランシルヴァニア公ステファン・バトリイ<sup>(17)</sup>を選出、国王アンナとの結婚および夫妻によるポーランド共同統治を受け入れた。バトリイはモスクワ大公国（ロシア）の侵攻を撃退し、司法改革を行う。
- 1578年 国王裁判所設立：大法官（内閣総理大臣）に名宰相ヤン・ザモイスキが就任。辣腕を振るう。<sup>(18)</sup>
- 1850年 ステファン・バトリイはユダヤ人議会「ヴァード」を設ける。

#### 【対外戦争の時代】

- 1592年 ポーランド＝リトアニア連合王国はスウェーデン王国と同君連合を結ぶ。国王ジグムント3世（スウェーデン国王としての名はジギスムント）<sup>(19)</sup>は熱狂的なカトリック支持で宗教改革勢力と対峙。
- 1596年 ヨーロッパ北方全域のカトリック化を念頭に置いた最前線基地として、クラクフからワルシャワに遷都。
- 1599年 プロテスタント化するスウェーデンに侵攻するが失敗、ポーランド＝スウェーデン同君連合は解消。<sup>(20)</sup>
- 1611年 ジグムント3世はモスクワ大公国の自由主義的な大公国貴族（ボヤール）たちの求めに応じて東方へと侵攻しモスクワ市を占領（ロシア・ポーランド戦争）。
- その後約20年間にわたるたび重なる試練の連続（ポーランド・スウェーデン戦争、オスマン・トルコの侵略、ウクライナでのコサックの蜂起、ペスト流行など）は「大洪水時代」と呼ばれ、国民人口はほぼ半減する。
- 1648年 ウクライナではザポロージャ・コサックによるポグロム<sup>(21)</sup>によって多くの犠牲者を出した。1657年にユダヤ人の追放をオリバー・クロムウェルが解除し、ユダヤ人がイングランドへ367年ぶりに帰還。ユダヤ教徒居住区及びロシア帝国領ポーランド内のユダヤ人は欧州で最も多かった。
- 1683年 ヤン3世ソビエスキ（在位1674～1696）オスマン・トルコによる第二次ウィーン包囲を撃退。

#### 【近代民主主義成文憲法の成立とポーランド分割】

- 1764年 ロシアの後盾でスタニスワフ・アウグスト・ポニャトフスキがポーランド＝リトアニア連合王国最後の王に選ばれる。国内では反ロシア勢力と親ロシア勢力の争いが起こる。同年ユダヤ人議会およびその地方議会を廃止。
- 1768年 カトリックの貴族たちが正教徒と平等の権利をもとめて武装蜂起。バール連盟と呼ばれる。
- 1772年 第1次ポーランド分割：プロイセン、ロシア、オーストリアがポーランド＝リトアニア連合国家を分割し、それぞれの国境隣接地域を支配下に置く。国土の3分の1を失う。
- 1786年 ロシアはユダヤ教徒居住区（露：Черта оседлости、イディッシュ語：בשומה-מוחת רעד）を設置。
- 1789年 フランス革命
- 1791年 王は欧州初の成文憲法案を提出し、議会（セイム）はこれを可決した（「5月3日憲法」）。この憲法によってシュラフタ身分の都市市民への開放、王権の世襲制（選挙王政ではあるが、王となる個人を選出するのではなく、王家となる一家を選出する）とともに、世界初の立憲君主制が成立。
- 1793年 第2次ポーランド分割：改革抵抗勢力はロシアのエカチェリーナ2世と結託。ロシア軍はポーランドに干渉戦争「ポーランド・ロシア戦争」<sup>(22)</sup>を仕かける。タデウシュ・コシチュシュコらが健闘するが、スタニスワフ2世は戦争を中止。ロシアとプロイセンがポーランド・リトアニア連邦国家の分割をさらに進める
- 1793-94年 コシチュシュコ蜂起<sup>(23)</sup>：コシチュシュコが蜂起を起こすが鎮圧された。
- 1793年：国民教育委員会<sup>(24)</sup>
- 1795年 第3次ポーランド分割：ポーランド・リトアニア連邦国家の領土として残っていた地域が、ロシア、プロイセン、オーストリアのあいだで分割されポーランド王国は地図から消える。
- 第3次ポーランド分割でポーランドが消滅、旧リトアニア公国領はロシアに併合された。ポーランドの庇護を失ったユダヤ人は、ハプスブルク家へ庇護を求めたが、ウクライナ人・ベラルーシ人から裏切り行為と受け取られた。
- ▲ 1795年 小さな農村で、ヴウォツワヴェック司教区の所領だったウッチは、第3次ポーランド分割の結果プロイセン領内に組み込まれる

#### 【束の間の再興】



- 1807年 ナポレオン1世のもとで、半独立のワルシャワ公国として独立、1813年まで
- ▲ 1807年 ウッチはワルシャワ公国の支配下に入る
- 1806年 神聖ローマ帝国が解体され、1811年にカール・テオドール・フォン・ダールベルクがナポレオン法典をもとにフランクフルトのユダヤ人に市民権を認めた。
- 1815年 ナポレオン失脚、1815年のウィーン会議によって、ポーランドは再分割され、ロシア皇帝を元首とするポーランド立憲王国（会議王国）となった。
- ▲ 1815年 ウッチはロシア統治下のポーランド立憲王国の領土となった。
- ナポレオン敗退後、1814年にはユダヤ人の市民権と選挙権が再び剥奪された。
- ▲ 1821年～ ウッチは工業地域としての開発が検討され、織物工業、繊維工業の拠点として発展。

### 【独立運動の時代】

- 1830年 ポーランド立憲王国の政府がロシア帝国からの独立および旧ポーランド＝リトアニア連合王国の復活を目指して「11月蜂起」<sup>(25)</sup>を起すが、ロシアに敗れる。
- 作曲家フレデリック・ショパン（1810～1849年）は国外にて蜂起発生の報を聞き、かの有名な「革命のエチュード」を書いた。
- 1831～1834年頃 「大亡命」：ロシアに敗れた11月蜂起の参加者はパリに亡命。ポーランド亡命政府を置く。
- 1930年代 イギリスから産業革命が始まる。
- ▲ 1839年 ウッチで初めて工場に蒸気機関による自動織機を導入。
- 1856年 ロシア帝国がクリミア戦争に敗れて国力が弱体化する。
- 1863年 「1月蜂起」：ロシア皇帝アレクサンドル2世がポーランド農地改革を強行したことを機にポーランド＝リトアニア連合王国の復活を目指し、旧ポーランド王国領、旧リトアニア大公国領で同時に起こした蜂起。これもロシアに敗れ、数百人のポーランド貴族が絞首刑にされ、十数万人がシベリアのイルクーツクなどに流刑となった。
- 1864年 「大亡命」と同様に多数のポーランド人がパリに亡命。「パリ・コミューン」で活躍する。
- 1871年～1878年 プロイセンによるドイツ統一。ポーゼン州（旧ポズナン大公国）ではビスマルクの文化闘争によりポーランド人に対する抑圧政策<sup>(26)</sup>が行われた。文化闘争は1878年に頓挫するがビスマルクはその後ポーランド人抑圧政策を続けた。
- ▲ 1892年 ウッチでは大きなストが起こるなど多数の工場で生産が停滞。
- ▲ 1905年 ウッチでもロシア帝国に対する暴動が起きる。
- 1916年 第一次世界大戦の最中にドイツ帝国によってその衛星国としてのポーランド王国<sup>(27)</sup>が建国された。
- 1917年 ロシア革命、ロシアからソ連へ。

### 【独立と第2共和国】<sup>(28)</sup>

- 1918年 第1次世界大戦後、ポーランド第2共和国が独立国として成立。国家元首にユゼフ・ピウスツキが就任。
- 1919年 「ポーランド救済委員会」<sup>(29)</sup>と日本による子供の救済
- 1919～1921年 ポーランド・ソビエト戦争<sup>(30)</sup>：ワルシャワを攻撃していたソ連軍に対する干涉戦争の一環としてソ連へ侵攻。ソ連軍を押し戻して翌年に停戦。
- ▲ 1922年 ウッチは旧ウッチ県の県都となるも、世界恐慌によって西側との織物貿易は遮断、ロシア革命が起こるなど混乱し、貿易はストップ。街は失業者であふれ、労働者による暴動も起きた。
- 1924年 ソ連でレーニン死去。その後激しい党内抗争を経てスターリンが後継として実権を握る。
- 1926年 ピウスツキ<sup>(31)</sup>が軍事クーデターをおこし、9年後に死亡するまでポーランドの支配権を完全に掌握。

### 【第二次世界大戦と冷戦期】

- 1939年 ナチス・ドイツがポーランドへ侵攻。
- それに対してイギリスがドイツへの宣戦布告をして第2次世界大戦がはじまる
- ▲ ウッチもドイツ国防軍によって占領される
- 1939年8月 ナチス・ドイツとソビエト連邦が締結した独ソ不可侵条約の秘密条項によって、国土は



ドイツとソ連の2か国に分割される

- 1939年9月 ナチス・ドイツ、スロヴァキア、ソビエト連邦、そしてソビエト占領域内からヴィリニュス地域を譲られたリトアニアの4か国で分割占領。
- 1940年頃 カティンの森事件<sup>(32)</sup>
- 1941年 ナチスがポーランド内に強制収容所（アウシュヴィッツ、トレ布林カ、マイダネク）の建設をはじめる
- 1942年 ロンドンのポーランド亡命政府首相シコルスキ<sup>(33)</sup>は欧州統合を呼びかける。
- 1943年 ワルシャワのゲットー（ユダヤ人居住区）でポーランドのユダヤ人による抵抗運動がおこるが、4週間でナチスに制圧され、ゲットーは破壊される。
- 1944年 ワルシャワ蜂起：8月にポーランド人が蜂起し、ワルシャワの支配権を掌握するが、10月にナチスがその支配権を取戻し、ワルシャワの街を焼き払う。ソ連軍はワルシャワ郊外で蜂起の壊滅まで侵攻を止める。
- 1945年 ソ連軍がワルシャワを占拠し、ドイツ軍をポーランドから追い払い、蜂起のレジスタンスも逮捕、親ソ連の政権を立てる。ポツダム会議で、ポーランドはソ連に領土を取られるが、ドイツからは領土を取り戻す。
- ▲ 1945年 ワルシャワが徹底的に破壊されてしまっていたので、1948年まではウッチが事実上の首都となっていた。そのまま首都をウッチに定めるという計画もあったが、1948年に本格的にワルシャワ再建が始まるとともにその案は消えた。
- 1948年 共産党（ポーランド労働者党）が社会党を併合してポーランド統一労働者党となり、一党独裁体制「ポーランド人民共和国」となる。大統領は「小スターリン」と呼ばれた。<sup>(34)</sup>
- 1949年 西側のマーシャル＝プランに対抗し、ソ連は東欧諸国を集めてコメコン（経済協力機構）を作る。
- 1950年 「シューマン宣言」を経て、1952年E Uの前身となる「欧州石炭鉄鋼共同体（European Coal and Steel Community）」設立。
- 1955年 ポーランド、チェコスロバキア、ハンガリー、ルーマニアの4国が、ソ連の指導のもと、北大西洋条約機構（NATO）に対抗する軍事同盟としてワルシャワ条約機構をつくる。
- 1956年 ソ連共産党第20回大会でのスターリン批判を受けて、ポズナン暴動（1956年6月）が勃発。同年10月に選出されたりベラルな党第一書記ブワディスワフ・ゴムウカのもと、選挙制度の改善、カトリック教会や知識人団体の自治の強化などが行われた。
- 1958年 ローマ条約により「欧州経済共同体（EEC）」と欧州原子力共同体が発足。
- 1968年 チェコ事件：「プラハの春」を弾圧し、ソ連軍を中心にワルシャワ条約機構軍が軍事介入。
- 1978年 クラクフ出身のカロル・ユゼフ・ヴォイティワ枢機卿が教皇に選ばれ、ヨハネ・パウロ2世となる。<sup>(35)</sup>
- 1979年6月 ヨハネ・パウロ2世が故国ポーランドを訪れ、国民に熱狂的に迎えられた。これがポーランドの民主化運動、ひいては東欧全体の民主化運動に決定的な役割を果たす。
- 1980年 グダンスクのレーニン造船所で、レフ・ヴァウエンサ（ワレサ）らが独立自主管理労働組合「連帯」を設立。「連帯」はきわめて大きな支持をうけ1981年には組合員1,000万人の組織に成長。社会主義政権は統制を維持するために2年間の戒厳令を発令。
- 1983年 レフ・ヴァウエンサ（ワレサ）はノーベル平和賞を受賞。
- 1989年 ベルリンの壁崩壊（東欧の民主化運動はポーランドがリードした）
- 1989年 円卓会議を経た後総選挙により、非共産党政府が成立、民主化が実現し、ポーランド人民共和国と統一労働者党は潰滅。この1989年9月7日から現在までは「第3共和国」。
- 1990年 レフ・ヴァウエンサ（ワレサ）がポーランド大統領に選ばれ、産業の民営化など多くの改革を始める
- 1991年 ソビエト連邦崩壊とともにロシア連邦が成立。
- 1993年 マーストリヒト条約で「欧州共同体（EC）」発足。
- 1993年 駐ポーランド・ロシア連邦軍（旧ソビエト連邦軍）が、ポーランドから全面撤退。
- 1997年 ポーランドの国会が新憲法を承認、大統領から首相に行政権が大幅に委譲。
- 1999年 ポーランド、NATOに加盟。
- 2004年 「欧州憲法条約」が策定され「欧州連合（EU）」発足、ポーランド加盟。



#### (4) ポーランドの歴史上の特徴

以上、世界史や欧州史に明るい人なら当たり前のことかもしれないが、改めてポーランドの歴史を振り返るといくつかの興味深い特徴が見える。

##### ① アイデンティティ

ポーランドの歴史を振り返ると、全体を通じて強烈なポーランドとしてのアイデンティティの強さを感じる。

1000年の間の度重なる侵略や国土分割、国家消滅、文化弾圧、海外亡命の激動の歴史の中で、決してあきらめない抵抗精神、反骨精神を支えたのは、「ポーランド」としてのアイデンティティであり、その根源は、ポーランド語とキリスト教カトリックであったといっていよいであろう。

同じスラヴ系の民族で言語を共有しながら、東スラヴのウクライナ、ベラルーシがキリル文字で、西スラヴのポーランド、リトアニアはローマ字表記である。ローマ字表記のスラヴ系言語というのをかたくなに維持してきた。

また、一貫してローマ・カトリックの強固な信仰を維持しており、宗教を否定して教会を弾圧した社会主義ソ連の支配下にあった時期にも、ローマ教皇としてポーランド人初のヨハネ・パウロ2世（ポーランド語ではヤン・パヴェウ）を輩出している。今でもポーランド中の至る所に夥しい数のヨハネ・パウロ2世の像があり、花が添えられるなど国民の敬愛を集めている。

ポーランド人としてのアイデンティティは近代産業の分野にも見ることができる。プロイセンの抑圧政策のもとで、多くのポーランド人が炭坑夫（いわゆる3K職場の典型）としてドイツのルール工業地帯、ベルギーのリエールなどの産炭地域に移住を余儀なくされたが、移住先でも炭鉱や列車などに「ポーランド炭坑」「ポーランド列車」などの名前を残している。

これ以外にも度重なる侵略や国土分割、社会主義化など、その時々事情によって非常に多くのポーランド人が欧米を中心に海外に移住している。11月蜂起や1月蜂起、世界大戦時の亡命政府とともにパリやロンドンに亡命したポーランド人は、亡命先でも文化的・政治的に活躍した。特にアメリカではポーランド系アメリカ人は有力なエスニック・グループを形成している。

やはりカトリックで愛国的なアイルランド人も多く労働者として海外、特に英連邦諸国に移住しており事情は似通っている。

ただ、ポーランドは欧州でも最もユダヤ人（ユダヤ系住民）の多い国であったため、移住や亡命ポーランド人の中には、かなりの数のユダヤ人も含まれている。

##### ② 自由と民主主義

既に15世紀初頭のコンスタンツ公会議の場で、パヴェウ・ヴウオトコヴィツは多数の非カ



トリック教徒（主に正教徒）を含むリトアニアと一緒にドイツ騎士団と対峙したことについて、カトリックに対してリトアニア人の「民族自立の国家主権」「生存権」「財産権」「自衛権」を主張して認めさせるという快挙を遂げ、現代思想を5世紀も先取りしていたと言われている。

16世紀には名宰相ヤン・ザモイスキが開明的で民主主義的な政策に辣腕を振るう。自身の領内でも農奴制の廃止や教育の普及、住民の政治参加に尽力し、ルネサンス型理想都市「ザモシチ」を建設している。

また、フランスやイギリスの市民革命より200年も前から、国王の選挙制度、民主的な立憲君主制や議会制度を運用してきた。「王は君臨すれども統治せず」という有名な言葉は、イギリスの立憲君主制度を指すものとされることが多いが、実際は16～17世紀に宰相と大元帥を務めたヤン・ザモイスキの言葉である。

1791年には欧州初の成文憲法案（「5月3日憲法」）を制定。同憲法によってシュラフタ身分の都市民への開放などを進め、世界初の立憲君主制が成立している。同時に世界初の「教育省」を設置するなど、開明的な政策運営を行ってきた。

また、欧州全域で迫害されていたユダヤ人に対しても、独ソの占領下以外ではゲットーを作らないなど、その自由や権利を認める寛容性のある政策を展開し、多くのユダヤ人がポーランドを頼って移住してきた。宗教についても一貫して寛容であった。

ポーランドではローマ・カトリックが「国教」であり、国王はローマ・カトリック教徒であるべきだとされたものの、個人レベルの信教の自由は法律で保障されており、古くは14世紀の「カリシュの法令」以来ユダヤ教徒にも適用されていた。

人権、という意味では、1918年にポーランド人のイレナ・コスモフスカは世界初となる女性大臣（社会相）に任命されている。

1942年、ロンドンのポーランド亡命政府首相シコルスキが欧州統合を呼びかけ、広範な欧州連合、EUの成立に至るきっかけを作った。その背景には、過酷な歴史の中で平和を希求する強い意志と、民主的な政治運営を率先して実現してきたポーランド「らしさ」があると見ることができる。

ことほどさように、ポーランドは同時代の他のどの国に比べても先進的な人権意識と時代を先取りする進歩性を持った政策を展開してきた。この、成熟した自由と民主主義の土壌が、ポーランドの黄金時代の文化や芸術の開花の根底にあると考えられる。

時間は短いが、同じように民主的で平和であった第1次世界大戦後のポーランド第二共和国において、第3代首相を務めたイグナツィ・ヤン・パデレフスキ（Ignacy Jan Paderewski, 1860～1941年）は、政治家・外交官であるだけでなく、ポーランドを代表するピアニスト・作曲家の一人であり、リベラルな政治的安定と文化・芸術との相関関係を示す典型的な例と言ってもよいであろう。

### ③ ポーランドのユダヤ人と創造都市論

ポーランドにおけるユダヤ人と言えば、ナチス・ドイツのホロコーストに関連するイメー



ジが強い。人類史上未曾有の非人道性はもとより、多くの著作や映画などが作られたこともこれを補強することとなった。しかし、ポーランドにおけるユダヤ人の歴史は第2次大戦期だけではなく、その歴史の黎明期まで遡り、ポーランドの歴史そのものと常に一緒にあった。そして迫害・虐殺よりも共存あるいは積極的保護の歴史の方が長く、歴史的に「多文化共生」の先進国でもあったのである。このことの背景には、隣接する東西の強国と国境を接し、東西交流のせめぎ合う「欧州の十字路」に位置している地理的・地政学的な状況もある。

現代のポーランドは、度重なる戦乱による国民の国外流出と、第2次世界大戦後国土全体が西側に移動したこともあり、国民の97%がポーランド人という単一民族国家となっている。しかし、かつては欧州有数の多民族国家で、特に欧州に定住するユダヤ人が最も多かった。そのため、単一民族といっても純粋なポーランド人は少数派で、先祖にはユダヤ人、ドイツ人、ウクライナ人、ロシア人など多様な民族の血筋が混交しており、単一民族内に「民族のるつぼ」と呼ばれる状況が存在している。現在、ポーランド人以外では主に東部にウクライナ人、リトアニア人、ベラルーシ人、ルシン人、リプカ・タタール人、主に旧ドイツ領の西部にドイツ人、そしてユダヤ人が全域に存在する。

長い共存と定住の歴史の中で、宗教的にも婚姻関係によってもその純粋性は低下し、全ポーランド人の90%はその先祖に少なくとも1人のユダヤ人がいると推測されている。20世紀になっても伝統を重んじたオーソドックスなユダヤ人の多くは、ホロコーストや共産主義のもとで虐殺されたり迫害されたりしてアメリカなど海外に移住していったため、多くのユダヤ人（系）を含む現ポーランド人の95%はカトリック教徒である。

ポーランドのユダヤ人の起源は、記録では10世紀頃の東西貿易の商人ということになるが、この地に定住するようになるのは第1回十字軍の11世紀初頭である。パレスチナの地を追われて各地に離散したユダヤ人であるが、欧州では非キリスト教徒であるために激しく迫害されていた。そこで宗教に寛容な伝統をもつポーランドへ集まってきたのである。特に1264年のカリシュ公ボレスワフの「カリシュの法令」によりユダヤ人の権利と安全が保障され、14世紀にはカジミェシュ「大王」がこの特権を全国に広げると、さらに多くのユダヤ人が移住してきた。

当時の欧州全般のキリスト教社会では、ユダヤ人は聖書でキリストを「売った」とされる「ユダ」の子孫と解釈され「キリスト殺し」の汚名をかぶせられていた。就職差別で通常の職業に就けずにキリスト教が疎んじる金融業に従事したユダヤ人が多く、シェイクスピアの「ヴェニスの商人」に登場するシャイロックのような「悪辣な金貸し」のイメージが定着していた。実際、特に東欧からロシアの貧しい農民などはユダヤ人から金を借りることが多く、これへの反発もあってユダヤ人に対する暴力は一般的で、ロシアとその周辺では、ユダヤ人をいじめるというだけの意味の「ボグロム」という一般名詞まであった。

確かに国王の保護の背景にはこのユダヤ人の財力の利用とユダヤ人特別税の徴収という下心もあったとされるが、ポーランドでは企業経営（本稿のウッチの事例もその一つ）はもとより、政治、経済、文化の幅広い分野でユダヤ人が活躍していた。16世紀になると宗教改革で迫害されたユダヤ人も移住してきたが、彼らは伝統を重視したコミュニティを都市に形成、



自治組織「カハウ」を置き、シナゴグや学校、墓地などの運営まで行った。全国のカハウの上部組織として1580年に国王ステファン・バトルイは国の身分制議會を参考に「ユダヤ人議會（ヴァード）」を設け、ユダヤ人の自治権は大いに充実した。その結果、ポーランドは中世から第二次世界大戦のホロコーストまで世界で最も多くのユダヤ系国民を抱え、ポーランド分割で国家が消滅した18世紀末の時点で世界のユダヤ人の約70%がポーランドに住み、他のキリスト教国からは「ユダヤ人の楽園」とまで呼ばれていた。

それでも、都市によっては強固なユダヤ人への偏見と国王による身分保護への反発から、ユダヤ人の居住などを制限する「不寛容令」を定めることもあった。

その後の17～18世紀はポーランドにとって激動の時代になっていくが、その間、ユダヤ人も多くの試練に直面した。1648年にウクライナで起こったポグロムのフメリニツキーの乱など、ポーランドの衰退する時期にはユダヤ人への迫害も過酷になった。ポーランドの分割やそれに反発する蜂起にあたっては、ユダヤ人とポーランド人は連帯したり反発したりを繰り返していたが、概して伝統を重んじるユダヤ人はポーランド人との協力には不熱心であった。

第2次世界大戦下においては、ナチス占領下のポーランドではドイツ本国と同様のユダヤ人差別、隔離政策が適用され、当時のポーランド人口のおよそ1割に達するユダヤ人（多くはユダヤ系ポーランド人）はゲットーに強制的に移住させられ、ついには強制収容所、そして絶滅収容所に送られた。なお、絶滅収容所が作られたアウシュヴィッツは、もともと数世紀にわたってユダヤ系住民が定住していた場所である。

中にはユダヤ人を匿い、逃亡・亡命を援助したポーランド人もあったが（「シンドラーのリスト」のオスカー・シンドラーなど）これらは少数派であり、多くのポーランド人はキリスト教社会に強固に根付いていた偏見などから、ドイツによるユダヤ人迫害に無関心ないしは傍観の立場をとり、ドイツと一緒にユダヤ人の虐殺に加担する者もあった。ドイツ占領下でポーランド人自身も「劣等民族」として差別の対象とされていた時期に、ポーランド人によるユダヤ人虐待があったことは悲しむべきことではあるが、ドイツ占領下のフランスでも同様に、ナチスによる自身への虐待・処罰から逃れるために、心ならずもユダヤ人虐待に加担せざるを得なかったという事情もあるだろう。

独ソによる国土分割に続き、ドイツ敗戦後ソ連赤軍が進駐した冷戦時代には、米ソ両大国の政治的軋轢（イスラエルを支持するアメリカと、反イスラエルのアラブ陣営を支持するソ連）の中で、ユダヤ人は新たな社会的疎外に直面することとなった。これとは別にロシアでは、共産主義のソ連の時代も含めて、ほぼ一貫してユダヤ人は迫害され続けていた。

こうしてポーランドの歴史におけるユダヤ人の状況を振り返ると、ポーランド王国の国力が充実していた時期にはユダヤ人の権利や自由も保障され、経済、文化、芸術など多彩な分野で活躍する人材が出ていた。一方、ロシアやドイツに国土分割、占領されるなどして国力が衰えた時期には、ユダヤ人は迫害され、活躍することができず、志を持つユダヤ人はアメリカ、カナダ、オーストラリアなどの当時の新興国に移住・亡命していった。

創造都市論において、リチャード・フロリダは人的資本（「創造階級」＝クリエイティブ・クラス）の重要性について3つのT、すなわち「Talent：才能」「Technology：技術」



「Tolerance：寛容性」を備えることが重要であるとしている。

このうち、寛容性については今日で言う「多文化共生」に通じるものであり、民族や宗教、性別、さらには性的指向などにとらわれずに、多様な人材がその才能を発揮できる都市が創造都市として発展し、発展をリードできる都市であるとされる。

ポーランドのユダヤ人がまさにこれに当てはまり、ポーランドの社会が安定して寛容性を持っているときに、ユダヤ人を含む多彩な人材がその能力を発揮している。逆にポーランド国内での弾圧が激化すると、有能な人材はより自由のあるアメリカなどに移住してしまい、今度は移住先のアメリカでその能力を発揮することとなった。

本稿で取り上げるウッチの事例では、決して王国が安泰の時期ではなく、ロシア領に編入されていた時期ではあるものの、ロシアによる産業振興の優先政策のもと、一種の権力の空白のような状況が出現し、ドイツ人やユダヤ人にも活躍の門戸が開かれて産業が発展したものと見ることができる。その頂点に立つのがユダヤ人企業家のイズラエリ・ポズナンスキで、ウッチ最大の工場コンプレックスを建設し、ウッチ随一の大富豪にまで出世することができた。

また、クラクフのカジミェシュ地区のように、ユダヤ人との長い共存の結果の蓄積の残るユダヤ人コミュニティ地区が、今日ではその都市の魅力的な観光地の一つとなっている例もある。(写真2～6)カジミェシュ地区では社会主義時代が終わって民主化された1988年以来、毎年ユダヤ文化をテーマとした「ユダヤ祭り」が開催される。屋外ステージやシナゴークでクレズマー音楽のライブや映画、演劇、ワークショップなどが行われる。世界各地のチャイナタウンがそうであるように、都市の中のエスニック・コミュニティ地区は、他都市にはないその都市のエキゾチックな歴史・文化の魅力の一端を担い、観光をはじめ様々な都市の活性化の震源地となっていることが多い。観光面での発展著しいポーランドでは、各地のユダヤ人地区の存在は重要なものとなっている。<sup>(36)</sup>

## 2. ワルシャワ都心の建物と景観

以下、この項の記述内容は2013年度静岡文化芸術大学紀要Vol.14の「チェコ・ポーランドの産業遺産・ミュージアムとツーリズム」の一部に加筆したものである。

ポーランドの首都ワルシャワは、1980年に世界遺産登録された旧都心のワルシャワ歴史地区(スタレ・ミヤスト)を除き、古都クラクフとは異なる近代的な大都市である。しかもその近代化はソ連の影響下、中でも強権的なスターリンの時代に進んだため、典型的なソ連型の町並みが形成されている。

すなわち、スターリン様式と呼ばれる威圧的な擬古典趣味でシンボリックな文化科学宮殿(高さ237m)が市街地を睥睨し、(写真7)不必要に広い幅員の道路と広場が幾何学的な街区を形成し、判で押したように同じ形の独立高層アパート棟がオープンスペースを挟んで平行に整列して市街地を埋めている。(写真8)この、1階に商店が入って2階以上が集合住宅になった鉄筋コンクリートのアパート群は、ル・コルビュジェが提唱してフランスでは流



行らず、ソ連や東欧、ブラジリアなどの新都市、そして日本で普及したスタイルで、日本ではいわゆる公団住宅団地でおなじみの景観である。街区の周囲に連続して口の字型に建物を建て、中庭をあけるのが普通の欧州にあっては非常に珍しい都市景観となる。欧州ではモスクワ・スタイルと呼ばれ、日本では「豆腐に目鼻」的造形と揶揄されることもある。写真は、後述するワルシャワ・ゲットーが破壊された跡地に建てられたアパートである。

今日、西側の資本が入って都市の再開発が急ピッチで進んでおり、至る所工事中である。

(写真9) 特に文化科学宮殿とワルシャワ中央駅の周辺は、シンガポール、上海やドバイと見まがうようなポスト・モダンの高層ビルが林立し、ガラス張りの巨大なドームのショッピングモールや、世界共通のデザインでアメリカの砂漠の中にあったら似合いそうなハードロックカフェのポップでキッチュな店舗などで埋め尽くされつつある。(写真10)

冷戦終了後、「スターリンからの贈り物」で抑圧の象徴のような文化科学宮殿は取り壊してしまえという意見も多かったが、貴重な歴史・文化遺産として、そして今でも多くの観光客を呼ぶことのできる観光資源として残している。実際、2つのオーケストラ、4つの劇場、シネマコンプレックス、2つの博物館、2つの公共図書館が現役で、ワルシャワ中央駅前という立地で目立つこともあり、ワルシャワ観光案内所(写真11)など90ものテナントがここに入居している。

そして、その威圧的なスターリン様式の宮殿を、さらに背の高いガラス張りの高層ビル群が押しつぶさんばかりの威圧感で取り囲んでいる様子(写真12)からは、ソ連時代に対する強烈な不快感と、一抹のノスタルジーが同居したワルシャワ市民の屈折した思いが伝わってくるようである。共産主義アートの像(写真13、14)のある本館はレストランになっている。科学技術博物館の内部は、古色蒼然としたソ連時代から変わっていないようなコンテンツで、手当たり次第に蒐集した「古道具屋の店頭のような」状態である。(写真15、16、17)

これも負の近代化遺産と呼んでもよいものであろうか。

さらに、高層ビルの足元に目を転じると、廃墟化した「ワルシャワ・ゲットー」(ユダヤ人隔離地域)の跡も保存されている。(写真18、19)は1940年にナチスによって封鎖されたゲットーの出入り口の一部である。ワルシャワ・ゲットーは、ナチスが作ったゲットーの中では最大のものである。元からここにあったユダヤ人居住区のおよそ3分の2、307haであったが、後に縮小されている。1942年からは大小2地区に分割され、およそ36万人のワルシャワ在住ユダヤ人と、他所から連れてこられたおよそ9万人が押し込められた。そして不衛生な環境の中でそのうち約8万3千人が餓死している。1942年夏にはワルシャワ・ゲットーのユダヤ人はトレ布林カ絶滅収容所へ移送され、およそ30万人がガス室で殺害された。1943年4月19日にはゲットー内で蜂起がおり、最終的にはゲットーが破壊される5月中旬までに、多くの住民が市街戦とナチスによる「焦土作戦」(建物を一つずつ焼き払う)によって命を落とした。ゲットー跡地にはワルシャワ強制収容所が作られ、囚人は瓦礫の撤去に駆り出された。さらに生存者は同年11月にマイダネク、ポニャトフ、トラヴニキの強制収容所で殺害され、生き延びたものはわずかであった。1945年1月のソ連軍到着時点で、ワルシャワ市内で生き残っていたユダヤ人は約200人だったという。[ラウル2012年]



世界遺産の歴史地区、ユダヤ人ゲットーという異文化排除の負の遺産、威圧的なスターリン様式の負の遺産、没個性の単調なデザインのアパート群、そしてそれらをさらに威圧するような現代建築の群れ、こうした文化の重層的な否定と和解の連鎖が、今日のワルシャワの都市景観を形作っている。

### 3. ウッチ

以下、(1)～(4)の記述内容は2013年度静岡文化芸術大学紀要Vol.14の「チェコ・ポーランドの産業遺産・ミュージアムとツーリズム」の一部記述内容を含み、大幅に再編して加筆したものとなる。

#### (1) ウッチの概要と歴史

##### ① 概要

人口約75万人、ポーランドではワルシャワ、クラクフに続く第3の都市で、東欧でも有数の工業都市であったウッチは、ツーリズムの領域ではほとんど知られていなかった。

しかし、およそ30ヘクタールにも及ぶ広大な複合綿製品一貫製造工場跡地が、巨大ショッピングモールやホテル、レストラン、シネコンプレックスやミュージアム3館の集積する複合再開発地区「マヌファクトゥーラ」(写真20、21、22、23)として蘇り、国内外からの集客の拠点として、また、衰退した第2次産業の町から新しい第3次産業の町に転換した成功例として、俄かに脚光を浴びている。同様の大規模開発は東欧各地に展開されつつあるが、もとの工場の建物等の残存状態が良好で、古いテクスチャーを活かして上手に再利用された事例としては他を圧する高品質な雰囲気を作り出している。

それ以外にも、ウッチには国立映画大学(後述)や中央織物博物館(後述)、映画博物館、アニメーション博物館、ウッチ音楽院、ヴワディスワフ・ストジェミンスキ美術学校、ウッチ大学、ウッチ工科大学など、隆盛を誇った繊維産業による富の蓄積を背景とした魅力的な文化施設も集積している。目抜き通りのピオトルコフスカ(ロシア語ではピョートルコフスカヤ)通りには屋外彫刻が点在し、中でもグランドピアノを弾くアルトゥール・ルービンシュタインの像は有名である。

##### ② 歴史

ウッチは、1332年に初めて都市のとして勅許を得た(成立した)が、18世紀末までは人口わずか170人ほどの小さな田舎町に過ぎず、ポーランド人と若干のユダヤ人が住んでいた。その後、ドイツ人やロシア人の入植、産業立地を経て、一時は欧州有数の繊維・織物産業の拠点都市として繁栄した。

1795年には第3次ポーランド分割によってプロイセン領内に組み込まれ、1798年、所有権は教会財産からプロイセンへと移管された。この時期ドイツ人が集中的に植民を行い、現在のウッチ郊外のノヴォソルナ、上ヴィヨンチン、下ヴィヨンチン、アウグストゥフ、オレフ

フに農業集落を形成した。1807年からはワルシャワ公国の支配下に、1815年からはロシア帝国の統治下となった。

発展の転機は国土再分割後の1815年、ウッチがロシア統治下のポーランド立憲王国領となった時に訪れた。1820年には著名なポーランドの科学者スタニスワフ・スタシツと、マゾヴィエツキ郡の領主委員会の委員長ライムンド・レンビエリンスキの両名の調査の結果、繊維産業の立地にとって完璧な条件を備えた土地であるとされた。1821年、慎重な検討を経て宗主国ロシアはウッチを工業地域として開発する方針をたて、ドイツやロシアの外部資本を導入し、織物工業や紡績工業を集積させていった。

田舎町に過ぎなかったウッチが急速に発展できたのは、ウッチがポーランド王国直轄領で新たな開発に必要な土地の配分が容易であったこと、ワルシャワ等に通じる主要幹線道路に近かったこと、勾配のある小河川が多く産業革命初期の動力源である水車動力など水資源の確保ができたこと、豊かな森林に囲まれて建築資材や燃料となる木材資源が豊富であったこと、安価で意欲的な労働力が周辺に豊富にあったことなどが背景にある。また、ロシアによる税制優遇と、特別待遇の政策的な低金利の長期融資条件の適用に惹かれて、多くの外資がこの地に進出してきた。政府の強権による既得権の撤廃と外資への優遇という政策は、今日の改革開放後の中国の経済特区を連想させる。

当時既に産業立地の進んでいたヴィエルコポルスカ地方（拠点都市はポズナン）やシロンスク地方（拠点都市はカトヴィツェ）、そしてドイツ南部やザクセン地方、チェコ、モラヴィアなどから実業家や安い労働力がウッチに急速に集まってきた。

多くの職人企業が新市街地（ニュータウン：ノーヴェ・ミヤスト：Nowe Miasto）の都心の今日ヴォルノスチ広場と呼ばれる8叉路の広場付近に立地した。

これらは最初、家族経営のファミリービジネスで、小規模な手工業の作業所であったが、これらのベンチャーがその後の発展の基盤となった。

奔流のように麻や綿の職人たちがウッチに流入し、住居が、町が作られた。こうした労働者町は、ウトカ川沿いや、物流幹線であった「ピオトルコフ貿易街道」沿いに次々の立地していった。街道は1823年にピオトルコフスカ通り（ロシア語ではピョートルコフスカヤ通り）と改名され、今日でもウッチで最も有名な通りである。

工業化は最初ドイツ人がリードしたが、やがて労働需要の増加に伴ってポーランド人やユダヤ人（ユダヤ系東欧人）もこれに加わった。最初の近代的な工場はザクセンから来たドイツ人ルードヴィッヒ・ガイヤー（ルドヴィク・ガイヤー）によって1837年に開設され、そのわずか2年後にはポーランド王国で最初の蒸気機関が導入された。ウッチで最初の高い煙突は工業発展を象徴する新しいランドマークとなる。1855年からはルドヴィク（ルードヴィッヒ）・グローマンやイウリウシュ（ユリウス）・ハインツル、カロール・シャイプラーといった意欲的な企業家達が次々と参入し、今日のズヴィチエストゥヴァ広場周辺に新しい、より大規模の工場を建設した。その後ユダヤ人事業家のイズラエリ・ポズナンスキ（後述）が参入し、ウッチ最大の事業主となる。やがてウッチのスカイラインは多数の煙突で埋め尽くされ、独特の都市景観はポーランドのマンチェスターとも呼ばれた。（写真26）当然のことながら、



煤煙やスモッグ（今なら公害問題）もまたマンチェスター同様であった。

途中、政治的混乱や関税障壁などで一時的に停滞することもあったが、当時のロシアや中国の旺盛な消費が需要を生み出し、製造拠点としてのウッチの隆盛を支えた。1866年にはワルシャワ・ウィーン鉄道のウッチでの最初の区間がウッチー・コルシュキ、のちにワルシャワやビャウストックと接続して東欧の幹線鉄道網にも接続する。1823年から1873年までに人口は10年ごとに倍増し、1870年から1890年の20年間で経済成長は最盛期を迎え、クラクフを抜いてポーランド第2の都市に成長した。工業生産額は19世紀後半の半世紀間でおおよそ30倍となり、宗主国ロシアのモスクワを脅かすほどになっていた。

人口増に伴い、劇場、ホテル、庭園なども造られ、鉄道や路面電車網も延伸された。ピオトルコフスカ通り沿いには、当時流行の最先端の建築デザインで贅を凝らした邸宅が建てられた。

当時のウッチの新興工業都市としての様子は、ポーランドのノーベル賞受賞作家ヴワディスワフ・レイモントの小説「約束の土地」（1899）や、これをもとに作られた、ウッチ出身の映画監督アンジェイ・ヴァイダの映画「約束の土地」（1974）の中に活写されている。他国からのいわば流れ者たちが、小さな家族経営の事業からスタートして大規模な工場経営に乗り出して成功するという、まさにアメリカン・ドリームのような広大なフロンティアが開けていた時代の状況をタイトルが表している。作品では、3人の野心的な若者、ドイツ人企業家、ユダヤ人投資家、資本も何も持っていないが家柄と土地だけは持っているポーランド人貴族の青年の3人が主人公で、当時のウッチの民族的・社会的・経済的状况を象徴的に表している。映画のロケ地として、現在マヌファクトゥーラとなっている工場や企業家ポズナンスキの豪華な邸宅が使われているが、工場が1970年代にもまだ旧来の設備のまま操業中であつたことに驚かされる。

こうした振興工業都市の常として、19世紀終わりごろには社会主義運動が活発化し、1892年には大規模なストが、1905年には宗主国ロシアに対する暴動が起きる。

それでも全体としては、第1次世界大戦までは工業都市としての繁栄が続き、1914年にはウッチは世界の工業都市のなかでも最も人口密度の高い（13,280人/km<sup>2</sup>）都市のひとつであった。第一次世界大戦では多くの戦死者を出し、戦後ドイツ系住民がドイツへ引き揚げたこともあり、ウッチの人口は約4割減少した。

その後、世界恐慌やロシア革命の混乱で繊維貿易は減少、経済は衰退した。

1939年にはおよそ67万人の人口で、約3分の1がユダヤ人であった。第2次大戦時、ナチス・ドイツの占領下に入ったウッチにはユダヤ人ゲットー（ウッチ・ゲットー）が建設され30万人以上のユダヤ人が強制的に移住させられた。併せて郊外にはジプシー（今日ではロマと呼ばれる）など非ユダヤ人の強制収容所や絶滅収容所が建設された。終戦までにポーランド人約12万人、ユダヤ人約30万人など、あわせて42万人以上の住民が犠牲となり、終戦時まで生き延びたユダヤ人は数百人であった。なお、ドイツ占領時に第3帝国国民となることを拒否したドイツ系市民は追放され、終戦時にもソ連軍の侵攻を恐れて大半のドイツ人がウッチから避難したため、今日ドイツ系住民の数は少ない。

市街地は大規模な戦災を免れたものの、多文化共生の町の個性は失われた。

終戦段階で30万人弱だった人口は、ワルシャワや東部のソ連併合地域からの移住者によって増加した。戦災でワルシャワは壊滅状態であったため、幸い戦災を免れたウッチは1948年まで事実上の首都となっていた。後述する国立映画大学なども暫定的にワルシャワから移転してきたもので、そのまま首都をウッチとするという計画もあった。

戦後、社会主義政権下で全ての民間企業が国有化され、資本家は駆逐される。その後の冷戦時代にはソ連を盟主とする東側経済ブロック（コメコン）の中で再び工業都市としての発展に向かうが、結果的に西欧に比べれば設備投資などは量、質ともに低い水準に留まった。老朽化した社会資本は、冷戦終了後に東欧諸国で現代的なバランスのとれた経済発展を阻害する要因となる。ソ連崩壊と東欧民主化後、工場は再び民営化されたが、設備の老朽化や従来の東側ブロックの市場の喪失などでほとんど生き残ることはできなかった。が、その反面、古い工場などが貴重な近代産業遺産として旧来の姿のまま残存したことにより、映画のロケや今日の再開発など、産業遺産を活用した新たな文化産業や都市開発の手掛かりとなったことは皮肉なことである。

## （2）企業家ポズナンスキ

### ① 概要

前述のように、「マヌファクトゥーラ」は、ウッチで最も成功したユダヤ人企業家で大富豪のイズラエリ・カルマノヴィッチ・ポズナンスキ<sup>(37)</sup>（写真27）の築いた「コットン王国」と呼ばれた工場コンプレックスの跡に建設された。

1835年には、生まれたばかりの幼子を伴ったユダヤ人カルマン・ポズナンスキがウッチにやって来て、香辛料や布の商いを始めた。その子イズラエリ・ポズナンスキ（1834～1900）は幼い頃から父から商いの手ほどきを受け、やがて繊維工業の競争の表舞台に踊り出た。1872年の自動織機の工場から始まり、その後25年間、紡績から染色など川上から川下までをカバーする綿製品の一貫製造の可能な一大工場コンプレックスを完成させる。（写真28）収益の中から何千人もの労働者のための住宅（写真29、30）や病院を整備し、自身の大邸宅や子供たち（マウリッツィとカロール）の邸宅、有名な病院、シナゴグなどを次々と建設し、ウッチ随一と言われるほどの莫大な資産を築いた。同時代の西欧では、イギリスで労働者のユートピア「ニュー・ラナーク」を建設したロバート・オーウェンをはじめ、多くの理想主義的・博愛主義的企業家（空想的社会主義者とも呼ばれた）が工場都市を建設していたが、ポズナンスキもそれほどではないにしても私財を投じて質の高い労働者のコミュニティや病院などを作ったという点で共通点がある。自身の大邸宅も工場の隣に建設し、この工場群と邸宅が今日のマヌファクトゥーラとなっている。（写真31）

### ② ポズナンスキ一族と「コットン王国」の年表（マヌファクトゥーラのウェブ・サイトなどより筆者が翻訳・加筆）



- ・ 1935：カルマン・ボズナンスキー家がアレクサンドロフ・ウツキからウッチに来る。  
ウッチの旧市場広場に小さな店を構える。イズラエリ1歳。
- ・ 1851：イズラエリは、750ルーブル相当の『資材取引商』の持参金とともにレオニア・ヘルツと結婚。この結婚により、当時「織り専門職」だったイズラエリは500ルーブル相当の製造業の財産を得た。
- ・ 1852：カルマンは息子のイズラエリに「エル材料貿易」の株式2,150ルーブル分を移転。  
資本を得て、イズラエリは自分の機織事業と、同時に綿の服の製造にも乗り出す。
- ・ 1859：イズラエリは50の機織工房と75人の職人を抱え、さらに商事会社も構えてよく繁盛した。
- ・ 1860：大いに資本を蓄積し、イズラエリは不動産市場に参入、ウトカ川流域、新市街地（ノーヴェ・ミヤスト）の東側に土地を購入。
- ・ 1865：6千ズウォチ以上の資産を得て、イズラエリはウッチの街の商人協会に加盟、シャイプラーの繊維会社の経営に参加。
- ・ 1871：イズラエリは新市街地の西側、オグロドーヴァ（Ogrodowa）通り（庭園通り）沿いに最初の建物を買う。間もなく、数千人分の労働者住宅（中層建築）など、後に「コットン王国」（今日のマヌファクトゥーラ）となる土地開発を開始。
- ・ 1872：最初の平屋の機織工場を建て、当時の技術革新である蒸気機関駆動の200台の自動織機で操業開始する。
- ・ 1874-1875：さらに1,040台の自動織機と、綿布の仕上げ工程も追加した。
- ・ 1877：オグロドーヴァ通りとザホドニア（Zachodnia）通り（西通り）の角の平屋建ての家と敷地を購入、後にウッチ最大の邸宅となる。そしてオグロドーヴァ通り沿いで最も美しいデザインの紡績工場建屋には3,600錘の紡錘を備えた。
- ・ 1878：紡績能力を50,000錘まで高め、パリ万国博覧会に製品を出品して銅メダルを授与される。
- ・ 1879：1889まで、ザホドニア通り沿いにドゥレヴノフスカ（Drewnowska）通り方向にさらに土地を買い入れた。
- ・ 1880：平屋の織物工場の横に新しい製糸部門を追加した。
- ・ 1883：自分の工場のため、ガス事業に投資。
- ・ 1884：後に、電気棟となる修理棟と、やはり後に蒸気機関棟になる鉄加工工房棟を建設。
- ・ 1885：工場内に染色部門を追加。
- ・ 1887：輸入原材料を、アメリカ、インド、エジプト産からロシア、ペルシア産に切り替え、コスト・ダウンに成功。
- ・ 1888：町の古い木造の教会のために新しい土地を入手。
- ・ 1889：会社の株式公開（上場）。
- ・ 1890：工場のための消防署を設立。
- ・ 1891：染色部門を追加し、さらに事業を拡大。
- ・ 1895-98：工場群の西端に、いわゆる「高層の」機織工場棟と「高層の」倉庫を建設。

- ・ 1900：資産は11,000,000ルーブルを超える。同年、イズラエリ没後、長男イグナツ (Ignacy) が事業を引き継ぐ。
- ・ 1902-03：ポズナンスキ邸（ポズナンスキ宮殿）が竣工。
- ・ 1904：企業は労働者食堂を整備。
- ・ 1905：鉄道の自社専用駅を開設。対ロシア暴動の悪影響も。
- ・ 1908：イグナツ死去。会社はイズラエリの義理の息子、ヤークブ・ヘルツに引き継ぐ。
- ・ 1912：新しい発電所が操業。
- ・ 1913：第一次世界大戦前には従業員7,000人を超える。
- ・ 1914-1939：第一次世界大戦後、1920年の金融恐慌などを経て、ポズナンスキの「コットン王国」の事業は破綻。1930年代にはイタリア商業銀行が事業を継承。
- ・ 1940-1945：工場群はドイツに接収される。
- ・ 1945-1950：共産政権下で工場は国有化される。
- ・ 1971：歴史的建造物保存・修復の専門家は、ポズナンスキの工場群と邸宅は、ウッチに残る最も重要な4つの物件のうちの一つであるとして、保護に乗り出す。
- ・ 1875：ウッチ市博物館がポズナンスキ邸に入居。
- ・ 1981-1989：この十年間、市の雇用と生産は低下し続ける。
- ・ 1990：金融不安。
- ・ 1991：財務省は、工場の倒産を宣言。
- ・ 1992：工場閉鎖。荒廃が進む。
- ・ 1993：新たな投資家と公的補助の交渉が始まる。
- ・ 1999-200：ポーランド・アプシス社（Apsys Polska）による再整備が始まる。
- ・ 2002：市議会は開発許可を与える。
- ・ 2003：再生工事開始。
- ・ 2006：マヌファクトゥーラ、グランドオープン！

### （3）マヌファクトゥーラ

ポズナンスキの「コットン王国」跡地に出来た「マヌファクトゥーラ」は、ウッチの観光、商業、娯楽、文化、芸術の最大の拠点として賑わっている。ソ連崩壊後の民主化と開発ブームの中で、1999年、フランスの不動産開発会社「アプシス」（過去11年間ポーランドの仕事をしている）がこれを入手し、その関連会社ポーランド・アプシス社が開発に乗り出し、入念な調査と準備を経て2003年から3年間をかけて再生し、今日の姿となった。建築デザインにはフランスやイギリスの有名な設計事務所が協力しているが、彼らはウッチに滞在して町を観察し、その住人、文化、イベントやポーランド語の基本を学んで、慎重にデザインのイメージを作っている。

古い赤レンガの工場群と、後から追加された鉄とガラスのポスト・モダン・デザインの建物とが渾然一体となっているが、基本的に赤レンガ主体の産業遺産については躯体を修復保



全してそのまま活用しつつ内装を更新し、また現代のニーズに適合させるために適宜新しい鉄やガラスなどを使った改修を行っており、独特の魅力的な景観を作っている。

広大な敷地はおよそ30haで、再整備された延べ床面積は約90,000㎡に及ぶ。敷地内には巨大ショッピングモールやホテル、レストランとパブ、iMAXを含むシネコンプレックスやミュージアム3館などが立地し、12か所に分散した広大な駐車場を備える。(写真32~42)

オープン後すぐ、ポーランド政府観光局から「ベスト・ツーリズム・プロダクト」の金賞を受賞、敷地内の赤レンガの紡績工場を改装した4つ星ホテル「アンデルス・ホテル・ウッチ」は「ヨーロッパ・ホテル・デザイン・アワード2009」で最優秀賞を受賞するなど、質的にも高い評価を得ている。

#### ① ショッピング・モール

鉄とガラスを生かしたデザインの2階建てで、240店舗以上の専門店とキーテナントの「C&A」「Lery Merlin」(フランスのデパートと家庭雑貨量販店)などからなる。テナントは、主に衣服、装飾品などファッション関連が中心で、スポーツ用品やその他家庭雑貨が充実している。(写真43、44) 隣にはスポーツ・クラブ。(写真45)

#### ② ウッチ市博物館

1975年にポズナンスキの大邸宅(写真46、47)に入居した。ウッチ市民の暮らしの様子や歴史伝統を示す貴重なコレクションを展示している。「ウッチの有名人・偉人のギャラリー」では、ウッチにゆかりのある人々の遺品や記念品を展示しており、特に世界的に有名なピアニスト「アルトゥール・ルービンシュタイン」(幼少時代をウッチで過ごした)のコレクション(妻のアニエラの寄付による)は非常に充実している。(写真48、49) そのほか、第2次大戦時の地下活動の特使、アメリカの大学の講師など数々の業績をあげ、最も正義感あふれるユダヤ人の一人とされる「ヤン・カルスキ」の間、邸宅の主であったイズラエリ・ポズナンスキの書斎(写真50)、彼とその一族の豪華な家具や調度品などが見学できる。オーク材と豪華な装飾塑像をふんだんに使った「大食堂」(写真51)は、邸宅内で最も美しくエレガントな部屋である。これらの豪華な部屋は、ナチス占領時代にはドイツ軍の施設として接収されていた。1階にはポーランドの有名画家たちのギャラリーがある。ポーランド絵画の最大級の収集家であったスペイン在住のクリストフ・ムシアウのコレクションを中心に、ヘンリク・シエミラドスキ、オルガ・ボズナンスカ、ヴォイチエヒ・コサックなどの作品が展示されている。

#### ③ 「ms<sup>2</sup>」美術館(写真52)

1895年に最盛期を迎えた、工場群の中で最も古い「高層の」織物工場棟(5階建のマンチェスター・タイプ)を改装している。ウッチ美術館「ms<sup>2</sup>」のメイン・コレクションは、ポーランドの前衛芸術のグループ(ヴワディスワフ・ストゥゼミンスキ、カタリナ・コルボ、ヘンリク・スタゼウスキ、ジュリアン・プリボシュら)によって、1923年から1931年に蒐集されたものである。彼らは、西欧の主だった有名画家(ジャン・アルプ、パブロ・ピカソ、フェルナンド・ラガーなど)に作品の提供を呼びかけたとされ

る。その後の欧州の20-21世紀のモダン・アート作品を集めており、例えばマルク・シャガール、マックス・エルンスト、パウロ・クレー、そしてポーランドのヴィトカシヤタデウシュ・カントルらの作品を通して時代の趨勢を示す展示を得意としている。

#### ④ 工場博物館

工場博物館は19世紀、ポズナンスキによって建てられた織物工場の仕上げ工程の建物に入居している。設計は、ワルシャワ蜂起博物館で有名なミロスワフ・ミジオ。インタラクティブな展示で本工場群の創業から閉鎖までの歴史を紹介している。展示内容は、常設展として19世紀当時の紡績機の様子（動態保存されている：写真53）、古い歴史、資料、ZPB Poltex（第2次大戦後、共産政権下での経営体）の元労働者に捧げられた「人々と彼らの工場」という記録書などがある。毎年、この博物館ではポズナンスキ記念日を開催している。これは「仮想工場」企画としても有名である。その他の見所としては、学童向けのマヌファクトゥーラのガイド付きツアーや、ホールの貸し出し、ワークショップなどがある。ユニークな歴史的空間で会議や宴会のできる多目的ホールは収容定員50名。「コットン - 花から織物へ-」のコーナーでは、原材料の綿花について学ぶ。その供給地は、最初は西欧の植民地であったアメリカやインドであったが、後に今日のイランやウズベキスタン、アゼルバイジャンの農場を所有したことなどが紹介されている。

#### ⑤ アンデルス・ホテル・ウッチ

オグロドーヴァ通りに面した美しい5階建てのマンチェスター・スタイルの織物工場を改装してオープンした。（写真54、55）ウッチ最初で唯一の豪華な4つ星ホテルである。建物は徹底的に保存のガイドラインに沿って改装されているが、広いフロアをホテル客室として使うために、外に面した両側に客室を並べ、中央部分は吹き抜けを設けた通路としてデザインされている。（写真56、57）また、屋上に増設されたプール（写真58）とアスレチック・ジムは、歴史的な外観を壊さないように、あえて軽快なガラス張りで追加されている。このホテルはオーストリアの「ウイーン・インターナショナル」グループの経営で、オーストリア、チェコ、ポーランドといった中東欧の地方都市を中心に展開しているユニークな企業である。

### （4）白亜の工場

中央織物博物館は、ウッチで最初の近代的な織物工場となったルドヴィク・ガイヤーの「白亜の工場」（外壁が白く塗られている）と、隣接する「ウッチ木造建築の野外博物館」からなる。「白亜の工場」は、古典的デザインの巨大な工場コンプレックスで、ポーランド初の複合工場であり、ポーランドの最も美しい工場建築のひとつとされる。1835年から1839年にかけて何度も増改築が繰り返されてきた建物は、ポーランド初の蒸気機関による紡績機、自動織機、型染めなどの設備を備えていた。

ウッチは繊維産業の歴史的蓄積のある都市で、一時は欧州でも最大級の隆盛を誇ったポー



ランド最大の繊維産業の拠点都市であることから、1946年には、既にウッチに織物博物館を作ろうというアイデアはあった。発端は市政府、文化芸術省などで、1951年まで検討が進んでいたが、1952年になってようやく、博物館の所管ではなく繊維庁の所管で、既存の、ウッチ美術館の中に作られた。

コレクションは急速に充実し、織物関連の展示は、ウッチ美術館の特別展示、市内の織物工場、そして数多くの国内の文化施設などを使って行われ、大いに関心を集め有名になった。そこで、美術館の分館として新しい独立した分野として博物館を作ることが決まり、1960年には織物の歴史博物館が設立された。さらに1975年には別の独立した組織として「中央織物博物館」という新しい名前が与えられた。そして互いに接続した4棟の時代の異なる工場棟と中庭の蒸気機関棟からなる「白亜の工場」の修理と改装を経て今日の場所に入居した。(写真59、60)

最初に軽工業省の大臣が白亜の工場を博物館にしようというアイデアを出してから、およそ50年の時を経て実現に至った。

博物館には、織物の素材から織物技術、織物製品に至る製造工程に関する、あらゆる資料が蒐集され、科学的な研究なども行われた。そして、コレクションは織物にとどまらず、織物以外のアイテム、繊維、フェルト、編み物はもとよりそれらから作られた衣装、コンテンポラリーなアート作品にまで広がった。素材は紙まで含むが、なんとなればリネンや綿製品のライフサイクルでは、使用後処分されて最終的には製紙工場でその命を終えるからである。

収集品は科学的に念入りに調査・修復され、保存され、様々な形態と方法で博物館の特徴ある各セクションのテーマごとに展示されている。

本体の延べ床面積は16,000㎡、述べ約7,000㎡の展示スペースを誇り、これまで1,000件以上の企画展を実施している。

展示は「織物の歴史」「織物の技術」「織物（を使った）芸術」「織物の工業デザイン」「民俗織物」「ファッションの歴史」「修復と保存」そして「ウッチの木造建築の野外博物館」からなる。

1982年からは世界で唯一の「国際タペストリー・トリエンナーレ」を実施し、現在最も歴史のある規模の大きい国際的な繊維芸術のコンテンポラリー・ファイバー・アートのコンペと展示会、プロモーションを展開している。

筆者らの訪問時には、ちょうどトリエンナーレが開催されていた。(写真61～63)

通常、50～55か国から120～140人のアーティストが参加する。

同博物館は、トリエンナーレだけではなく、ポーランドの大規模なイベントや展示会のオーガナイザーでもある。2004年からはポーランド・タペストリーの国内展、1998年からはポーランド・ミニチュア・タペストリー展を、2000年からはアマチュア・アーティストのポーランド・クロス・ステッチ刺繍の展示会を続けており、いずれも何万人もの入場者があった。

同博物館の織物関連の展示は、オーディオ・ビジュアルを駆使した新たな手法を取り入れている。動くジェニー紡績機の機械部品にマイクロカメラを設置して撮影されたビジュアルは、他の世界中の博物館の展示には見られないユニークなもので、特に筆者の印象に残って

いる。(写真64、65、66) 映画大学を擁する都市ならではの演出ではないだろうか。織物工業自体は現在ほとんど残っていないが、都市の近代産業の歴史を貴重な地域資源としてとらえ、織物産業が繁栄していたという歴史的な特徴を今日の都市整備に生かしているとみることができる。

隣接する野外博物館は、19世紀末から20世紀初頭の頃の木造建築が移築されている。2006～2008年に移築・修復などが行われてから公開された。内部では、伝統的な手工芸の工房が入り、職人による実演、展示即売なども行われていた。(写真67)

## (5) ウッチとポーランド映画

ウッチには、国立ウッチ映画大学がある。先進国でも国立の映画大学があるのは珍しい。後述するポーランドを代表する映画監督アンジェイ・ヴァイダ（ワイダ）はじめ、「ポーランド派」の有名な映画監督はことごとくこの出身である。

### ① ポーランド映画

1950年代以降の戦後のポーランド映画は、歴史や文学を題材とする高い芸術性と、政治的メッセージ性に特色を持っている。戦後イタリアのネオ・リアリズムの影響を受けたとされ、ヴァイダ（ワイダ）監督をはじめ、イエジ・カアレロヴィチ、クシシュトフ・キェシロフスキなど後に「ポーランド派」と呼ばれる監督たちによる作品によって国際的に高い評価を受けた。

第2次世界大戦後、強固なスターリニズムの中に取り込まれたポーランドでは、映画をはじめ、娯楽芸能を含むあらゆる分野の文化統制（負の文化政策）が進んだ。

これらは社会主義のイデオロギーを宣伝し、国民を「洗脳」する（当局の見解では「汚れた資本主義の思想から解放する」）ための道具として位置付けられた。

映画については、1945年設立の国営映画会社が全ての映画作品の制作と配給を一手に担い、映画館もすべて公営となった

『そのような悪条件でもポーランド映画が娯楽として、また芸術として衰退しなかったのは、ポーランドに受け継がれた視覚表現（絵画）の美的伝統に追うところが大きい。それは、ポーランドが中世から優れた地図製作国であったこととも関連する。つまり、ポーランドの地図は地図としての正確さをもっているだけでなく、絵画的な美しさも兼ね備えている。また、ポスターも戦間期にはアール・ヌーヴォーやアール・デコの影響を受け、芸術的に高いレベルに達していた。このような絵画的（視覚的）表現の源はアイコン製作（ママ）に帰着する。さらに画像を通して芸術以外のメッセージ、例えば政治的メッセージを伝えるという伝統も継承された。……したがって、社会主義リアリズムの中でプロパガンダの具とすべく、政府が映画産業を管理下に置こうとしても、ポーランド映画の伝統は基本的には変わらなかった。』（置村）

絵画的映像表現の歴史もさることながら、ワルシャワ蜂起を取り上げたヴァイダの代表作の「地下水道」などの作品が公開された1956年は、「十月の春」と呼ばれた反スターリニズ



ムのボズナン暴動の年であり、一時、政治の自由化・民主化が進んだ時期である。

しかし、1980年代に入ると再び文化的締め付けは厳しくなり、やはり映画大学の卒業生であるロマン・ポランスキはイギリス、そしてアメリカに活動の舞台を移し、他の監督も政治性を抑えた文芸作品を作るようになる。

東側の鉄のカーテンの中に残ったヴァイダなどは、他のアーティスト同様、当局の厳しい検閲のもとで、政治色を極力抑えつつ非常に芸術性の高い作品に傾倒していき、これらは国際的にも質の高い作品として評価された。社会主義のイデオロギーといえども歴史を超えた芸術の普遍性までは乗り越えられなかったのか、あるいは支配階層の審美眼や社会主義のもとでも質の高い芸術活動が可能であることをアピールするためであるのか、政治的プロパガンダ以外に多くの芸術的作品が作られた。一方、ハリウッドに代表される商業主義的娯楽映画は反社会主義的であるとして規制されていた。

皮肉なことに、民主化した1989年以降には政治的な規制から解放されたことにより、西側の商業主義的娯楽映画が東欧を席卷して、芸術性や政治的メッセージ性の高い作品は当局の保護がなくなり、作られにくくなった。

ヴァイダは、1926年にポーランド東北部のスヴァウキで軍人の息子として生まれ、クラクフの美術学校に進んだ後ウッチの映画大学で映画を学ぶ。代表作「灰とダイヤモンド」「地下水道」「世代」のレジスタンス三部作をはじめポーランド史を題材とする政治的なメッセージ性のある作品で有名である。一方、幼いころから周りにユダヤ人がいる環境で育ったこともあり、ウッチが舞台となる「約束の土地」のほか、「婚礼」「聖週間」などの映画作品においてもユダヤ人は重要なモチーフとなっている。

## ② 国立ウッチ映画大学

正式名称は「レオン・シレル記念国立ウッチ高等映画テレビ演劇学校」(Państwowa Wyższa Szkoła Filmowa, Telewizyjna i Teatralna im. Leona Schillera w Łodzi)。

1948年ポーランド統一労働者党の成立した年に、俳優、演出家・映画監督、写真家、撮影監督・撮影技師、テレビの制作スタッフを養成するために創設された。独裁政権下での文化統制の時期に作られた大学であるが、ポーランドの民主化の契機となった1956年ボズナン暴動以降、再び知識人や作家を党の路線に従がわせる政策に戻った1968年（ゴムウカ政権は同年ソ連軍によるチェコスロヴァキアへの軍事介入を支持し、ポーランド軍も参加させている）までの間、比較的政権が民主化して安定していた時期に、「ポーランド派」の映画をはじめとして文化的に重要な役割を担った。

開学から1958年まで、同校は俳優学校と映画作家養成学校の2つの学校であった。

第二次大戦後、ポーランドの映画産業と関連施設はワルシャワからウッチへ移動した。もともと臨時的措置とみなされていたので、俳優学校の名称は「国立ワルシャワ高等演劇学校ウッチ臨時校 The National Higher School of Theatre in Warsaw with seat in Łódź」で、分校して半分はワルシャワに戻るものの、残りは結局ウッチで現在に至っている。レオン・シレルというのは、同校の創設者であり初代総長が著名なポーランドの俳優である。もう一つの映画作家養成学校はそのままウッチに残り、1958年に2校は合併する。

この時期、同校は「ポーランドにおけるもっともリベラルでもっとも共産主義的でない高等教育機関」との評判もあり、多くの文化人や芸術家などが参集し、「ポーランドでもっともめざましく文化的なシンクタンク」とも呼ばれていた。

### ③ ハリウッドとの縁

ポーランドは、ポーランド派の文芸作品ばかりではなく、商業主義的娯楽作品を得意とするハリウッドともつながっている。

1880年代半ば、ポーランド東部の村からワーナー一家がアメリカへ移住。4人の息子たちは1920年代に映画会社を設立したが、これが「ワーナー・ブラザーズ」である。

同じように、ワルシャワ生まれのシムエル・ゲルプフィッシュもハリウッドを代表する映画会社の一つを作った。自身の名前の英語名サミュエル・ゴールドウィンを冠した「メトロ・ゴールドウィン・メイヤー (MGM)」である。

### 【注】

- (1) アウシュヴィッツ：アウシュヴィッツはドイツ語のAuschwitzで、ポーランド語の地名オシフィエンチムOświęcimのドイツ語表記に基づく。オシフィエンチムにナチスの第1強制収容所が作られたが、世界遺産として、あるいは一般的な認識としては、隣接するブジェジンカBrzezinka（ドイツ語名ビルケナウBirkenau）の第2強制収容所と一緒に取り扱われ、両者を代表する短縮名称としてアウシュヴィッツのみが用いられることもある。強制収容所の施設名称としては両者ともポーランド語の地名のドイツ語表記に基づく名称であるが、地名として用いるときはポーランド語、施設名としては当時のドイツ語が固有名詞として定着しており、ポーランド語でも施設名称としてはドイツ語呼称の方を使用している。
- (2) シンドラーの工場：第2次大戦時、ドイツ占領下のクラクフ、カジミエシュ地区の南東、ヴィスワ川対岸の工場地帯地域の中、リポヴァ通りLipowa 4番地の琺瑯工場。1939年、メーレン（当時オーストリア領、現チェコ領）生まれのズデーテン・ドイツ人の実業家オスカー・シンドラーは、ユダヤ人経営の同工場を買い取る。ドイツ軍の厨房用品を製造して急成長し、1942年末には「ドイツ琺瑯容器工場」（軍需工場）となる。45,000 m<sup>2</sup>の敷地に800人近い労働者を雇い、その中にはクラクフ・ゲットーのユダヤ人370人もいた。ドイツにより強制収容所に収容されていたユダヤ人のうち、自身の工場で雇用していた1,200人を、軍需工場の操業に必要だとして工場に置き、虐殺から救った。この有名なエピソードは、アメリカの映画監督スティーヴン・スピルバーグ（アメリカ生まれのウクライナ系ユダヤ人）によって映画『シンドラーのリスト』となって世界中で賞賛された。
- (3) 国旗と鷲：ポーランド国旗は国家としての独立の1919年に制定されたが、それ以前から使われており、その後も変更はない。白と赤の上下2色で、中世の記録によると建国者レフが夕日を背景に飛ぶ白鷲を見て旗にしたとされる。しかし19世紀の独立運動の中では、白は「共和国の尊厳」を、赤は「自由のために流された血」を表すものと意味が変わる。ソ連と統一労働党の支配下では白は「平和への願望」、赤は「社会主義」を表すとされていたが、民主化後もとに戻り現在に至っている。国内では真ん中に鷲の紋章（ポーランドの国章）を入れたものを掲げる事が多い。
- (4) ポーランド公国：ポラニェ族の国、あるいは「畑」「野原」を意味するスラヴ語の「ポルまたはポーレ」に由来すると考えられている。
- (5) ユダヤ人の迫害：欧州キリスト教社会では「キリスト殺し」の罪を背負うとされていたユダヤ人はムスリムと共に常に迫害された。彼らは土地所有を禁じられて農業の道を断たれ、ギルドから締め出されて職工の道を閉ざされ、店舗を構える商売や国際商取引の大幅制限などで商業の道を制限されていた。しばしば追放処分を受け、住居も安定しないユダヤ人がつける仕事は事実上金融以外には存在しなかった（キリスト教会はキリスト教徒に対して金を貸して利子を取る仕事は禁じていた）。11世紀末頃にはすでにユダヤ人は「高利貸し」の代名詞になっていた。被差別民でありながら裕福



になったユダヤ人はねたまれ、ユダヤ人迫害はますます強まっていった（大澤武男著『ユダヤ人ゲットー』（講談社現代新書）36ページ）。

- (6) ドイツ騎士団：ローマ・カトリック教会の公認した騎士修道会で、テンプル騎士団、聖ヨハネ騎士団と共に、中世ヨーロッパの三大騎士修道会の1つ。第3回十字軍（1189～1192年）のドイツ出身の巡礼者を保護するため、ドイツ北部の港湾都市ブレーメンやリューベックの貿易商が資金を提供して「エルサレムのドイツ人の聖母マリア病院修道会」として発足。1199年ローマ教皇インノケンティウス3世はドイツ騎士団を騎士修道会として公認。その後イスラーム勢力に本拠地を奪われ、ハンガリー、トランシルヴァニアへと移動、聖地イエルサレム奪回・保護から異教徒への対抗に性格が変わる。その後教皇との諍いなどから1225年にトランシルヴァニアから追放され、ポーランドのマゾフシェ（マソヴィエン）公コンラート1世マゾヴィエツキに招かれ、バルト海南岸の防衛につき、ポーランドとの関係が深まる。騎士団は一種の慈善団体となり、現在も存続している。
- (7) ペストの流行とユダヤ人陰謀説：欧州でペストが猛威を振るった時期、迫害されてきたユダヤ人による陰謀との流言飛語が飛び交った。しかし、他の欧州諸国に比べて、ポーランドではペストの流行が抑えられ、結果としてユダヤ人陰謀論が発生しなかったとされる。それは、東方貿易からもたらされた蒸留酒、ウォッカが普及しており、嗜好飲料としてだけでなく食器や台所などの消毒、トイレや下水の清掃や消臭、体臭や皮膚病予防のための湿布などに使われていたためであるとされる。
- (8) 13世紀、キリスト教徒とユダヤ教徒との交際禁止など、ユダヤ人は迫害を受けるようになる。神聖ローマ帝国のユダヤ人は、神聖ローマ帝国一般臣民とは区別されて「王庫の従属民」と呼ばれる法的地位を与えられて皇帝の保護を受ける一方、皇帝にユダヤ人税（ドイツ語でユーデンシュトイアー）の納税義務を負っていた。後のオスマン帝国においてもジズヤ（人頭税）の納税義務を負っていたが、ほぼ同じ制度。
- (9) カジミェシュ地区：クラクフのカジミェシュ地区にはユダヤ人コミュニティがあったが、後のゲットーとは異なりユダヤ人が閉じ込められていたわけではない。クラクフでは基本的にユダヤ人であっても居住の自由があり、ユダヤ人たち自身による行政の自治権が与えられたのがこの地区だということである。第二次世界大戦でドイツによる占領政策が行われるまで、ポーランドにはゲットーというものが存在しなかった。後にユダヤ人たちが豊かになるにつれて自治区は対岸にも広がっていった。シンドラーの工場もある同地区は、今日、多文化の共生する魅力的な観光地として賑わっている。
- (10) コンスタンツ公会議（1414～1418年）：ドイツのコンスタンツで開催されたカトリック教会の公会議。3人の対立教皇を廃し、一人の正統なローマ教皇を立てることで教会大分裂（シスマ）を終結させた。またジョン・ウィクリフと、その影響を受けたヤン・フスを有罪とした。
- (11) パヴェウ・ヴウォトコヴィツの画期的な主張：「リトアニア人のような異教徒であってもわれわれキリスト教徒と全く同じ人間である。したがって彼らは自らの政府を持つ権利（国家主権）、平和に暮らす権利（生存権）、自らの財産に対する権利（財産権）を生まれながらに保有する。よってリトアニア人がこの権利を行使し、自衛するの（自衛権）は全く正当である。」というもので、現代思想の基本的な人権および国際法の理念を先取りする世界で初めての提唱であった。時の教皇マルティヌス5世は異教徒の人権についての決定は棚上げにしたものの、ポーランドの立場を全面的に支持し、ドイツ騎士団の訴えを却下した。
- (12) 司祭戦争：ポーランド王国はポーランド王領プロシアにおける司祭の選定権をドイツ騎士団から剥奪した。同時ドイツ騎士団にもポーランド国会（セイム）への参政権を与えたが、司祭の独自選定権にこだわった騎士団はセイムに代表を送ることを拒否、1467年に司祭戦争が勃発した。1479年にポーランドが勝利。
- (13) コペルニクス：この時期のポーランドは自由な雰囲気の中で文化が花開き、多くの知識人・文化人を輩出した。トルン出身でクラクフ大学卒業生の天文学者ニコワイ・コペルニク（ラテン語名ニコラウス・コペルニクス）（1473～1543）が著書『天球の回転について（De revolutio[n]ibus orbium coelestium）』を出版、地動説を提唱。カトリックとの軋轢を恐れて死ぬ間際に出版したがすぐ禁書となり、1853年まで禁は解かれなかった。

- (14) 選挙王政：「貴族共和国」とも呼ばれる政治体制で、全てのシュラフタ（ポーランド貴族）は一人一票を持ち、「国王自由選挙」によって国王（貴族か外国の王子を選ぶかのどちらか）を決定する。ポーランド貴族の人数は常に人口の1割を超えていたとされる。アメリカ合衆国が18世紀末に独立してからしばらくの間選挙権を持つ者は合衆国全人口の1割に満たなかったことと比べると、当時のポーランド＝リトアニア連合王国では後のアメリカ合衆国に比べ選挙権を持つ国民の割合が大きかったことになる。連合王国は共和国とも呼ばれるが、この場合の「共和国」は王政でない国家を表す意味ではなく、数々の国家や民族が集まって構成される「連邦」ないしは「合衆国」という意味となる。複数の国家の連合としてはオーストリア＝ハンガリー二重帝国に近いという解釈もあるが、カトリックの秩序では元首が帝冠を受けないと帝国と名乗らないこと、参政権を持つシュラフタたちの間に財産の多寡や地位の上下はあっても参政権における差別のないポーランドは「帝国」と名乗ることはなくあくまで「共和国」を名乗った。
- (15) 国王は君臨すれども統治せず：ラテン語で "Rex regnat et non gubernat"。イギリスの立憲君主制に関連付けて紹介されることも多い言葉であるが、そもそもは大宰相ヤン・ザモイスキ（後述）の言葉で、ポーランドの政体のあるべき姿、すなわち政治の合議制、民主主義について述べたの。シュラフタはニヒル・ノヴィ（1505年）、ヘンリク条項（1573年）、そしてその後には結ばれた数多くのパクタ・コンヴェンタ（選出時における国王と貴族との契約）を通じて国王の及ばない諸特権を得た。さらにシュラフタは「黄金の自由（ラテン語: Aurea Libertas アウレア・リベルタス；ポーランド語: Złota Wolność ズウォタ・ヴォルノシチ）」と呼ばれる自由拒否権（リベルム・ヴェト）の特権を持ったが、これは議会でただ一人の反対で議案を廃案にできる権利であった。
- (16) 種々の事情：当時の他の王国と異なるポーランドの立憲君主制を嫌ったこと、自身がバイセクシュアルでありカトリックのポーランドでは以前からずっと白い目で見られていたこと、ジグムント2世アウグストの妹ですでに年老いていたアンナを女王でなく国王とした政略結婚が求められたことなどが原因で、ポーランドでの生活を窮屈と感じ嫌気がさしたとされる。
- (17) トランシルヴァニア公ステファン・バトリイ：19世紀に活躍したユゼフ・ベム将軍と並んでポーランドで最も尊敬されているハンガリー系ポーランド人。義理の兄であるジグムント2世とならぶ非常に聡明な君主で、ジグムント2世アウグストの治世からずっと政権を担当する名宰相であった大法官（内閣総理大臣）ヤン・ザモイスキと連携して国内外のさまざまな問題の解決に積極的に尽力した。
- (18) 名宰相ヤン・ザモイスキ：2人の名君ジグムント2世王とステファン・バトリイ王の全面的な信頼を受け、1578年に大法官に就任、1580年にはクラクフ城代を兼任、1581年にはポーランド＝リトアニア連合王国全軍の事実上の最高司令官（名目上の最高司令官はポーランド国王兼リトアニア大公）である王冠領大ヘトマン（大元帥）を兼任し、現在の立憲君主制の国家の首相に相当する強大な行政権を持ち、その優れた政治的見識と実務的能力で1605年6月3日に死去するまでポーランドを率いた。穏健で自由主義的な政策は多くの支持を集め、同調者は「ザモイスキたち（ザモイチュチ）」という緩やかな政治グループを形成していた。また、自分の領地内の農奴制を禁止、全住民に基礎教育を施し、広く住民に地方政治への参加を促すなど非常に開明的な領主でもあった。人間解放を唱えるルネサンス思想にも同調、イタリアから建築家を呼び寄せて当時の先端的デザインのルネサンス都市「ザモシチ」を建設、周辺地域の経済や文化発展の中心地とした。
- (19) 国王ジグムント3世：国王ジグムント3世はスウェーデン生まれであるが、母がヤギェウォ家のポーランド人だったこともあってポーランドで育ち、ポーランドの教育を受けていた。高い規律意識を持つイエズス会の影響を受け、歴代の王のうちで最も熱狂的なローマ・カトリック主義者であった。戴冠した当初は当時の首都であったクラクフに居を構えていたが、後にワルシャワに遷都。
- (20) ポーランド＝スウェーデン同君連合の解消：ジグムント3世のもとでポーランドと同君連盟となっていたスウェーデンでは、彼の留守中に叔父で摂政を務めていたプロテスタントの「カールの反乱」が起きる。ジグムント3世は反乱鎮圧を試みるが失敗する。1599年カールがスウェーデン王位につき、ポーランド＝スウェーデン同君連合は解消した。
- (21) ボグロム：ボグロム（погром パグローム）というロシア語の原意は破滅・破壊を意味する。一般的には、加害者の如何を問わず、自発的・計画的にユダヤ人に対して行なわれる集団的迫害行



為（殺戮・略奪・破壊・差別）を指す。

- (22) ポーランド・ロシア戦争：立憲君主制、すなわち民主主義の王政に反対し貴族の既得権益を維持しようとする改革抵抗勢力が、ロシアのエカチェリーナ2世と組んでポーランドに起こした干渉戦争。ポーランド軍では王の甥ユゼフ・ポニャトフスキと元アメリカ軍将軍でアメリカ独立戦争の英雄タデウシュ・コシチュシコ（アメリカ名タディーアス・コシューシコ）が指揮を取った。2人の軍師のもとで善戦していたが、国王スタニスワフ2世は改革派全滅の恐れからロシア側と妥協して戦争を中止。この直後の1793年、第二次ポーランド分割が行われた。ヴァイダ監督の映画『パン・タデウシュ物語』（原作はアダム・ミツキエヴィチの叙事詩）、池田理代子の漫画『天の涯まで・ポーランド秘史』（主人公はユゼフ・ポニャトフスキ）は憲法制定前からこの時代までが舞台。
- (23) コシチュシコ蜂起：1794年3月24日、コシチュシコはクラクフ中央広場で武装蜂起を呼びかけた。この蜂起では、当時抑圧されていた農民層を取り込んだ。4月4日の「ラツワヴィツェの戦い」において、大鎌で武装した数千人の農民兵が活躍してロシア軍を撃退。5月7日、コシチュシコは農民の人格的自由、すなわち農奴解放宣言を意味する「ポワニェツ宣言」を発した。（戸波）
- (24) 国民教育委員会：1793年、議会によりワルシャワに国民教育委員会（Komisja Edukacji Narodowej, KEN）が設立された。これは貴族から平民まですべてのポーランド人を対象にしたものであり、人類史上初の教育省である。
- (25) 11月蜂起：1830～1831年、ポーランドとリトアニアで発生したロシア帝国の支配に対する武装反乱。ワルシャワでロシア帝国軍の陸軍士官学校に所属する若い下士官たちが、ピョートル・ヴィソツキに率いられて蜂起したことが発端となったため「士官学校の革命」とも呼ばれる。やがて蜂起はポーランド全土に波及し、善戦した地域もあったがイヴァン・パスケヴィチ将軍率いるロシア軍に鎮圧された。
- (26) ポーランド文化抑圧政策：国土分割の結果、プロイセン領に組み込まれた地域にはポーランド人300万人以上が残り、ドイツ全人口の6%に達した。ドイツ人は領内に残る異文化・異民族のポーランド人を脅威としてその故郷から強制移住させる。多くは、当時工業が発展してきたドイツ西部のルール工業地帯へと移住させられ、炭坑夫などとして働いた。ドイツ国内では彼らは「ボラック」「ボラッケン」といった蔑称で呼ばれ差別された。差別から脱するためには改姓してドイツへの帰化を要求された。迫害を逃れるためにルールからベルギーのリールやフランスの炭鉱に移った者も多かった。（中村）一方、抑圧政策によってかえってポーランド人の「連帯」とカトリック信仰は確固たるものになったとされる。ポーランド人抑圧政策はヴィルヘルム2世がビスマルクを解任した後も続けられ、ドイツ帝国の第一次世界大戦での敗北（1918年）まで続いた。
- (27) ポーランド王国：1916年、第一次世界大戦の最中にドイツ帝国によってその衛星国としてのポーランド王国が建国された。国王が決まるまでの間としてハンス・ハルトヴィヒ・フォン・ベセラーが総督となり、3人のポーランド人が摂政を務め、6人のポーランド人政治家が歴代首相となったが、結局国王は決まらなかった。
- (28) 第2共和国：1918年11月11日に第一次世界大戦が終結すると、ヴェルサイユ条約の民族自決の原則により、旧ドイツ帝国とソビエト連邦から領土が割譲され、ユゼフ・ピウスツキを国家元首として共和制のポーランド国家が再生した。
- (29) ポーランド救済委員会：ポーランド・ソビエト戦争で、ソビエト各地にいたポーランド人に危機に陥り、子供達だけは母国へ戻したいとウラジオストクのポーランド人により「ポーランド救済委員会」が設立された。1919年にポーランドと国交を結んだばかりだった日本は、人道的な見地から救済に乗り出した。
- (30) ポーランド・ソビエト戦争：第一次世界大戦後の1919年2月から1921年3月にかけてウクライナ、ベラルーシ西部、ポーランド東部を中心に行われたポーランドとソビエト政府のあいだの戦争。ポーランドは、ロシア革命の混乱に乗じて講和会議で決まった国境線より東のロシアによる国土分割前の境界線に野心を持ち、革命への干渉戦争の意味もありソ連に侵攻する。当初は西欧特にフランスの援助もあり、ウクライナのキエフ近郊まで進むが、トゥハチェフスキー率いる赤軍が反撃。逆にワルシャワ近郊まで攻め込まれた。しかしユゼフ・ピウスツキ将軍の反撃によりソ連軍は一斉退却を余儀なくされる。これは「ヴィスワ川の奇跡」と呼ばれ、翌年に停戦した。なお、実際に戦

争が行われたのはソ連邦成立前である。

- (31) ピウスツキ：ユゼフ・ピウスツキ（Józef Klemens Piłsudski 1867年～1935年）は第二次ポーランド共和国の初代国家元首、国防相、首相、ポーランド軍創立者、同軍元帥。1922年、国家元首職を引退したピウスツキは、その後の政治腐敗を憂い、1926年にクーデターを起こし再度政権を奪取。ポーランド国民の圧倒的支持のもと、独裁的な強権政治を主導したが、この時期ポーランド経済は急速に発展し、国力が強化された。1935年のピウスツキ没後、ユゼフ・ベックを首班とする集団指導体制に移行するが、内政・外交で失敗を繰り返し、後にナチス・ドイツとソ連の介入につながったとされる。兄は文化人類学者でアイヌ研究家のプロニスワフ・ピウスツキ。
- (32) カティンの森事件：カティンの森事件は、独ソ両国の占領下に置かれていたポーランドで、ポーランド国軍の将校約1万人を含む多くの兵士と民間人が行方不明となり、スモレンスク郊外のカティンの森で虐殺されたとの噂が流れたことに端を発する。当初虐殺の事実ドイツ軍によって発見されるが、ソ連はこれをナチスの仕業であるとするデマを流し、ソ連軍による虐殺を匂わせる断片的な情報はあったものの、冷戦終了まで真相は究明されなかった。ソ連崩壊後、ロシア政府も自ら調査を行い、虐殺がドイツではなくソ連の仕業であったことが確認されているが、その後ロシア政府はこれを「スターリンの犯罪」として政府の関与を否定し、態度を硬化させて調査を打ち切っている。本当の理由は、ソ連占領下のポーランドで反政府活動を封じるため、あらかじめ優秀なポーランド軍将校を大量に葬り去ったのだと考えられている。2010年にはポーランド主催の追悼式典に参加するためにレフ・カチンスキ大統領が乗っていたポーランド政府専用機がスモレンスク空港付近に墜落し、大統領はじめ政府高官が多数死亡した。翌年には墜落事件の追悼碑の碑文がロシア側によって改竄されるなど、冷戦後もロシアによる不穏な動きが物議を醸している。
- (33) シコルスキ：1942年ロンドンのポーランド亡命政府の首相ヴワディスワフ・シコルスキは、ナチスによりドイツを追われイギリスで亡命生活を送っていた元ベルギー首相パウル・ヴァン・ゼーラントに対し、欧州統合への道筋を具体化することと呼びかけた。ヴァン・ゼーラントはシコルスキの呼びかけに応じ、「戦後ヨーロッパ経済再建に関する重要ないくつかの点についての予備ノート」を作成、連合国政府の外相に送付した。これにより、実効性のある政治運動としての欧州統合運動が産声を上げた。
- (34) 党への権力集中が進み、ソ連型社会主義が導入される。党中央委員会議長で大統領ボレスワフ・ビェルト（1892～1956）は強権的なポーランド版スターリニズムを推し進め、「小スターリン」と呼ばれた。
- (35) ヨハネ・パウロ2世：ポーランド語では「ヤン・パヴェウ」、本名「カロール・ユゼフ・ヴォイティワ（Karol Józef Wojtyła）」は1920年、クラクフ近郊のヴァドヴィツェに生まれた。父カロールはハプスブルク家の軍隊に仕えたこともある退役軍人であった。彼は若くして兄や両親を亡くす。その後クラクフのユダヤ人社会に親しんでいたこともあり、後に教皇としての姿勢に影響を与えたとされる。1939年、19歳のときドイツのポーランド侵攻で大学が閉鎖、鉱山や工場で働きながら勉学を続け、同時に地下演劇の俳優、脚本家としても活動していた。第二次世界大戦中の1943年に、聖職者を志すが、神学校の運営が禁止されていたため非合法の地下神学校に入り、1946年に司祭に叙階。司教の推薦でローマの教皇庁立アンジェリクム神学大学に進学した。1948年ポーランドへ戻り、クラクフの教区司祭となる。その後、クラクフのヤギェウォ大学、ルブリン大学神学部で倫理神学を教え、1958年クラクフ教区の補佐司教に任じられた。1964年クラクフ教区の司教に任命され、1967年には同教皇によって枢機卿に親任された。1978年、在位わずか33日で死去したアルビノ・ルチアーニ（ヨハネ・パウロ1世）の後、新教皇に選出された。ポーランド人初のローマ教皇の誕生は故郷ポーランドにおいて、ナショナリズムの高揚とソ連への抵抗心を一層大きくすることになった。このことは1980年の独立自主管理労働組合「連帯」による国内改革への要求へとつながり、ひいては1988年以降のポーランド民主化運動へとつながってゆくことになる。
- (36) ポーランドはEUに属し、出入国手続きは簡素であるが、通貨はまだズウォチのままで、物価素値は西欧よりも格段に低い。また、激しい社会変革の中で治安が悪化している東欧地域にあって、比較的治安がよいこともあり、近年のポーランドの観光産業は順調に成長している。
- (37) イズラエリ・カルマノヴィッチ・ポズナンスキ：ミドルネームは父の名がカルマンであったことを示すロシア式の呼名。ポーランド語としてはミドルネームは必要ない。恐らく希望を込めてユダヤ



人の心の故郷のイスラエルを名前に付けたと考えられる。ポズナンスキ姓のルーツはスロベニアと推測される。

#### 【参考資料】

- (1) Andrzej Machejek 編“THE POZNAŃSKI FAMILY - JEWISH ENTREPRENEURS FROM ŁÓDŹ”2010 Museum Minista Łódź
- (2) “Central Museum of Textiles The White Factory Open-air Museum of the Łódź Wooden Architecture”2012 Information Leaflet
- (3) ローザ・ルクセンブルク 肥前栄一（訳）『ポーランドの産業的発展』1870年 未来社  
藤井和夫『ポーランド王国における繊維工業の発展（1815-1914年）』1989年 日本評論社
- (4) ECG編集室『中欧—ハンガリー、ポーランド、チェコ、スロバキア』1998年 トラベルジャーナル
- (5) 渡辺克義（編）『ポーランドを知るための60章』2001年 明石書店
- (6) 河野肇（訳）『ケンブリッジ版世界各国史 ポーランドの歴史』2007年 創土社Z
- (7) 渡辺克義（編）『ポーランド学を学ぶ人のために』2007年 世界思想社
- (8) ザイラー・デッカー（著）リチャード・バタウィック／イウォナ・サガン（監修）小林利香ほか（訳）  
「ナショナルジオグラフィック 世界の国 ポーランド」2010年 ほるぷ出版
- (9) 大澤武男著『ユダヤ人ゲッター』（講談社現代新書）
- (10) ラウル・ヒルバーグ著『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅 上・下巻』2012年 柏書房
- (11) 地球の歩き方編集室『とっておきのポーランド』2012年 ダイヤモンド社

#### 【参考ウェブサイト】

<http://www.manufaktura.com/>

（2014年2月10日検索）

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9D%E3%83%BC%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%89>

（2014年2月26日検索）

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A6%E3%83%80%E3%83%A4%E4%BA%BA>

（2014年2月26日検索）

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%A9%E3%82%AF%E3%83%95>

（2014年2月26日検索）

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%BB%84%E9%87%91%E3%81%AE%E8%87%AA%E7%94%B1>

（2014年2月26日検索）

[http://www2s.biglobe.ne.jp/~nippon/jogbd\\_h12/jog142.html](http://www2s.biglobe.ne.jp/~nippon/jogbd_h12/jog142.html)

（2014年2月26日検索）

<http://www.city.tsuruga.lg.jp/sypher/free/kk-museum/polish-orhpans/polish-orhpans.html>

「ポーランド孤児 人道の港 敦賀ムゼウム（敦賀市役所 国際交流貿易課）」

（2014年2月26日検索）

[http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A8%E3%83%8F%E3%83%8D%E3%83%BB%E3%83%91%E3%82%A6%E3%83%AD2%E4%B8%96\\_%28%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%9E%E6%95%99%E7%9A%87%29](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A8%E3%83%8F%E3%83%8D%E3%83%BB%E3%83%91%E3%82%A6%E3%83%AD2%E4%B8%96_%28%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%9E%E6%95%99%E7%9A%87%29)

（2014年2月27日検索）

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A6%E3%83%83%E3%83%81%E6%98%A0%E7%94%BB%E5%A4%A7%E5%AD%A6>

（2014年2月27日検索）

# ヴィエリチカ岩塩坑の視察記録

静岡文化芸術大学 文化政策学部  
文化政策学科 教授 藤田 憲一

## はじめに

静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科研究科長研究費（平成25年度）による共同研究「旧東欧地域における産業遺産の保全と利活用に関する研究」の一環として、私は共同研究者3名と共に、1913年8月23日から9月5日までの間、ポーランドとチェコの産業遺産やいわゆる「負の遺産」の視察・調査に出かけた。

その時に視察・調査した多くの施設のうち、本稿ではポーランドの世界遺産（文化遺産）であるヴィエリチカ岩塩坑Kopalnia soli Wieliczka（英語Wieliczka Salt Mine）に絞って取り上げる。訪問日は、8月28日である。後掲参考文献のうちのガイドブックを参考にしながら、Ⅰでその岩塩鉱の概要について述べ、Ⅱで彫刻物が多いことの背景を説明し、Ⅲで主要な施設を紹介し、さらに、Ⅳで掲載写真について短いコメントを付す。

## Ⅰ ヴィエリチカ岩塩坑の概要

ポーランドのヴィエリチカ岩塩坑Kopalnia soli Wieliczka（英語Wieliczka Salt Mine）は、1978年にユネスコの世界遺産（文化遺産）に登録された。1978年は世界遺産の登録が行われた最初の年であった。

ヴィエリチカは、ポーランド共和国の南央部のマウオポルスカ県にある。クラクフから南東に10kmほどのところである。

ヴィエリチカの地下から岩塩が掘り出されてきたが、その鉱山の歴史を概観しておこう。ヴィエリチカ岩塩坑は、1044に創業した。ポーランドの首都がクラクフに移ってきたのは、1038年のことであるから、その6年後ということになる。稼働している岩塩坑としては世界最古である。（廃坑を含めると、一番古いのは同じマウオポルスカ県にあるボフニャBochnia岩塩坑である。）しかし、コスト高や坑内の洪水の危険から、1996年に商業採掘は打ち切れ、現在は観光スポットとして、世界中からヴィジターを集めている。

ヴィエリチカ岩塩坑の施設の概要を述べておく。ツアーのルートは、蟻の巣のようになっており、22の部屋chamberが坑道galleryでつながっている。トータル2kmほどであり、ツアーで廻ると2時間ほどかかる。最深部は135mほどである。坑内には、採掘のためのさまざまな土木や機械の技術が分かるように展示がなされているが、その他に、歴史上または神話・宗教に関わるさまざまなモチーフが石像に彫られているのが目を引く。王やコペルニクス、妖精の像、またキリストやマリアの像、そして近時のローマ法王ヨハネパウロⅡ世の像



までである。地下の大聖堂のような場所（キングのチャペル）もあって、それを作ったエネルギーの膨大さを思うと、驚嘆させられる。

坑内には、ガイドと一緒にないと入れない。ツーリストルートと地質学ルートの2つあって、すべての人がまずツーリストルートに入り、その後余裕と興味のある人が地質学ルートをプラスするというスタイルである。前者は客の上限が35人、後者の上限は10人となっている。

坑内の温度は一定していて、ほぼ14℃である。ツアー客は坑道のルールを守らなければならない。つまり、禁煙。火を使ってはならないということである。坑道ツアーのよいところは、天候に左右されないという点である。客の少ない秋・冬がお勧めである。

地質学コースを加えると料金もプラスになる。また、写真撮影ができるタイプのチケットだと追加料金となる。払うとカメラ許可のシールをもらえる。私たちは、視察・調査が目的なので、当然ながら撮影許可の方を選んだ。

もっとも、立派なガイドブックや写真集が売店で手に入るのだから、後から振り返るためには、それらを入手しておくべきだろう。暗い坑内の撮影はむずかしく、自分が撮ってきた写真では、鉱山施設の姿を十分に伝えることはできないが、参考のために末尾に掲載しておきたい。

## Ⅱ ヴィエリチカ岩塩坑の彫刻物

ヴィエリチカ岩塩坑の際だった特徴は、その内部にスケールの大きな彫像や、チャペルなどが数多く彫られているということである。その理由をここで説明しておく。

坑夫たちは、岩塩を掘り、巻き上げ機を作り、生産した岩塩を運搬するため馬にハーネスを履かせた。大きな岩塩のブロックが内側から掘り抜かれ、それは何世紀にもわたって岩盤の圧力に耐えてきた。

鉱山に入坑するのは冒険的なことであり、そこで働くのは危険であった。多くの坑夫が亡くなり、また怪我を負った。

この危険性のゆえに、坑夫たちは他の社会的グループよりも信心深かった。坑夫の亡くなった場所に十字架を建てるという習慣が今でも残っている。

地下にチャペルが建てられ、礼拝が行われたが、1697年に火事でチャペルが焼失した。そのため、王立委員会は可燃物でのチャペルの設置を禁止した。パラドックスなのだが、この禁止によって岩塩の彫刻という伝統が生まれ、その後3世紀にわたって保たれてきた。最高傑作は、聖キングSt.Kingaチャペル（1896）である。これは101mの地下で彫られた。

伝説によると、ヴィエリチカ鉱山を発見したのは、ハンガリー王の娘であるキングであった。その物語の内容は、Ⅲの1)で改めて紹介する。

### Ⅲ 主要な部屋または廊下の説明

ヴィエリチカ岩塩鉱山のツアーに参加して、さまざまな展示を見て回ったが、この論稿では、特に印象に残ったもの6カ所に絞って記述する。

#### 1) ヤノヴィッチ部屋 The Janowice Chamber

この部屋は、ルートの開始から0.395kmのところ、第1フロアにあり、深度63.8mである。

この部屋は、17世紀中葉に、岩塩のブロックの中に掘り出されたものである。1967年にここに人間と等身サイズの像が6体、ここに設置された。彫った人は、Mieczystaw Kluzekである。

これらの像は、ヴィエリチカの伝説のうちで、最も魅力的なものを表している。この伝説とは、ポーランドの岩塩の発見を物語るものである。岩塩は13世紀にこのエリアで発見された。クラクフCrakowとサンドミエシュSandomierzの公爵であるボレスワスBoleslaus the Chasteとその妻キングKingaによってである。伝説によると、ハンガリーの王ベラ四世の娘のキングは、マルマロシュMarmarosの岩塩坑の1つを持参金としてもらった。彼女は婚約指輪を坑道に投入した。すると、彼女の指輪は不思議なことに、岩塩鉱床とともにヴィエリチカに移動していった。ポーランドに着くと、キングはある場所を指さして、掘るように命じた。彼女の命令に従って坑夫たちが掘ってみたところ、岩塩に行き当たりその最初の塊の中に彼女の指輪が見つかったというのである。そのとき以来、ポーランドには岩塩が豊富に存在している。キングは坑夫の守り神であり、1999年に、ヨハネパウロⅡ世によって列聖された。

この室を訪れたビジターは、コンピュータを使った音や光のミニ・ショーによって、ヴィエリチカ鉱山の創世の伝説の時代へと誘われることになるのである。

#### 2) 焼けた部屋 The Burnt Out (SPAONE) Chamber

この部屋は、ルートの開始から0.440kmのところ、第1フロアにあり、深度64.3mである。

この部屋の名称は、この場所で起こった木製の保護構造物の火災に由来している。この部屋は、17-18世紀に掘り出されたものである。ここを見ると、鉱山の地下で起こりうる坑道の危険性がよく分かる。

ひとつは、坑夫によって掘られた空洞に岩の質量が常時圧力を加えている、ということである。それは、坑道の木製の支柱がマッチ棒のようにひしゃげているのを見ると分かる。

もうひとつ別の危険は、メタンガスによって引き起こされるものである。これは、1972年に掘られた、専門技術者（Penitentsと呼ばれる）の像によって示されている。メタンは、空気より重量が軽い。これが作業をしている坑道の天井に溜まっていく。メタンは、塩の採掘の場所で、岩の塊から放出されている。メタンは空気と混じって、ある割合になると爆発性の混合物となり、火と接すると爆発する。メタンは、古い時代にはとりわけ危険なものだった。鉱山の換気の十分な方法がなかったし、むき出しの炎を使うオイルランプが灯りのために使われていたからある。



この危険な気体は、それを燃やすということで、取り除かれていた。それは経験豊かな坑夫Penitentsによって行われた。彼らは、濡れた衣服を着て、長い竿の先にたいまつを付けて持ち、作業場の床を這って歩いた。

1999年から、この部屋を訪れる人々は、音声と照明を使ったミニ・ショーに参加することができるようになった。それは、ヴィエリチカの坑夫が何世紀にもわたって立ち向わなければならなかった、恐ろしい危険を体感させるものである。

### 3) シエレク部屋 Sielec Chamber

この部屋は、ルートの開始から0.570kmのところ、第1フロアにあり、深度64.5mである。

この室は、17世紀中葉に、赤ブロンズ色の塩の細長い層が採掘された跡である。18世紀には、その下層部分が水であふれてしまった。そして19世紀になってやっと安全が確保され、当時のままの形でツーリストのルートに加えられた。かつて坑夫たちは、入り口の右側に、勝利の聖母像Our Lady the Victoriousを掲げていた。

コレクションのうち、とても興味深いのは、地下の通路で塩の搬送のために使われた本物の道具である。ひとつは、木製のカート（ハンガリアン・ドッグと呼ばれる）とそりである。

数世紀の間、坑夫たちは掘った鉱物を人力で運んでいた。そして次には、馬が輸送目的で使われた。16世紀から、馬は垂直、水平の両方向の輸送のために働いてきた。最後の馬が2002年に、炭坑を去った。

純度の高い塩が樽に詰められ、次にそりの上に載せられる。1780年代からは、箱やカートが木製のレールの（平行に置かれた厚板）の上を押して運ばれた。大きなかたまりの塩が樽の形に切り出されると、稼働中の踏み車（treadmill）のところまで木製の竿で押して行く。この方法によって、搬送するのが容易になった。

1861年に、水平輸送はレールウェイのカートによることとなった。最初は馬がカートを曳いていたが、1920年代からはバッテリーと動輪を利用したものとなった。

### 4) クネグンダ廊下 The Kunegunda Gallery

この部屋は、ルートの開始から0.690mのところ、第1フロアにあり、深度64.5mである。

ここに、新石器時代の村の模型が考古学の知見を踏まえて作成され、展示されている。この時代のヴィエリチカ村では、塩が蒸発乾燥evaporationの方法で製造されていた。塩水を土器に入れ、煮詰めて塩の固体を得るというものである。塩水を汲み上げるため、井戸を掘る必要があった。

この方法は、後期前史時代や中世初期にも行われた。12世紀からは、塩水の蒸溜は金属の鍋で行われるようになった。

岩塩の発見（13世紀半ば）以降も、蒸溜乾燥方式は続けられていた。それが廃止されたのは、1724年のことである。

そして第一次大戦の少し前に、比較的現代的な製塩所で短期間だけ再開された。塩水は、

岩塩を水で濾過することで得ていた。

2003年には、地下水を用いる新たな現代的な製塩所が開設された。それは約100年前の古い製塩所の機能を引き継いだものである。

#### 5) 聖キングのチャペル St.Kinga's Chapel

このチャペル部は、ルートの開始から0.915mのところ、第2フロア（天井は上部第2フロア、ボトムは下部第2フロア）にあり、深度は天井が91.6m、ボトムが101.4mである。

聖キングのチャペルは、きわめて強い印象を与える、豪華な地下寺院である。それは1896年に設計された。その場所は、巨大な緑色塩を採掘した後にできたスペースを用いたものである。

サイズは、長さが54m、幅が15mから18m、高さは12mもある。

そこには1963年までの約70年間、鉱山彫刻家たち（無名ではない）の作品が彫られていった。作品は、伝説、宗教、歴史などの分野に素材を取っている。

このチャペルに吊られているシャンデリアも岩塩で彫られたという。

1963年に、チャペル内の彫刻作成を終了するという計画であったが、現世代の彫刻者が掘り続けているようである。1999年には、ポーランド出身のローマ法王ヨハネパウロⅡ世がキング妃を聖別したのに感謝して、同法王の像が彫られた。

#### 6) ウィトルド・ブドリク部屋 The Witold Budoryk Chamber

ウィトルド・バドリク部屋は、ルートの開始から1.800mのところであり、深度123.1mである。

ツーリスト・ルートを2kmほど歩いた後、ビジターはこの部屋の中で休息し、軽い食事を取ることができる。この部屋は、赤いブロンズ色の塩の鉱床を採掘した結果としてできたものである。その名前は、クラクフの鉱山冶金大学の教授（1891-1958）の名前にちなんで付けられた。彼は鉱山の排気の専門家だった。

ここで休息を取った後、追加ツアーの地質学ツアーに出かけることになる。このツアーもガイド付きで、上限10人と比較的少人数で行われる。そこでは、一般のツーリストルートとは違った専門的な展示に接することができる。内容は、鉱石の展示、土木や冶金、輸送の技術、などである。ツアーを終えると、入鉱したシャフトとは別のシャフトに出る。Regis Shaftという名である。3～4時間という長い時間の地下ツアーから地上に戻ると、解放された気持になる。

## IV 写真

ヴィエリチカ岩塩鉱山を訪問した時に撮影した写真をまとめて掲載して、本文記述の理解の助けとしたい。短い説明・コメントを付しておく。



- 写真1 ヴィエリチカ岩塩鉱山の入り口の建物 シャフトが見える。
- 写真2 シャフトの入り口 ここからどんどん降りる。
- 写真3 人力の綱巻機
- 写真4 麴のように吹き出した塩
- 写真5 Janowice Chamberの「偉大な伝説The Great Legend」
- 写真6 表面に浮かんだ塩の結晶
- 写真7 penitentの像 メタンを燃やして爆発を防ぐ。
- 写真8 坑道内の運搬車
- 写真9 坑道内の馬
- 写真10 The Casimir the Great Chamber にある王の胸像
- 写真11 馬による綱巻機
- 写真12 坑内ツアーの様子
- 写真13 人力による綱巻機
- 写真14 勝利の聖母像
- 写真15 十字架にかかったキリスト像
- 写真16 キングのチャペル 地下101m. 1896年から彫られている。
- 写真17 巨大な丸太の構造物とシャンデリア
- 写真18 坑内の労働者像
- 写真19 休憩所 軽い食事ができる。
- 写真20 ヴィエリチカのブランドのビール
- 写真21 坑内馬の写真パネル
- 写真22 地質学geologyのコーナー看板
- 写真23 樽型に切り出した岩塩
- 写真24 岩塩とそり
- 写真25 岩塩を運ぶ様子の絵
- 写真26 馬が樽をレールで運ぶ様の絵とレール
- 写真27 掘削の先端（切羽）
- 写真28 鉱山馬のパネル
- 写真29 樽の巻き上げ機
- 写真30 歯車を使って回転方向を変える装置
- 写真31 綱を使って入坑する様の模型
- 写真32 ツアーを終えると、このシャフトの出口に至る。入坑シャフトとは別のもの。

<参考文献>

WIELICZKA HITORIC SALT MINE Tourist Guide (English version), 2012  
Janusz Podlecki, WIELICZKA HITORIC SALT MINE (English version), 2012

# ポーランド・チェコの技術遺産・産業遺産からみた自国史像

静岡文化芸術大学 文化政策学部  
文化政策学科 准教授 四方田雅史

## はじめに

文化財・遺産 (heritage) はもともと当然保全すべきものとして存在するわけではなく、ある歴史観に立脚して保全され、それに価値を見出すことによってその歴史観も補強されるという相互関係にある。ここで問題となる「過去」、「歴史」、「遺産」はそれぞれ異なっている。「歴史」はありのままの「過去」から取捨選択したものであり、「遺産」は現在の我々がその「歴史」から形作ってきたものである。すなわち、遺産を選択し保全する際には、現代社会が歴史の中から何を継承すべきかを選んでいるわけである<sup>1</sup>。「過去」・「歴史」と「遺産」を支える歴史観との間にはズレがあることも多い。この文化財を保存すべきという歴史観自体、時代ごと、地域ごとのアイデンティティや価値観から派生してくるものであり、決して普遍的な論理から自明のこととして導かれるものではない。そのように考えると、文化財・遺産の保存は、その国で支配的な歴史観、自国に対する見方が反映されているとも言ってよい<sup>2</sup>。逆に文化財に関する言説から、その地域で支配的な暗黙の歴史観や価値観を導くことも可能であろう。

産業遺産としてその例外ではない。産業遺産には、マス・ツーリズムの変容といった社会的背景や、産業革命・工業化に誇りやノスタルジーを抱くまなざしが影響していると、社会学者アーリは述べている<sup>3</sup>。特に産業遺産を歴史の中で重視してきたイギリスやドイツで特にそのような意識・感情が根強かったことは、至極、当然なことであった。その理由は、両国にとって産業革命や近代化は自らの国民国家体制を生みだした条件であり、それがその国の誇りにもなっていたからである。

産業遺産が世界規模で重視されるようになった契機として、「世界遺産一覧表における不均衡の是正及び代表性・信頼性の確保のためのグローバル・ストラテジー」が挙げられる。それは、世界遺産の分布が西欧に偏重している傾向を是正するため、登録の際新たに3つのカテゴリーを重視していく姿勢を示し、その一つとして「産業遺産」を挙げている。その動きは、1990年代後半以降、多くの産業遺産が世界文化遺産に登録される結果になり、世界規模で産業遺産の重要性が認識されることにもなった。しかし、国民国家の文化財政策を相対化することを企図した世界遺産の枠組みにおいても、世界共通という衣装をまとってはいるものの、やはり西欧における文化財意識が影響を及ぼしており、西欧・先進国を超えて普遍的になったとは言いがたい面もある。

本稿で取り上げる「産業遺産」に関しては、すべての国において近代化・工業化を国民国家の誇りと考えるような前提が成り立つわけではない。むしろ、そのように単純にみなしう



る国は、日本をはじめとした先進国に限られる。逆にアジアや中東欧では、工業化や産業革命は帝国主義国家の所産であることが多く、一概に誇りやノスタルジーを感じられるものではない<sup>4</sup>。そのため、世界遺産の動きにも触発されつつ産業遺産への関心が世界大に拡大するにつれ、その条件を満たさない地域へと拡大していった。そうすると、当該国において、産業遺産が「負の遺産」とまで言えなくとも、「不快な遺産 (unpleasant heritages)」、もしくは複数の歴史観の間で不協和音を引き起こす遺産 (dissonant heritages) と位置づけることができる<sup>5</sup>。少なくともそれらが両義的な (ambivalent) 遺産である以上、産業遺産へのまなざしはより多元的で、複雑な様相を見せていよう<sup>6</sup>。

その意味で、国際産業遺産保存委員会 (TICCIH) による「アジアの産業遺産に関する台北宣言」は画期的なものであった。まずTICCIH自体がアジアで初めて開催された意義にぐわえ、宗主国日本、そして国民党による近代化という複雑な近代史を経験した台湾で開催されたという意義を持っている。その宣言の中で、特に第3条は「アジアの工業発展が、西洋のそれとは異なることを認める」と宣言し、次いで第6条では「アジアにおける産業遺産の主要な要素の多くは、西洋世界の植民者や国家によって輸入され、その工場や施設が先駆的で前衛的であることを認める。それらは、その完全性を反映した方法で保存されるべき建築、建築技術、および設備の歴史を反映する美的、および科学的方法を考慮しつつ (incorporating)」保存されるべきであることを述べている<sup>7</sup>。台湾は、日本による植民地支配と自らのアイデンティティとを対立のみからではとらえきれないことから、アジアで産業遺産の保存・利活用にきわめて積極的な興味深い地域になっている。

こうした現状を背景に、台湾と同様、大国に挟まれ翻弄されてきた「小国」であるポーランド・チェコ国民は、自らの経済史をどのように見つめ、その中に産業遺産をどう位置づけようとしているのであろうか。近代史において、周知の通り、ポーランドもチェコも複雑な歴史をたどっている。ポーランドは、18世紀末の分割によって世界地図から消滅し、チェコはオーストリア＝ハンガリー帝国の一部にすぎない。ともに独立したのは第一次世界大戦の結果であり、チェコはまだチェコスロバキアの一部であった。しかし、その後も順風満帆であるとは言えず、1930年代末からナチス・ドイツの（ポーランドの場合はソ連からも）侵略を受け、1940年代後半以降はソ連を中心とする社会主義ブロックへの編入を余儀なくされた。さらに、たとえばシレジアの一部は戦間期にドイツ領であったことなど、複雑な国境線の変遷も経験している。こうした時代背景が現在の「産業遺産」を生みだした時期にあたっているが、ポーランド・チェコともに民族資本による工業化を果たした時期はほとんどない。そこでは、その国民の間で、近代化・経済成長・独立がもたらす側面と、大国による併合・侵略、外国資本主導の成長、社会主義化といった側面とが不協和音をもたらすことになるであろう。このようにポーランドやチェコにとって、産業遺産の保存・展示・利活用を正当化する論理も、西欧・日本とは異なってくる。その意味で、保存・利活用される産業遺産の選択から、彼らはどのような歴史物語 (hi-story) を語っているのであろうか。本稿の課題は、イギリスやドイツ・日本のように素朴で単純な形で近代史を紡ぐことが困難な小国における



写真1 技術博物館が入っている文化科学宮殿 筆者撮影

産業遺産に着目し、それが紡ぎ出している歴史観に焦点を当てる。それを通じて、産業遺産保存・展示・利活用の背後にある論理が、西欧や日本とは異なる諸相を浮かび上がらせると考えられるからである。

## 1. ワルシャワとプラハの技術博物館をめぐって

上記の課題に答えるため、本節では技術博物館の展示に着目する。これらにはポーランドとチェコが自らの技術史をどう見ているかが反映されているからである。

まず、ワルシャワの技術博物館 (Muzeum Techniki) の展示を見てみよう。それはワルシャワの象徴とも言えるスターリン様式<sup>8</sup>の文化科学宮殿(写真1)の中にある。文化科学宮殿は「ソ連からの友情の贈り物」

とも呼ばれるが、他方でポーランド国民にとってスターリン支配の象徴として不快な面もある。現に「これがその町のもっともすばらしい景色だよ。なぜなら、その「宮殿」自体が見えない唯一の景色だからだよ」というアネクドットが流布していることから窺える<sup>9</sup>。このように両義性のある文化財ではあるが、ワルシャワでは重要な観光スポットになっている。現に観光案内所も併設され、ワルシャワ観光において立ち寄るべきスポットになっているのは否定できない。

博物館の展示はどうなっているのだろうか。2013年8月にそこを訪れたが、その頃の展示内容は、ラジオやバイク・自動車から宇宙産業までポーランドや世界の科学技術の発展を追っていた。独立当時のポーランドは農業国であり、工業が主たる産業にはなっていなかったため、後述するチェコとは違い、独立当時(1918年)に関する技術の展示が薄い。チェコでは、自動車や自動二輪車、航空機などの展示が充実していたが、ポーランドではラジオ程度であり、先述した産業の展示は海外のものが中心であった。その中で特に展示品が多いラジオを例に、ポーランドの科学技術史の扱われ方を見てみよう。

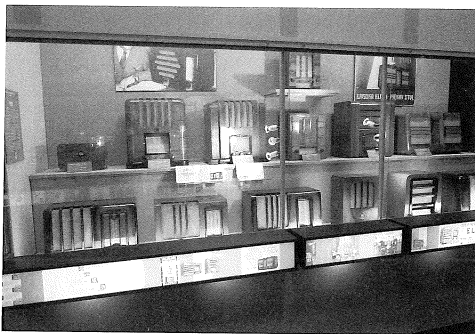


写真2 ポーランド技術博物館におけるラジオ展示 筆者撮影

ラジオの展示は戦間期の技術に焦点が当てられ、それを製造した各企業を単位として紹介されていた(写真2)。そのうち、有力なポーランド企業であったTowarzystwo Radiotechniczne Elektritの展示を取り上げよう。そこでは、企業の発展が紹介されるとともに、「1937年までにElektritの製品は、英領インド、ブラジル、ラトビア、ソ連、トルコ、南西アフリカ、ギリシアまで輸出された」と海外市場を開拓したことを誇っており、次いで



「1939年まで多くの国際的な展示会に参加し、最高の賞を獲得した。戦前のポーランド製ラジオ部品の唯一の輸出企業となった」と説明している。輸出市場の広さ、世界的な賞の獲得などが示すように、同企業が世界的な企業になったことを誇っている。対して、戦中・戦後の状況についてはまったく述べられていないが、おそらくそこに潜む含意として、第二次大戦、および社会主義陣営への編入がなければ、海外にも販路を拡大しうる技術を持っていたことを示唆しているのではないか。



写真3 ポーランド技術博物館における宇宙開発展示室 筆者撮影

もう一つ代表的な企業を取り上げよう。それはフィリップスのポーランド工場（Polskie Zakłady Philips）である。もともとは1922年に設立された電気ランプのポーランド＝オランダ合弁会社であったが、1928年にラジオ管の生産が開始され、同年にフィリップスのポーランド工場に転換されたという。ポーランドはラジオを自前の技術として開発したわけではないので、外資の助けも借りつつ、ラジオ技術を磨いてきたことが説明されている。西欧の技術について批判的な内容は見られず、むしろポーランドにおけるラジオ技術の源流として位置づけられている。西欧出自の技術も立派なポーランド科学技術史の一コマとして位置づけられている点は興味深い。

もちろん、必ずしも独立期のみを重視しているわけではない。たとえばオートバイや自動車の展示では、主に1950年代以降のポーランド製品が展示されている。1920年代の製品も1つ展示されており、ポーランドにおけるオートバイ産業の源流と強調されているが、全体としては社会主義時代の展示に偏っている。ポーランドでは、オートバイをはじめとした重工業は社会主義時代に本格的に開始されたためであろう。

宇宙開発の展示では、ポーランドの誇りとも言えるコペルニクスから始まっている（写真3）。しかし、ソ連のスプートニクよりもアメリカのアポロのほうが、展示スペースが大きかったのは印象的である。そこにも、やはり社会主義時代に対するアンビバレントなまなざしが読みとれる。同時代の技術移転は、もともと農業国であったポーランドの経済史にとって省くことはできないものの、積極的に評価しにくいことが見てとれよう。

このように見ていくと、戦間期は肯定的に評価されており、同時期がポーランドにとって誇りになっていたことが窺える。ソ連からの技術導入に比べ、戦間期以前に行われた技術開発や技術移転は高く評価されている。ヨーロッパ連合（EU）に参加して、西欧から技術を積極的に移転している現状の源流として、1920～30年代の経済史が想起されていると見ることできる。特に社会主義時代の“半”独立国としての状況より、むしろポーランド分割期のドイツやオーストリアに支配されていた時代の方を、少なくとも技術史や産業史の面では、肯定的に評価するという一種の逆転現象が起きているのである。それは、EU加盟を契機に、西欧の一員としての歴史が強調されるようになり、その先駆が実はドイツ、オーストリアに



写真4 チェコの国立技術博物館 筆者撮影



写真5 チェコの国立技術博物館における自動車等の展示 筆者撮影

支配されていたポーランドであるという位置づけがなされていると言えなくもない。もちろん、そこには一筋縄にはいかず、不協和音をもたらしうる歴史観が見え隠れしている点も指摘しておくべきであろう。

次に、プラハにある国立技術博物館の展示を見よう（写真4）。そこでは、社会主義時代の軽視がポーランドよりさらに顕著である。特に自動車の展示からそのことを明らかにしよう（写真5）。自動車産業は、日本・ドイツなどと同様、チェコ人にとって誇りであった。展示の説明文によれば、チェコは1890年代から自動車産業発祥の10ヶ国の1つと位置づけている。後にTatraの前身となるNesselsdorfer Wagenbau-Fabrik Gesellschaft A.G.から展示が始まり、続けて1900年代のVeroxが展示され、特に戦間期のチェコスロバキア独立期の展示が厚い。そこでは、当時のチェコ8大自動車メーカー（NW-Tatra, Laurin&Klement-Skoda, Praga, Aero, Jawa, Walter, Wilcov, Z. Cars）が挙げられ、それらの工場で製造された車が数多く展示されている。対して社会主義時代（1948～89年）の展示は少ない一方、社会主義崩壊後の車がまた展示されている。社会主義時代については、展示されているMercedes-Benz 770（写真6）の説明が興味深い。以下にそれを引用しよう。



写真6 Mercedes-Benz 770 筆者撮影

「その転換が我が国の運命を象徴している国立技術博物館の展示がある。…（中略）…1948年に共産党がこの国の全権力を掌握し、数年後、自動車でもイデオロギー的態度を採りはじめた。このため、1952年にその国のカブリオレ自動車は新たなボディに替えられた。外側には帝国主義的起源を思い出させるものはまったくなく、その車は一新されており、その点で独裁政治も同様であった。」

これはまさにシニカルな物言いである。この車は独立期、ナチ期、社会主義期、現代と生き延びてきたが、ナチも社会主義も形は異なるものの、独裁政治である点で共通していたことを暗示している。また、自動車より社会主義時代の展示が多いオートバイでも、「いかに



時代遅れであったか、考慮されなかった」といった皮肉めいた説明がある。

家電の扱われ方も興味深い。社会主義時代には質の悪い家電が多く、チェコでは、懐かしさもありながらも「恥部」として位置づけられている。このように、社会主義時代の技術や製品に対して特にシニカルであり、チェコにとって社会主義時代が肯定的に評価しえない現状を反映していよう。そして、自動車産業の源流がオーストリア＝ハンガリー帝国時代にあることから、ソ連に比べると、オーストリア帝国時代に対する評価のほうがまだ肯定的である。このような見方は、1990年代以降のチェコがEUの一員としてのアイデンティティを強調する中で、西欧からの技術移転を受け入れている現状と矛盾なく受容しうる歴史観なのであろう。

展示内容の分析からポーランドとチェコの異同を分析しよう。

第一に気づかされるのは、両大戦間期の製品や技術の展示スペースが多く確保されていることである。同時期はポーランドとチェコスロバキアがともに独立していた時期に当たり、同時期の工業化の歴史がその国が誇るべき誇りであったことが読み取れる。第二に、その源流として、ドイツ・オーストリアなどからの技術導入が評価されていることである。すなわち、外国からの技術移転や外資による経済発展を正当化しているとも言える。第三に、逆に社会主義時代の技術は軽視されるか、皮肉まじりで紹介されている。特にチェコでそれは揶揄の対象となっていた。戦間期のチェコは既に工業化を遂げており、社会主義下の工業化は現状の源流とみなされていないことが一因に挙げられよう。ポーランドのほうが自動車やバイクの展示において社会主義時代が強調されるのは、ウッジをはじめとした繊維産業などの蓄積はあったものの、自動車産業などの重工業化は社会主義時代の計画経済による部分が大きかったからであろうか。逆にラジオ製造業など共和国時代から台頭していた産業では、その技術が重視されていた。いずれも力点が異なるものの、ソ連や社会主義に対するアンビバレントな感情が読み取れよう。

この状況は当該国の現状も色濃く反映している。1989年の社会主義圏崩壊により、ポーランドもチェコも社会主義国、東側陣営の一員から、資本主義国、そしてのちにEUの一員として再スタートを切った。しかも、ドイツなどの外国資本を誘致し、またEUから補助金も受け、それらが経済成長に寄与している。もちろん、ポーランドやチェコは独立国であるものの、両国が国際社会で置かれている状況は19世紀後半から20世紀前半までの状況に似通っている。すなわち、両国とも、民間企業が主導する市場経済であり、西欧の外資に依存していたことは共通している。1990年代以降強調される「中欧（ドイツ語ではMitteleuropa）」という地域概念のほうが、両国ともにしっくり来るようになった現実が反映されているのではないか。この概念がかつて強調されたのは、そこに独立新国家が多数成立した1920年代のことであった点とも符合している。

1950年代から80年代までの社会主義経済との連続性は、歴史的に近いにもかかわらず、見出しにくい。結局、技術史の面では西側の資本や技術に圧倒されて、断絶のほうが大きく、社会主義時代は「隠されなければならない」存在であったとも言える。おそらく、第一次大

戦までの大国支配は、ナチやソ連の支配に比べれば記憶が遠いものであり、むしろ現代との連続性という正の側面が強調されやすいのかもしれない。

## 2. オストラヴァにおける産業遺産一脱社会主義とヘリテージ化

本節では、チェコ共和国のオストラヴァを事例に、前節で明らかにした点をさらに検証しよう<sup>10</sup>。オストラヴァはチェコ東部の工業都市であり、社会主義時代には「共和国の鉄の心臓」、「社会主義の製鉄所」と呼ばれるなど、重工業化の中心であった。しかし、ヨーロッパの重厚長大産業の低迷と軌を一にして、オストラヴァの製造業も衰退していく運命をたどった。そこでその衰退を穴埋めするように、そこにある炭鉱や製鉄所を国連教育科学文化機関（UNESCO）の世界文化遺産に登録しようとしており、2014年2月現在、その暫定リストに載せられている。その構成資産は、ヴィトコヴィツェ製鉄所、フルビナ炭鉱、ミハウ炭鉱、アンセルム炭鉱（ランデク・パーク）などであり、それぞれ19世紀以降、石炭・鉄鋼の生産によって地域経済、その後のチェコ経済を支えてきた産業遺産群であった。



写真7 ミハウ炭鉱の保存 筆者撮影



写真8 ミハウ炭鉱の保存 筆者撮影

こうした産業遺産に関する言説を事例に、それらがチェコの産業史をどう把握し位置付けてきたのか、検討したい。

ミハウ炭鉱は1995年に閉山を余儀なくされるが、その過程で1960年代から研究者によって遺産としての価値が評価されるようになり、閉山後も「操業最後の日（the last workday）」の状況をそのまま保存することになった（写真7・8）<sup>11</sup>。その根拠として19

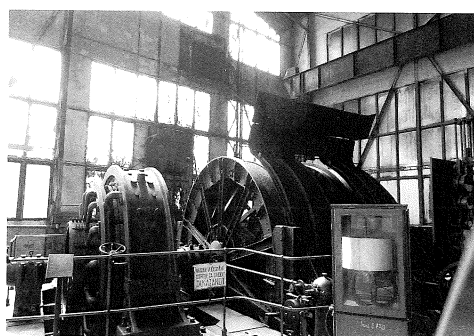


写真9 ミハウ炭鉱に保存されているジーメンス製巻上機 筆者撮影

世紀からの歴史の重要性が強調されている。この炭鉱は、当初はオーストリア帝国の、1856年以降は北フェルディナンド鉄道（Northern Ferdinand Railway）の貢献が大きかったという<sup>12</sup>。特に電化を開始する1910年代には、AEG、ジーメンスなどのドイツ製・オーストリア製・チェコ製の機械が備え付けられたことなどは、産業化や電化がオーストリアやドイツ



の影響下で進んだことを物語っている<sup>13</sup>。現在でも、ドイツ製の機械が現場に展示されるなど、西欧からの技術移転・資本移転が重視されている（写真9）。対してチェコの独立、社会主義化については、淡泊な記述に終始している。同時期には、集中管理や国有化などの組織変革、および建物の増設や採掘場所の延伸などが強調されているにすぎず、そこで進んだ新技術としては、排気のためのカペル扇風機（Capell system ventilators）導入以外、説明されていない<sup>14</sup>。そこからは、特に1910年代の技術革新が重視され、この炭鉱の歴史的意義は、独立国ではなかったが、チェコが西欧の一部に位置づけられていた時代の産業遺産ゆえであることが強調されているかもしれない。



写真 10 ヴィトコヴィツェ製鉄所の高炉  
筆者撮影



写真 11 ヴィトコヴィツェ製鉄所で消されたキリル文字 筆者撮影

この点は、管見の限り、他の構成資産候補を説明したリーフレットでも同様である。それらはともに19世紀後半から20世紀前半にかけて最盛期を迎え、ベルギー、アメリカ、スコットランドなどから最先端の技術が導入されてきた点が強調されている<sup>15</sup>。そのため、当時の技術や機械は保全され、展示されている。対して、社会主義時代に関する記述は、やはり淡泊である。ヴィトコヴィツェ製鉄所では、たとえば高炉No. 6がソビエト標準のデザインで1960年代に建設され、1985年に近代化された。同様に高炉No. 4や、現在見学可能なNo. 1も社会主義時代に改修され、現在に至っている（写真10）<sup>16</sup>。しかし、技術革新に関する記述はない。社会主義政権が新規投資を軽視したために技術を停滞させたと言われており、そのような側面も確かにあったのであろう。そうした中で、ヴィトコヴィツェ製鉄所の高炉に残されていたキリル文字が薄くなっていたのは象徴的であった（写真11参照）。これが意図的かどうかは判断しかねるが、残っていたキリル文字を朽ちるに任せる姿勢は、現時点では社会主義時代の遺構をできるだけ抹殺しようとする姿勢を読み取るのは、読み込みすぎであろうか。いずれにせよ、オストラヴァを世界文化遺産に登録しようとする論理の中で、社会主義時代の歴史は積極的なアピール・ポイントになっていない。要するに、オストラヴァ市やチェコにとって、社会主義時代の沿革は産業遺産化・世界遺産化を進める上で影響を及ぼ

さないと考えているのであろうか。

隣接するヴィトコヴィツェ製鉄所に石炭を供給していたフルビナ炭鉱については、次のような社会主義時代の記述がみられる。その箇所を引用しよう。

「1950年代末から1960年代初頭のその炭鉱の表面部の構造発展の最終段階は、…（中略）…当時流行した「ブリュッセル・スタイル」で建設された半楕円形の入り口ロビーを持ったいわゆる「新浴場」…（中略）…に現われている<sup>17)</sup>

くわえてその浴場の復元図も掲載されている。これらは、社会主義時代に関する説明の中では紙幅を割いているほうである。ここで、チェコにとってブリュッセル・スタイルが重要であると考えられる。このスタイルは、1958年のベルギー万国博覧会で高く評価された建築スタイルであり、建築面では合成繊維などの新素材を用いた前衛的なモダニズム建築に近い<sup>18)</sup>。現にチェコスロバキア館は、その栄誉から、万博閉会後にプラハの公園に移築され、EXPO58として保存されるほどであった<sup>19)</sup>。建設当時はスターリン批判のただ中であって、ソ連の指導下で展開されたスターリン様式、社会主義リアリズムが修正された時期である<sup>20)</sup>。そして、現在、1968年の「プラハの春」に直結していくチェコ独自の動きとしても高く評価されているようである。前者については社会主義時代のチェコが、一時的ではあれ、西欧から高く評価され、「プラハの春」はソ連のくびきから解放されかけた時期の象徴である。不完全であり最終的に失敗に終わったものの、チェコの地位が東欧から中欧・西欧へとシフトしていく現状の萌芽がみられたとも言える。

しかしながら、チェコスロバキアが反動期に入った70年代以降、EXPO58は老朽化に任せるようになり<sup>21)</sup>、改修が進められたのは21世紀に入ってからであったという。近年、「ブリュッセル・スタイル」が再評価される動きがあるように<sup>22)</sup>、それに対する毀誉褒貶が政治体制の変遷と軌を一にしていたことは興味深い。より具体的に言えば、ロシア（ソ連）から自立し西欧へと接近していく現状の変化と符合していよう。少なくともチェコを中欧・西欧の一員としてアイデンティファイする現在の動きと通底しており、社会主義を軽視する時代的流れの中でそれが評価されることは自然なことでもあったと考えられる。

これらの産業遺産群をUNESCOの世界文化遺産に登録しようとする根拠には、同じく世界文化遺産であるドイツのフェルクリンゲン製鉄所やランメルスベルク鉱山が挙げられている<sup>23)</sup>。西欧の産業遺産を援用しつつ、自国における産業遺産保存の必要性を訴える構図になっている。産業遺産自体が、イギリスやドイツのような先進国が、かつての産業革命・工業化を誇りと捉えなおし、産業遺産として保存する動きと連動している。先述の通り、産業遺産を重視する動きは中東欧や非西洋にまで波及したが、チェコの場合、このような産業遺産の保存やUNESCOによるその公認化は、西欧の仲間入りをする、少なくとも西欧に近い「中欧」概念を再構築するという動機に支えられているのではないか。

その点は、チェコにおける産業遺産全体についてもあてはまる。チェコで産業遺産や近代



写真 12 ミハウ炭鉱に残されていた戦時迷彩  
筆者撮影

化遺産が文化財として評価され、それらに関する研究が進んだのは1980年代後半以降のことである。研究拠点の一つがこのオストラヴァ市であった。社会主義下では、産業遺産は「資本主義的搾取」の遺物とみなされ、「すべてを新しく作り変え改善しよう」との考えに従って産業遺産への偏見は強化されたという<sup>24</sup>。その状況に変化がもたらされた1989年以降、産業遺産に対する評価が高まり、「欧州産業遺産の道 (European Route of Industrial Heritage)」への参入も目指すようになった<sup>25</sup>。このように、産業遺産重視の姿勢は西欧への編入、市場経済化と軌を一にしており、西欧で評価されていた産業遺産をチェコでも評価し保全することで、自らを西欧と同一視しようとする傾向も読み取れるのである。

ヴィトコヴィツェ製鉄所は、コンバージョン（転用）・利活用の事例としても重要である。保存と利活用は文化財において古くて新しい問題である。保存は過去をできるだけそのまま保存しようとするのに対し、利活用は過去を援用しつつ現在、そして未来を創造していくプロセスでもある。この2つは両立させていくことが望ましいものの、その力点の置き方によっては対立する概念であることも否めない。現に、オストラヴァの産業遺産群内でも力点の置かれ方が違う。先述したミハウ炭鉱がそのまま「保存」することが重視されているのに対し、ヴィトコヴィツェ製鉄所はむしろ転用・利活用に重点が置かれ、文化財保存を重視する人々からは「商業主義」であると非難されることにもなっている。たとえば前者では戦時中の防空迷彩までそのまま保存され苦難の歴史をもさらしている一方（写真12）、後者ではこのような負の側面はきれいに消されていくことは不可避であろう。

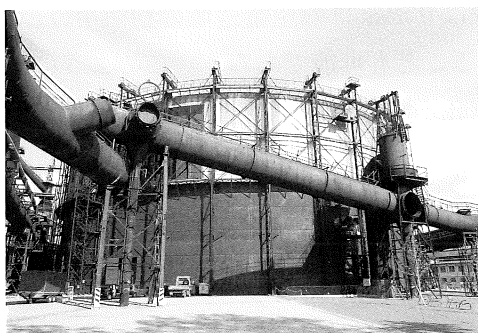


写真 13 ヴィトコヴィツェ製鉄所内で活用された Gong 筆者撮影



写真 14 ヴィトコヴィツェ製鉄所内で活用された U6 筆者撮影

ヴィトコヴィツェ製鉄所では、ガス・タンクをゴング（Gong）として観光センターなどの多目的ホールに改修し、利活用している（写真13）。また、発電ホールはU6という博物館に衣替えしている（写真14）。くわえてカロリーナは発電所跡を一部利活用したショッピングセンターに生まれ変わっている。このコンバージョンでは、「オストラヴァのDNAに埋め込まれている」鉄と石炭を尊重しつつ、“Building an Identity”（アイデンティティの構築）



を標榜している<sup>26</sup>。ここでDNAを引き合いに出すことにより、歴史の連続性を強調するとともに、利活用の方向性は現在、および将来にも開かれていると主張する。つまり、歴史的連続性とそれを踏まえたうえで将来へ開いていくことが利活用のモチーフになっている。そこでは、過去の環境破壊など負の歴史には目をつぶり、誇るべき過去はDNAにのみ還元することによって、転用・利活用が過去を浄化する役割を担っているとも言える。



写真 15 ヴィトコヴィツェ製鉄所の利活用でモデルとされた Tate Modern 筆者撮影

この利活用に関しても、オストラヴァ市が参照した先例としてイギリスやドイツの産業遺産が取り上げられていることは上記の含意を補強している。ヴィトコヴィツェ製鉄所のリノベーションに近い事例として、ドイツのツォルフェライン炭鉱とイギリスのバンクサイド発電所が取り上げられている<sup>27</sup>。前者はノーマン・フォスターがボイラー・ルームをデザイン・センターに、後者は発電所をテート・モダン美術館に転用した世界的に有名な例である（写

真15）。いずれもオストラヴァにとって模範になるものであり、そこには脱工業化を遂げた西欧の優れた先行事例の模倣が企図されている。西欧の都市計画の歴史を繙いても、西欧にモダニズムの隆盛とそれへの対抗としての歴史的建造物の再評価という流れをたどっている<sup>28</sup>。それをなぞるように、社会主義の非歴史的都市計画を経た後、西欧同様の流れの中で、産業遺産をはじめとする歴史的建造物の再評価・コンバージョンの動きがみられたと言える。それに呼応して、EUは地域開発戦略の一環として産業遺産の利活用にも積極的な姿勢を見せており、製鉄所のリノベーション・利活用は、EUの地域開発補助金を獲得する手段としても位置付けられている<sup>29</sup>。このような施策も介し、EUの地域開発政策とチェコの産業遺産化がつながりあっていると見ることができる。やはりチェコの産業遺産の利活用はEUの思想にチェコも統合されていくプロセスと読み替えることも可能であろう。このように、産業遺産のコンバージョンにも、チェコがめざす西欧化・EU化という目標が反映されていると捉えることもできよう<sup>30</sup>。

## おわりに

以上のように、ポーランドとチェコの技術史・経済史の展示内容や産業遺産の保全・利活用を概観してみると、ポーランドとチェコが西欧、もしくは中欧の一員であり続けたという歴史観に支えられていたことが窺える。隣国に翻弄されたいわゆる「小国」であるためか、一国のみで完結するような歴史像を描くことは難しい。少なくとも西欧からの技術移転や投資を肯定的にとらえ、逆に東欧と位置づけられた時代やロシア（ソ連）からの影響を軽視しようとする歴史観が支配的であったと言える。もちろん、この歴史観自体、普遍的、継続的ではありえず、今後の展開次第では変わり得るものであろう。

ヘリテージ化はものの自体を浄化する、もしくは無臭化させる効果があると述べたのは、荻野昌弘氏であった<sup>31</sup>。チェコの産業遺産が文化財、そして世界遺産へと昇華していくとき、ある意味、社会主義という過去の無臭化を伴っているのではなかろうか。少なくともそれを正当化する「言説」が補強されている。それに対して、興味深いことに、その無臭化に対応して、ドイツやオーストリアに支配された第一次大戦以前の過去も、EUへの加盟を背景に、社会主義とは別の意味で無臭化され、公認されていった。このようなポーランドとチェコの過程は、台湾史において戦後の国民党の圧政を媒介にして日本の植民地時代の産業遺産や近代建築の保存が正当化され、それらが観光資源化されていく過程と平行な関係にあると見ることもできよう。松浦雄介氏は、産業遺産の遺産化・審美化について「それら（産業遺産など：引用者）は「負の遺産」を抱える場所であり、遺産化や審美化は、まるでその代償であるかのように、それらの負の遺産を洗い流そうとする<sup>32</sup>」と述べているが、このテーゼはとりわけ遺産化されコンバージョンされた産業遺産に成り立つであろう。コンバージョンされた製鉄所や紡績工場には、ナチへの協力や環境破壊・社会主義など、チェコ・ポーランドの工業化が負わされてきた負の歴史を清浄し、市場経済国であり、かつEUの一員たる両国のアイデンティティを再確認する場として機能しているからである。

工場跡や炭鉱跡を新用途に転用・活用することは、それらに新たな息吹を吹き込むことができる点で、否定することはできない。その先例としてイギリス・ドイツなどEUの事例が引き合いに出されていた。ポーランド・チェコの産業史を西欧からの技術移転の文脈から肯定的に評価し、産業遺産の重要性を強調する一方、ポーランド・チェコの産業史が持つ負の側面を浄化する機能も担っている。しかし、双方ともに共通するのは、社会主義時代の忘却にあるのではないか。産業遺産化の過程で追憶されるのは、社会主義時代の歴史より主に独立以前のオーストリアやドイツからの技術移転や投資の歴史であった。逆に転用によってその歴史を利用し未来を創造する際に強調されることは、西欧と同列の歴史や課題を共有しながらも、逆に西欧ではなかった歴史を忘れ去ることである。

だからといって、社会主義時代の歴史や遺構を抹殺することは、実際には困難も伴う。むしろ、西欧からの観光客にとって、国民が忘却したい社会主義時代の遺構にこそ、自国では見られない価値を見出し、観光資源になりうるものと受け止められている。少なくとも現時点で、オストラヴァの産業遺産群は、外国人にとって人気のある観光地とはみなされず<sup>33</sup>、むしろチェコ人や隣国のポーランド人にとって人気の観光スポットになりつつある。西欧の観光客にとって、ポーランドやチェコの産業遺産はいわば西欧のコピーと映るためか、魅力が感じられないのかもしれない<sup>34</sup>。むしろ、国外からのまなざしとしては、中世の遺産<sup>35</sup>とともに、社会主義時代の遺構の方が新鮮で魅力的に映るのかもしれない。すなわち、ポーランドとチェコにとって「西欧」の一部、少なくとも「中欧」でありたいとする自己イメージと、「旧社会主義国」もしくは「東欧」に位置づけようとする他者からのイメージとが併存し対立していることが窺える。両国は内外二重の異なったまなざしにさらされており、その両義性に目配りする必要がある。しかし、このいわゆる社会主義遺産の課題については別の論考

で検討すべきテーマであろう。

【注】

- <sup>1</sup> Tunbridge J. E. and G. J. Ashworth, *Dissonant Heritage: The Management of the Past as a Resource in Conflict*, John Wiley & Sons, 1996, pp.5-6.
- <sup>2</sup> Smith, Laurajane, *Uses of Heritage*, Routledge, 2006, p.11によると、遺産を保存すべきであるという言説を「公認された遺産の言説 (Authorized Heritage Discourses)」と呼び議論の俎上に乗せている。
- <sup>3</sup> ジョン・アーリ [加太宏邦訳] 『観光のまなざし：現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局、1995年、第6章参照。
- <sup>4</sup> たとえば、中国にとって「近代」とは侵略の歴史であり、近代化は「現代化」と読み替えられることがその一例と言える。また、植民地時代を経験した国（たとえば韓国や台湾）では、産業遺産や近代建築は宗主国支配の象徴になり得よう。
- <sup>5</sup> Tunbridge and Ashworth, *op. cit.*; Ashworth, G. J., Brian Graham and J. E. Tunbridge, *Pluralising Pasts: Heritage, Identity and Place in Multicultural Societies*, Pluto Press, 2007; Merrill, Sam and Leo Schmidt eds., *A Reader in Uncomfortable Heritage and Dark Tourism*, Brandenburgische Technische Universitaet, 2009, [www.tu-cottbus.de/fakultaet2/de/denkmalpflege/lehre/studenten-projekte/uncomfortable-heritage.html](http://www.tu-cottbus.de/fakultaet2/de/denkmalpflege/lehre/studenten-projekte/uncomfortable-heritage.html)
- <sup>6</sup> もちろん、これは先進国の産業遺産でも多かれ少なかれ起こり得る。イギリスの産業遺産のいくつかはイングランドに征服された過去を持つウェールズ地域に立地するため、とるべき立場によってはイングランドに征服された過去の象徴にもなり得るし、ドイツのフェルクリンゲン製鉄所はナチ支配の忌まわしい過去を背負っている。ベルギー・ワロン地域の炭鉱でも、世界遺産登録の理由の一つとして1956年の炭鉱事故の過去をわざわざ指摘している (“Major Mining Sites of Wallonia” <http://whc.unesco.org/en/list/1344>)。日本についても、「明治日本の産業革命遺産」での世界遺産登録を目指している端島炭鉱（軍艦島）には、朝鮮人の強制連行・労働という負の歴史を抱えているし、同じく登録を目指している大牟田市の三池炭鉱では、有名な労働争議や三川坑の炭塵事故など、その地域社会に禍根を残すような暗い過去もある。以上のように、先進国の産業遺産でも不協和音や両義性を伴うことは指摘されてよい。ただその不協和音は当該国民意識を動揺させるというより、国民意識を前提にその栄光だけでなく恥部にも目を向けさせることにある。その意味で、当該国の建国・独立に基づく歴史観などに対立し、その国の歴史やアイデンティティ自体を揺さぶるような不協和音とは質を異にしているとも言える。
- <sup>7</sup> “Taipei Declaration for Asian Industrial Heritages”, 2012. <http://ticcih.org/about/charter/taipei-declaration-for-asian-industrial-heritage/>
- <sup>8</sup> スターリン様式については、ディヤン・スジック [東郷えりか訳] 『巨大建築という欲望—権力者と建築家の20世紀』紀伊国屋書店、2007年、第3章；井上章一 『夢と魅惑の全体主義』文春書院、2006年、第5・6章など参照。
- <sup>9</sup> Poland, *Lonely Planet*, 7<sup>th</sup> edition, Lonely Planet Publication, 2012, p.55.
- <sup>10</sup> オストラヴァの産業遺産に関する邦語論文としては宮崎信二「チェコ共和国・オストラヴァにおける産業遺産—旧東欧の産業遺産 (2)」『名城大学経済・経営学会会報』No.43。
- <sup>11</sup> Klát, Jaroslav, and Miloš Matěj, *National Cultural Heritage Site Michal/PetrCingr Coal Mine, Ostrava*, pp.43-45.
- <sup>12</sup> *Ibid.*, pp.11-13.
- <sup>13</sup> *Ibid.*, pp.23-29.
- <sup>14</sup> *Ibid.*, pp.35-37.
- <sup>15</sup> Kučová, Věra and Miloš Matěj, *Industrial Complexes in Ostrava: To Be Nominated for Inscription on the UNESCO World Heritage Sites*, National Institute for the Protection and Conservation of Monuments and Sites, 2007, pp.34-38.



- <sup>16</sup> *Ibid.*, p.44.
- <sup>17</sup> *Ibid.*, p.33.
- <sup>18</sup> Carba, Tomáš, Alexandr Koráb and David Borek, *Legacy*, Museum of Communism, 2003, pp.57-58.
- <sup>19</sup> “EXPO 58” [www.praha7.cz/About-Prague-7/Places-of-interest/ARCHITECTURE/area1215](http://www.praha7.cz/About-Prague-7/Places-of-interest/ARCHITECTURE/area1215)
- <sup>20</sup> Carba, Koráb and Borek, *op. cit.*, p.57.
- <sup>21</sup> “EXPO 58” [www.praha7.cz/About-Prague-7/Places-of-interest/ARCHITECTURE/area1215](http://www.praha7.cz/About-Prague-7/Places-of-interest/ARCHITECTURE/area1215)
- <sup>22</sup> 2001年にEXPO58が改修された後、2008年に「ブリュッセルの夢 (Brusseles Dreams)」という展示が行われるなど、2000年代に入ってブリュッセル・スタイルへの再評価が行われている。こうしたことから分かるように、社会主義時代の中でも1950年代末からプラハの春までの時期はチェコ史において明るいイメージがあるのであろう。
- <sup>23</sup> Kučová, Věra and Miloš Matěj, *op. cit.*, pp.55-57.
- <sup>24</sup> Dvořáková, Eva, “Industrial Heritage and the Limits to its Institutional Conservation in the Czech Republic,” in Fragner, Benjamin, ed., *Průmyslové Dědictví/Industrial Heritage*, Prague, 2008.
- <sup>25</sup> Šenberger, Tomáš, “The Czech Lands as Part of the European Industrial Area”, in Fragner, ed., *op. cit.*
- <sup>26</sup> Volf, Petr, *The Story of Dolní Vítkovice*, Prostor-architectura, 2013, p.51.
- <sup>27</sup> *Ibid.*, pp.67-68.
- <sup>28</sup> レルフ・エドワード [高橋岳彦ほか訳] 『都市景観の20世紀』筑摩書房、2013年（初版は1999年）、第10～11章。
- <sup>29</sup> Slach, Ondřej, “Governance of Inner City Regeneration: The Case of Ostrava,” [www.ufz.de/export/data/400/39023\\_WP5\\_Governance\\_Ostrava\\_27042011-4.pdf](http://www.ufz.de/export/data/400/39023_WP5_Governance_Ostrava_27042011-4.pdf)
- <sup>30</sup> ポーランド・ウッジの産業遺産利活用についてもあてはまる。ウッジは繊維産業で栄えた町であり、かつての繊維工場跡が博物館やManufacturaと呼ばれる複合施設（ショッピングセンター・映画館・美術館・ホテルなど）に再利用されている。それらが保存されるべき歴史的意義としては、ロシア領時代（19世紀後半）のドイツやユダヤ人による投資と、それによって牽引された都市の発展が強調される。ロシア領であったとはいえ、西欧やユダヤ人からの投資は世界（特に西側）に開かれたポーランドというイメージとも合致する。また産業遺産をコンバージョンして再開発されたManufacturaも、フランス企業による再開発であり、100年を隔てても、西欧の影響が強い時代という点で連続しているとも見てきよう。このように、ウッジにもオストラヴァと同じような歴史的背景が読み取れよう。
- <sup>31</sup> 荻野昌弘編『文化遺産の社会学—ルーヴル美術館から原爆ドームまで』新曜社、2002年、第1章。
- <sup>32</sup> 松浦雄介「きたないはきれい—近代の廃墟の遺産化／審美化をめぐる」『現代思想』39号、世界思想社、2012年春、12頁。
- <sup>33</sup> 英語圏と日本の主なガイドブックである*Lonely Planet*や『世界の歩き方』には、オストラヴァ市自体の記述はなく、一部記載のある*Eyewitness Travel*でも、中世の風情を残す市街の説明に終始し、産業遺産群の説明はないのが実情である。
- <sup>34</sup> コーヘンは、観光には親密性（familiarity）と異質性（strangeness）・新規性（novelty）の双方とも必要であり、それぞれの重要度の違いによって多様な観光形態に分けられると考えた。異質性は驚きであり、新鮮と感じさせる体験である。この議論を踏まえれば、異質性を確保しつつ、近接性による便利さも確保できる観光地が人気を集めることになる。Cohen, Erik, “Toward a Sociology of International Tourism”, in *Social Research*, 39-1, 1972.
- <sup>35</sup> 中欧では、各都市の旧市街とともに、中世の鉱山遺跡が世界文化遺産に登録され、人気の高い観光地になっている。ポーランドのヴィエリチカ岩塩鉱、チェコのクトナ＝ホラ、スロバキアのパンスカ＝シュチャヴニツァがそれにあたる。

# クラクフの「負の遺産」を巡って

ークラクフ歴史博物館（シンドラーの工場）を中心にー

静岡文化芸術大学 文化政策学部

文化政策学科 准教授 加藤裕治

## 1. はじめに

ポーランドの都市クラクフは、11世紀から16世紀までポーランド王国の首都として栄え、現在でも人口70万人を超えるポーランドの古都として知られる街である。また一方で、第二次世界大戦下、ナチス・ドイツの侵攻を受け、その後いわゆる総督領(1)の首都となり、ポーランド人の行政や自治も認められないドイツ統治下におかれた街でもある。

こうした歴史的経緯もあり、クラクフはポーランド王国の古都としての顔を持つ一方、第二次世界大戦の負の遺産・記憶を担う地域としての多重性をおびた独特の街の様相を呈している。またよく知られているように、アウシュヴィッツ（ポーランド名:オシフィエンチム）にあるアウシュヴィッツ・ビルケナウ国立博物館へもバスで2時間程度の位置にあり、現在、こうした負の遺産を訪問する人々の拠点ともなっている。そのため、今回の「旧東欧地域における産業遺産の保全と利活用」に関する研究プロジェクトにおいて、テーマを「負の遺産・負の記憶」として、特に第二次世界大戦をめぐる負の記憶を継承する遺産の現在の状況を視察・調査してきた。

こうした点を踏まえ、本研究ノートでは、現在のクラクフの状況とともに、負の遺産の現状を簡潔に報告する。ただし、アウシュヴィッツおよびビルケナウについては、これまでも多くの書籍が出版され、歴史的な側面からだけでなく、現在の状況についても相当の言及がなされている。そのため、本研究ノートでは、主にクラクフ市内の状況に絞って報告を行う。特にクラクフ歴史博物館(Historyczne Miasta Krakowa)の拠点の一つとしてオスカー・シンドラーのホーロー工場(Fabryka Schindlera)がミュージアムとして2010年にオープンしているが、映像などを含むマルチメディア技術や各種の復元や再現の展示が多用されており、負の記憶を考察する側面からも興味深い場所となっている。このミュージアムを中心に、負の遺産や負の記憶の新たな継承方法が見られる場所を中心として、以下、訪問時の状況を簡潔に報告したい。

## 2. クラクフの現状（駅前および旧市街地）

今回、ポーランド国内の移動には鉄道を利用した。そのためクラクフ本駅に到着し、クラクフの街に入るようになった。駅前は非常にきれいに整備されており、旧駅舎を残した広大な駅前広場に加え、巨大ショッピング施設と洗練されたデザインホテルがあることが印象的

であった（写真1）。このあたりにも世界遺産都市としての発展の一端を垣間見ることができる。ただし、旧来の歴史の香りを残すトラムも依然、市内を縦横に走っており（写真2）、その対比は現在のポーランドの状況の象徴のようでもあった。

駅前のショッピング施設（Galeria Krakowska）は2006年に開業している。またホテルはオーストリア・ウィーンに本社のあるVienna international Hotel&Resortsグループのandel's Hotelであった（写真3）。このグループは1989年に創設され、ポーランドのウッチでは繊維工場を改築した産業遺産活用型のホテルを経営するなどユニークな試みを行っている（2）。またオーストリア、ポーランド以外にドイツ、チェコ、ロシア、クロアチア、ルーマニアなどにもホテルを進出させており、こうしたショッピングモールやホテルチェーンの展開はヨーロッパの経済圏の考え方を知る上でも興味深いものがある。

また1978年に第一回目の世界遺産として登録された旧市街（クラクフの歴史地区）は、さすがに多くの人でにぎわいを見せていた。特に有名な中央市場広場にある織物会館周囲は観光客が多数押し寄せており、クラクフの遺産の魅力が維持されていることを感じた。またこの広場に面した改築中の建物には、それを覆うカバーに韓国メーカーSamsungのカメラの広告があった（写真4）。世界遺産ということもあり目立った広告が無い中、大変目を引いており、現在の韓国メーカーの勢いを示すようでもあった。なおポーランドのショッピングモールをいくつか回り家電販売店に入ったところ韓国メーカーの製品が多く、それ以外はあまり取り扱われていないのも印象的であった。

さて、この中央広場は各種の観光ガイドに掲載されている様子とあまり変化はないが、一点注目するものをあげるとすれば、2010年に織物会館の東側を中心として地下に設立された地下博物館（Podziemia Rynku）であろう。

この場所は2005年から2010年にかけて発掘調査が行われ、その成果をまとめた博物館となっている。内容は11世紀ごろの墓地、12世紀ごろの工房の再現、また15世紀ごろのクラクフの街全体のミニチュア展示など、実際の遺跡と共に各種の復元や再現が組み合わされた展示となっていた。また至るところにマルチメディア技術を利用した各種の映像表現や音声を組み合わされており、単に展示を見るだけでなく、一種のアトラクション的な体験を引き出そうとする試みが行われている博物館であった。こうした博物館の内容や展示は、観光の中心ともいえる中央市場広場の地下というロケーションもあり、ツーリズムとの兼ね合いの中で展示方法や内容の検討が為されているとの印象を持った。なお地上部分の中央市場広場には噴水があるが、中央のガラス部分はこの地下博物館の採光用の窓になっている。そのため外部から唯一、地下にある博物館の存在が感じられる場所となっている（写真5）。

### 3. クラクフ歴史博物館（シンドラーの工場）について

2010年にオープンしたクラクフ歴史博物館の拠点のひとつであるシンドラーの工場（写真6, 7）は、旧市街の広場を南に下り、ヴァヴェル城の横を通りすぎ、ユダヤ人街として有



名なカジミエシュ（Kazimierz）地区から更にヴィスワ（Wista）川をわたった Lipowa 通りにある。旧市街地からはタクシーで15分程度といった距離にある。

なお、クラクフ（市）の歴史博物館はKrzysztofor宮殿を中心に14拠点で構成されており、このシンドラーの工場のミュージアムは先の2節で紹介した地下博物館とともに、その拠点の中で最も新しいものの一つである。また先のLipowa通りはいわゆる第二次世界大戦中にクラクフ・ゲットーが設置されたポドグージェ（Podgórze）地区に位置している。クラクフ・ゲットーは1941年3月に設定され、クラクフおよびその周辺のユダヤ人およそ1万5千人が収容された場所として知られている（3）。

さて、オスカー・シンドラーと彼の工場を一躍有名にしたのは、スティーヴン・スピルバーグ監督の『シンドラーのリスト（Schindler's List）』（公開1993年／日本公開1994年）というのは言を俟たないであろう。実際にこのシンドラー工場、および先にも言及した旧来からのユダヤ人街であるカジミエシュ地区は映画のロケ地として使われた場所である（4）。

なお本ミュージアムを実際に訪問したところ、クラクフ市の歴史博物館のひとつであるため、映画との関わりはほとんど見当たらなかった。後にも述べるように、展示自体は第二次世界大戦におけるクラクフの状況を伝えることをテーマとしており、オスカー・シンドラー自体についても言及されているのはミュージアム全体の中のごく一部である。

では、実際の展示内容について簡単に紹介したい（5）。

このミュージアムは主に1935-1945年におけるクラクフの歴史を、3つのフロアと27の展示テーマから紹介・解説するものになっている（図1）。特に本ミュージアムの特徴は、当時の物品、写真、戦争中のドキュメントを展示するだけでなく、各種の再現や復元物の展示、またマルチメディアを利用した映像と音からなるプレゼンテーションが多用されていることである。つまり、単に知識を得させようとするだけでなく、見学者の体験に訴えかける展示方法がとられている。

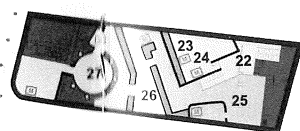
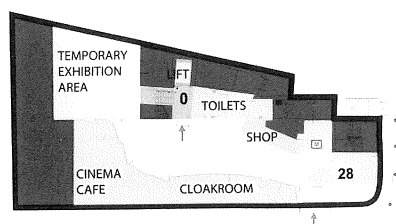
1階（Ground Floor）にあるメインホールは、ミュージアムの入口でありこの工場の歴史への言及がなされており、さらにグッズや書籍などが販売されているショップやカフェが併設された空間になっている（写真8）。

この一階の入口から2階（First Floor）に上がるとまず最初に、第二次世界大戦前のクラクフの写真スタジオが再現された部屋から展示が始まる（写真9）。そこでは1918年から39年までのクラクフの歴史が紹介されている。例えば、キリスト教徒とユダヤ教徒が市民ホール前で共に並び撮影された写真等、何気ないクラクフの日常が撮影された写真等が飾られている。

次に、暗室をくぐり抜けると巨大なステレオスコープが置かれている（写真10）。ガイドブックによれば、これは1920年から70年までクラクフのSzczepańska通りにあったものが、現在このミュージアムに所蔵されているとのことである。なお、きちんと作動するため、映し出される映像を見ることが出来る。またこのステレオスコープの展示は戦争前には芸術の

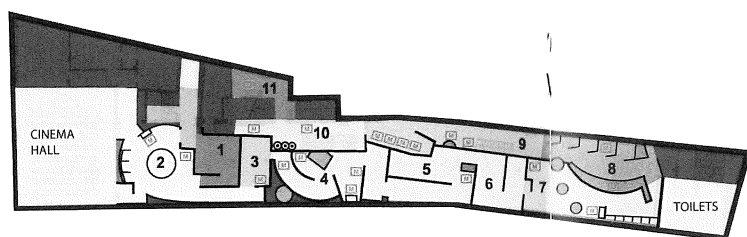
Floor plans of the permanent exhibition  
Kraków under Nazi Occupation 1939–1945

GROUND FLOOR



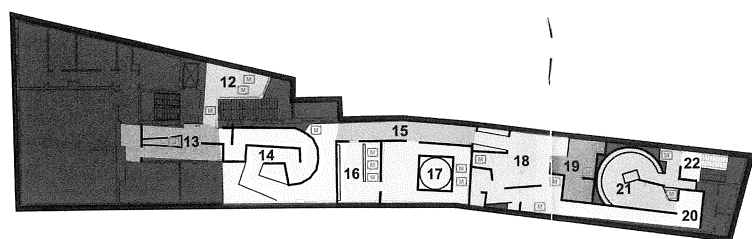
- 0 Entrance to the exhibition
- 28 The main hall
- 22 German propaganda
- 23 At the barber's
- 24 The basement
- 25 Last months of the occupation
- 26 Enter the Red Army
- 27 Room of Choices
- M Multimedia presentations

FIRST FLOOR



- 1 At the photographer's
- 2 Stereoscope
- 3 Railway station waiting room
- 4 Outbreak of war
- 5 City square I
- 6 Sonderaktion Krakau
- 7 General Government
- 8 The terror
- 9 Everyday life 1940–1941
- 10 Railway station
- 11 Pillage and Plunder
- M Multimedia presentations

SECOND FLOOR



- 12 Labour office
- 13 Planty Garden ring
- 14 The Ghetto
- 15 Everyday life, 1943
- 16 Schindler's reception desk
- 17 Schindler's office
- 18 City square II
- 19 The Polish Underground State
- 20 Liquidation of the Ghetto
- 21 Płaszów Camp
- 22 German propaganda
- M Multimedia presentations

図1 クラクフ歴史博物館（シンドラーの工場）のフロア図  
(引用：2013, "Oskar Schindler's Enamel Factory", Muzeum Historyczne Miasta Krakowa)

街であったクラクフのイメージを呼び起こす意味があるとのことである。

さらに次には鉄道駅の待合室をイメージした展示室が続く（写真11）。ここから薄暗く、細い、鉄とコンクリートで続く通路が作られているが、それは第二次世界大戦開始の雰囲気表現したものとして作られているとのことである（写真12）。また展示では、前線の写真や、占領下となってしまったクラクフが紹介されている。

また続いて、ポーランドの製造した小型戦車（TKS tankette）が展示されていた（写真13）。ガイドブックによれば、この戦車は保存されていた設計図から造られたレプリカであるとのことである。これは小型の偵察用の戦車であり、イギリス製の戦車をモデルに1930年代に生産されたものである。

このスペースを通り抜けると、市民広場 I と名付けられた展示となる。そこでは占領後 1 か月を経過したクラクフがテーマとされており、当時の生活を撮影した写真などに加え、

1939年当時のトラムの再現展示がなされている（写真14）。また写真にあるように、天井からはナチス・ドイツのハーケンクロイツ旗が下げられ、ドイツの占領下となったクラクフの状況を実感的に体験させるような展示の工夫がなされている（写真15）。

こうした展示方法は、さらに次のポーランド総督領下で首都となったクラクフの時代の展示にも利用されている。この部屋はマルチメディアによるプレゼンテーションによってその時代を想起させるようになっていると共に、展示室の柱にドイツの兵士の行進風景が貼られたり（写真16）、床はハーケンクロイツの模様のタイルで覆われたりしている（写真17）。こうした展示内容はクラクフの街が、ナチス・ドイツに取り囲まれてしまった状況をイメージさせるものであると感じた。

またこの展示の先には、Hauptbahnhof Krakauとドイツ名に変えられたクラクフ駅をテーマとした展示が現れる（写真18）。この展示は、クラクフが第三帝国と東方の間のルートにおいて戦略上の結節点であり、軍隊や市民両者の移動にとっての重要なコミュニケーションの拠点になっていたことを示す意味があるようである。また列車を模した展示があり、その窓部分に当時の映像が流れる仕組みとなっている（写真19）。

次に、2階から3階（Second Floor）に上がる階段がある（写真20）。この階段はゲットーに連れて行かれるユダヤ人と、このミュージアムの見学者が重ね合わされる効果が期待されているようである。またこの階段は映画『シンドラのリスト』において、シンドラのオフィスに向かう際に使われたことで知られている。しかし、この階段は、戦後の1949-50年ごろに作られたようであり、戦争中には存在しなかったという。

またこの階段を上がると、ゲットーとその内部にあった住居を再現した展示が現れる（写真21, 22）。また、実際にゲットーで撮影された写真等が展示されている。更に1941-43年の展示では、いわゆるソビエト軍によってポーランドの捕虜将校が虐殺されたカティンの森の事件の展示もある。

それらの展示を過ぎると、オスカー・シンドラを取り上げたシンドラ執務室の展示となる（写真23）。このシンドラのオフィスはオリジナルのインテリアが展示されている。例えばデスクの上には、彼と彼の家族を撮影した写真や当時の新聞などが並べられている（写真24）。また机の後ろの壁に、漆喰の技術で作られたドイツでの都市の名が刻まれたヨーロッパ地図がかけられている。その地図はヤルタ会談後の塗り替えられたようであるが、保存の専門家の仕事によって、戦争当時の状態に戻されているとのことである。

またその執務室の部屋の中央には、ホーロー鍋を中心とした工場生産品で満たされた巨大なガラスケースが展示されている（写真25, 26）。この非常に印象的な展示はモノの集積により見学者にさまざまな考えを引き起こさせ、アウシュヴィッツの靴や義足の展示などに通じるものがあり、非常に興味深いものであった。

さらにこのオフィスを出て順路を進むと、ショーウィンドーが左右にあるクラクフの商店街を模した通路を歩くことになる（写真27）。それを通り抜けるとクラクフの住人の等身大の写真を配した透明なガラス展示がある市民広場Ⅱの展示室が現れる（写真28）。例えば、



写真28の左手に写っている少年の展示には、学校へ行く代わりに新聞売り等で生計を立てるといった当時の子供たちの状況が書かれている。このように各種のイメージを通じて、戦時中のクラクフの街の様子と市民生活を伝えることが目的とされている。

次は1943年のゲッソー解体の展示から、ゲッソーを追われたユダヤの人々が送られたプワシュフ強制収容所（Płaszów Camp）の展示となっている（写真29）。この強制収容所は映画『シンドラーのリスト』の舞台ともなったため、非常に著名なものとなった。写真にあるようにゲート部分を模した展示や、収容所の全景の写真などからなり、床には石が敷き詰められ、他の展示（室）とは異質な印象を感じさせる場所であった。

この後、3階から1階に下りる階段があったが、その壁面にはドイツのプロパガンダポスターが貼られており（写真30）、当時のアンチセミティズムやアンチソビエトの様子的一端を知ることができるようになっている。この後、終戦直前の状況、またソビエト軍の入場といったテーマで展示がなされ（写真31）、最後に「選択の部屋（Room of Choices）」が現れる。この展示室は占領下にあったクラクフの状況に対するサマリー的な位置づけが与えられている。部屋の中には数個の回転するシリンダーが置かれ（写真32）、そのシリンダーには行動しない態度と共感の欠如についての言葉が記されており、占領下のクラクフの人々が直面した困難な状況を想起するものとして置かれているようである。

このように、シンドラー工場のミュージアムの展示は、第二次世界大戦のクラクフの時間軸に沿っているのだが、その出来事を客観的に羅列して見せようとするのではなく、マルチメディアや復元や再現を多様した展示のデザインを通して、その時代性を見る人ごとにさまざまに感じさせ、想起させようとする意図を感じた。また館内は非常に入り組んだ構造になっており、次にどのような展示が現れるかわからない構造になっている。こうした仕組みは、実際には未来がわからないという時間間隔、つまり次に起こることを本来、知りえないという時間・歴史感覚を、展示の上に反映したものではないかという印象を持った。本ミュージアムは工場という遺産建築と、クラクフをめぐる記憶をどう継承するかに対する、最新の試みの一つとして興味深いものであった。

#### 4. シンドラーの工場からゲッソーの英雄広場へ

次に、このシンドラーの工場の周囲の状況について簡単に言及しておきたい。

このシンドラーの工場の隣接地には、MOC AK（Museum of Contemporary Art in Krakow：クラクフ現代美術館）が併設されている（写真33、34）。残念ながら時間の都合上、内部の展示を見ることはできなかったのだが、この美術館は2011年5月に開館し、最新の国際的なアートの展示を中心に、教育、また研究および出版活動を行う場所として機能しているようである（6）。また写真にもあるように図書室や読書室（写真35）やカフェ（写真36）も併設されており、現代美術館にふさわしいデザインセンスをもった場づくりがなされている。

訪問時、このシンドラーの工場と現代美術館の場所から、ゲットーの英雄広場 (pl. Bohaterów Getta) 方面へと向かった。なおその際、途中のZabłocie駅ガードの手前には、ポーランド人の現代アート作家であるミロスワフ・バウカ (Miroslaw Bałka : 1958 - ) の作品「アウシュヴィッツヴィエリチカ (AUSCHWITZWIELICZKA)」があった (7) (写真37)。この作品は人が内部を通れるトンネル状になっており、その上部には“AUSCHWITZWIELICZKA”の文字が彫られ、そこから採光されるデザインになっている。道路を歩いていると突然現れ文字が刻まれているのがわかるため、とても印象的であった。

さらにこの場所を通り抜け、少し進むとトラムの駅とその横に「ゲットーの英雄広場」が現れる (写真38,39)。この広場はクラクフ・ゲットーの中心の場所であり、強制収容所への出発点として利用された悲劇の場所である (8)。そのため、この広場には現在、メモリアルとしてのオブジェ作品が置かれている (写真40)。これはPiotr Lewicki とKazimierz Latakの両名により作成され2005年に完成したもので、大33と小37の計70の椅子のオブジェからなる作品である。また、この作品の意味は、誰もが犠牲者になりうる、ということを示唆しているとのことである (9)。なお、この広場の隅にある建物 (写真41 (右建物)) は、この広場がゲットー内にあった時から現存している建物であり、今回の訪問時には、その脇でアウシュヴィッツを訪問した著名人のパネル写真が展示されていた。

またこの広場の南側には、クラクフ歴史博物館の一つでもあるイーグル薬局 (Apteka

Pod Orłem (Pharmacy Under the Eagle)) がある (写真42,43)。この建物は1941-43年の間にゲットーの中にあり、ポーランド人のオーナーであるTadeusz Pankiewiczが経営していたものである。彼は“Die Apotheke im Krakauer Ghetto (The Cracow Ghetto Pharmacy)”という題名のゲットーにおけるドイツの行為を描いたドキュメンタリーを出版した人物として知られている。なお彼は、当時、ゲットー内で永続的に居住してよいとする許可を得ていたポーランド人であったとのことである。そのため彼は毎日、ゲットーの内部を目撃することができたのだという (10)。現在、このミュージアムはゲットーや強制収容所でのユダヤ人の悲劇を伝える展示がなされている。またクラクフの歴史博物館から

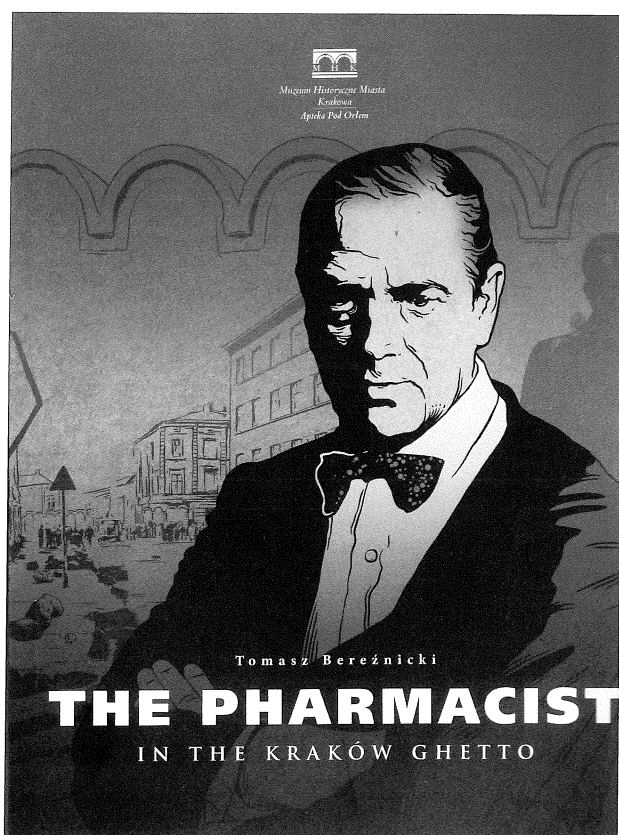


図2

は、クラクフの漫画家・デザイナーであるTomasz Bereźnickiの描く、Tadeusz Pankiewiczの活動と当時のゲットーの状況を描いたコミック（図2）が出版されている。

## 5 さいごに

今回、「旧東欧地域における産業遺産の保全と利活用」研究プロジェクトの一環として、クラクフとその周囲を巡ってきた。特に第二次世界大戦に関わる負の遺産について、アウシュヴィッツ・ビルケナウだけでなく、その遺産を保存し記憶を継承する取り組みが多数なされている状況を視察・調査することができた。またシンドラー工場の歴史博物館の開設といった大掛かりなプロジェクトだけでなく、クラクフが歴史的に負ってしまった街の中の様々な痕跡・遺産に対して、アートの活用など各種の取り組みを織り交ぜながら継承しようとする試みは示唆に富むものであった。こうした負の遺産の保存や記憶の継承の方法や意味、そこに関わるテクノロジーやアートのあり方などについては別稿を用意し、今後、より詳細に論じていきたい。

### 【註・参考文献】

- (1) ポーランドのこうした歴史についてはJerzy Lukowski and Hubert Zawadzki, 2001, *A concise history of Poland*, Cambridge University Press, (=『ポーランドの歴史』, 河野肇訳, 創土社, 2007) ちなみにポーランドは第二次世界大戦中、ドイツに占領された後、一部は第三帝国に統合され、中部地域はこれと異なり総督領として統治された歴史を持つ。
- (2) ウィーン・インターナショナルホテル&リゾートHP: <https://www.vi-hotels.com/en/> (2014年3月9日閲覧)
- (3) Feliks Yych(eds), 2004, *Pamięć*, Fundacja SHALOM, (=『ポーランドのユダヤ人』, 阪東宏訳, みすず書房, 2006, pp.143-44)
- (4) ポーランド政府観光局公式サイト: <http://www.poland.travel/ja/> (2014年3月9日閲覧)
- (5) なお本節におけるミュージアム内の展示についての解説は、ミュージアム内での説明に加え、歴史博物館が出版している英語版の博物館ガイド(2013, *Oskar Schindler's Enamel Factory*, Muzeum Historyczne Miasta Krakowa)を参照した。
- (6) クラクフ現代美術館HP: <http://en.mocak.pl/about-the-museum> (2014年3月9日閲覧)
- (7) Mirosław Bałka HP: <http://mirosław-balka.com/> (2014年3月9日閲覧)
- (8) 2010, *Guide to Oskar Schindler's Kraków*, Galicia, Jewish Museum, p49
- (9) ミネソタ大学HP: <http://www.chgs.umn.edu/museum/memorials/krakow/> (2014年3月9日閲覧)を参照。
- (10) Eugeniusz Duda, 2010, *Jewish Cracow, vis-à-vis/Etiuda*, pp.110-11.



2013年度 静岡文化芸術大学文化政策研究科長特別研究費

「旧東欧地域における産業遺産の保全と利活用に関する研究」報告書

発行日 : 2014年 3 月31日

発行人・著者：文化芸術大学 産業遺産研究会（文化政策学部文化政策学科内）

根本敏行、藤田憲一、四方田雅史、加藤裕治